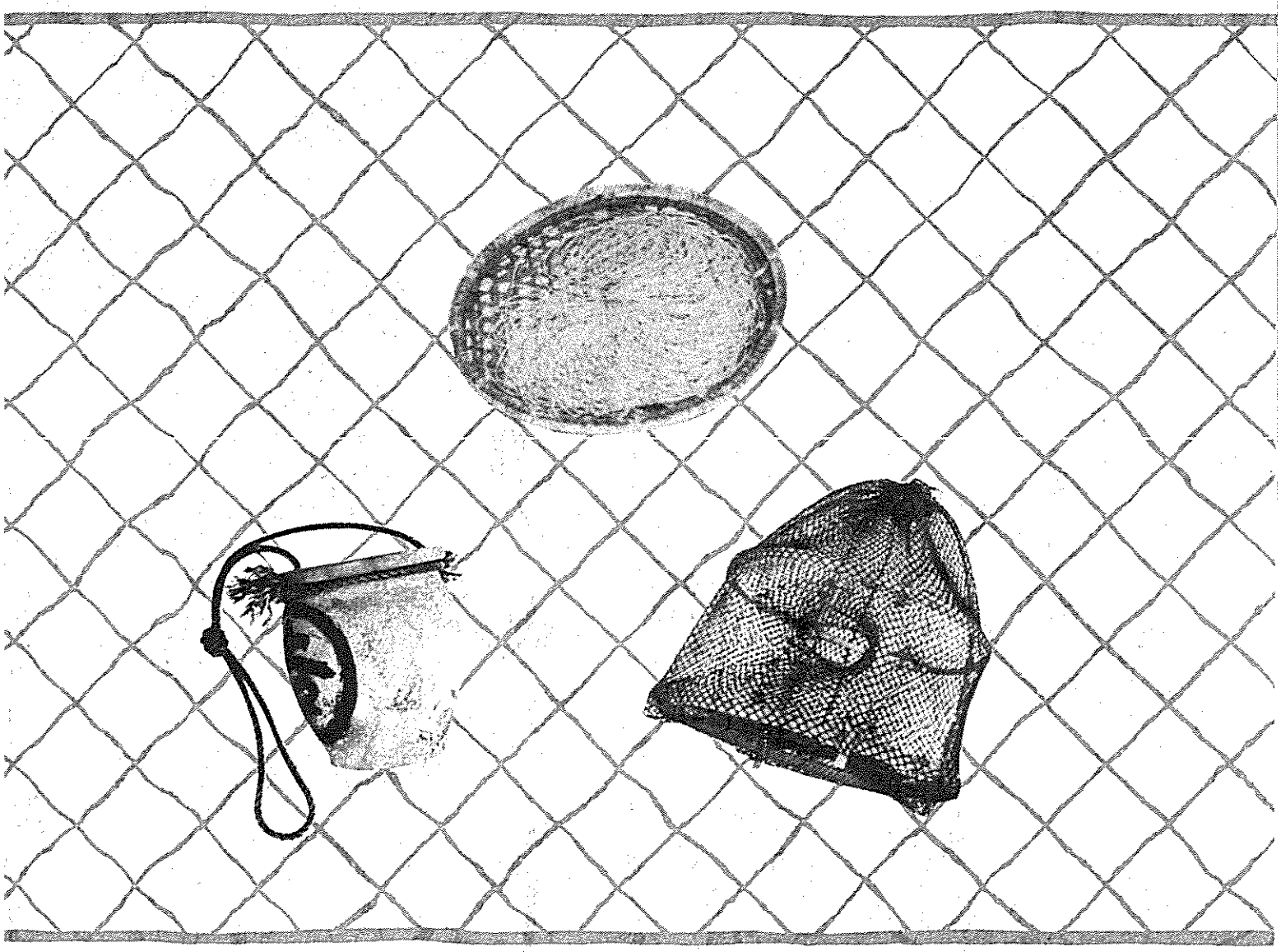
# 宮城県の伝統的漁具漁法　II

## 中　部　地　区



宮城県水産試験場

平成元年３月

漁村高齢者活力促進事業

# 宮城県の伝統的漁具漁法 II

## 中 部 地 区

宮城県水産試験場

# ○目　　次○

## 宮城県の伝統的魚具漁法II

### 中部地区


1．中部地区の概要 …… 1
2．各漁法の主漁期 …… 2

1．沖　　漁 …… 5

①カツオ一本釣り …… 5
②サ　メ　刺　網 …… 6
③アカウオ立釣り …… 7
④アカウオ刺網 …… 8

2．定置網漁 …… 10

①大　　網 …… 10
②イワシ落とし網 …… 12
③水晶型機械網 …… 13
④移　動　定　置 …… 16
⑤壺　　網 …… 17
⑥建　　網 …… 18

3．地　曳　網　漁 …… 20

①ロク（ムツ）の地曳網 …… 20

4．小　　漁 …… 21

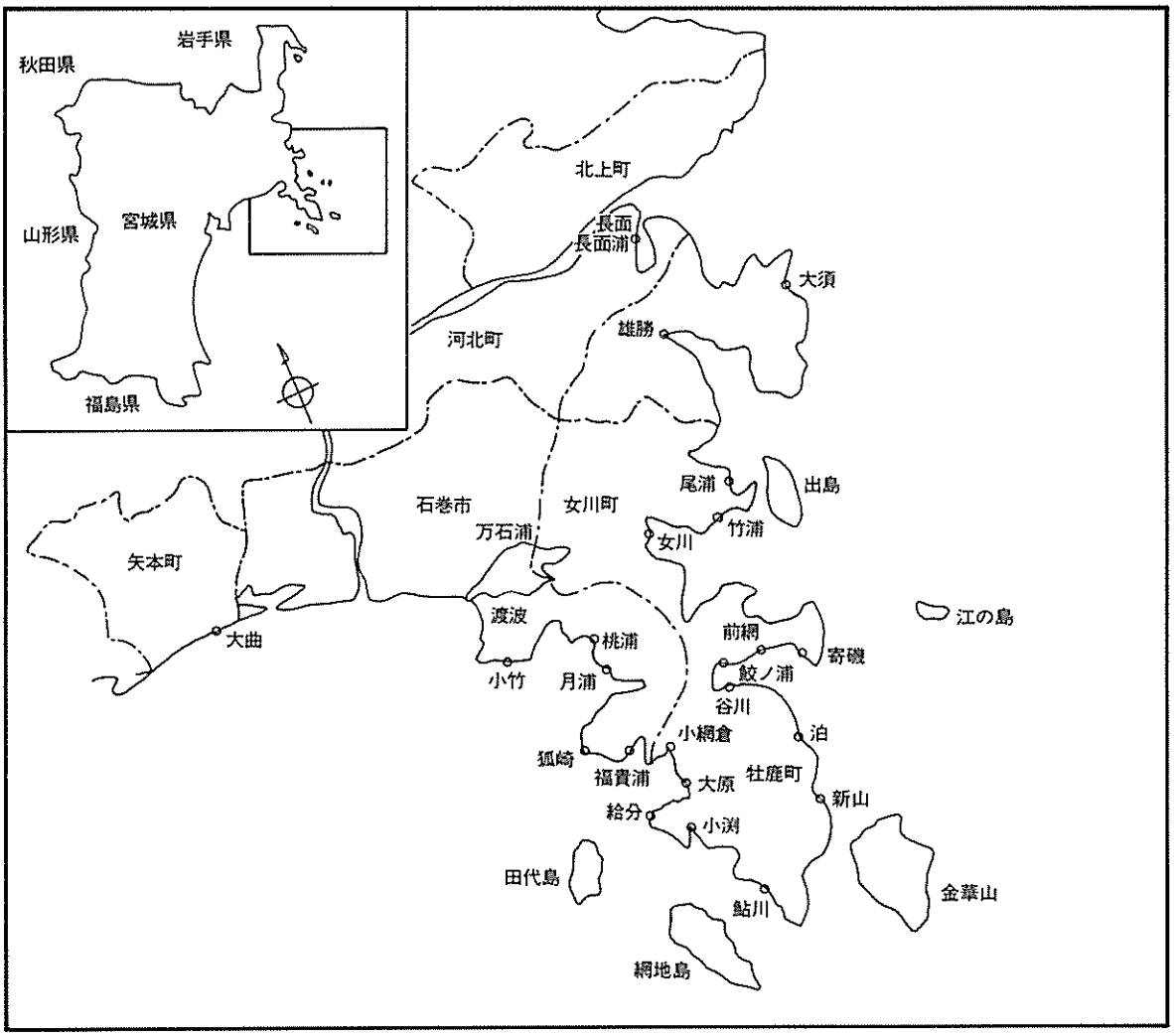
①イ シ ナ ギ 漁 …… 21
延　　縄 …… 21
曳　釣　り …… 22
釣り(小型) …… 23

釣り(大型) …… 24
②イカナゴ漁 …… 26
メロウドすくい網 …… 26
コウナゴ船曳き網 …… 27
コウナゴすくい網 …… 28
③エイの空釣り …… 29
④カレイ漁 …… 30
延縄 …… 30
刺網 …… 31
⑤クロダイトボシ …… 32
⑥コチ曳き網 …… 33
⑦コヨソザメ刺網 …… 35
⑧シラウオタモ漁 …… 36
⑨スズキ漁 …… 37
巻き網 …… 37
延縄 …… 37
⑩タナゴボイ網 …… 39
⑪タラ漁 …… 40
延縄 …… 40
刺網 …… 40
⑫ヒラメ漁 …… 41
刺網 …… 41
釣り …… 42
⑬ハゼ漁 …… 44
刺網 …… 44
釣り …… 45
⑭ハモ(マアナゴ)漁 …… 47
延縄 …… 47
胴 …… 47
釣り …… 48
⑮ブリ漁 …… 49
アオ縄 …… 50
立縄 …… 51
釣り …… 52
曳釣り …… 53

⑯マ　ス　縄 …… 55
⑰根　刺　網 …… 56
⑱小　　縄 …… 57
小　縄 (1) …… 57
小　縄 (2) …… 58
⑲根　魚　釣　り …… 58
⑳三　本　ヤ　ス …… 60
㉑マ　ダ　コ　漁 …… 60
釣　　り …… 62
延　　縄 …… 63
壷　　(1) …… 64
壷　　(2) …… 65
籠　　 …… 66
カ　　ギ …… 67
㉒イ　カ　釣　り …… 67
㉓カ　ニ　籠 …… 69
㉔クルマエビ漁 …… 70
ト　ボ　シ …… 71
かけ回し …… 71
㉕コ　シ　キ　網 …… 72
㉖ツ　タ　ナ　ガ　籠 …… 73
㉗4　本　ヤ　ス …… 74
㉘ア　ワ　ビ　漁 …… 75
カ　　ギ …… 75
スモグリ …… 77
㉙ウニ（ガゼ）すくい網 …… 78
㉚カ　ッ　ツ　ア …… 79
㉛ク　マ　デ …… 80

5．磯　　漁 …… 81

①磯ノリとり …… 81
②フノリとり …… 81
③ヒジキとり …… 81
④ワカメとり …… 81



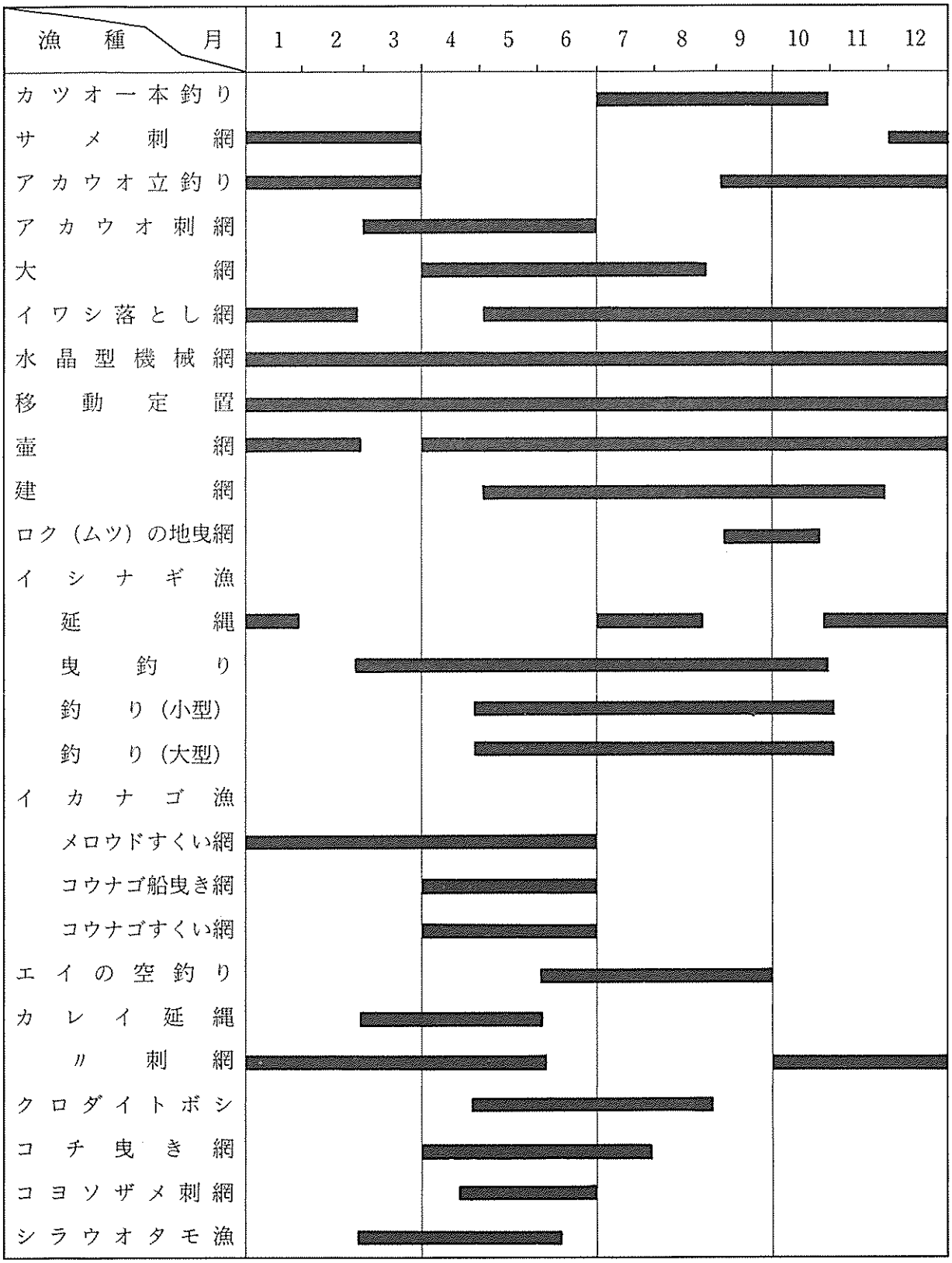

## 中部地区の概要

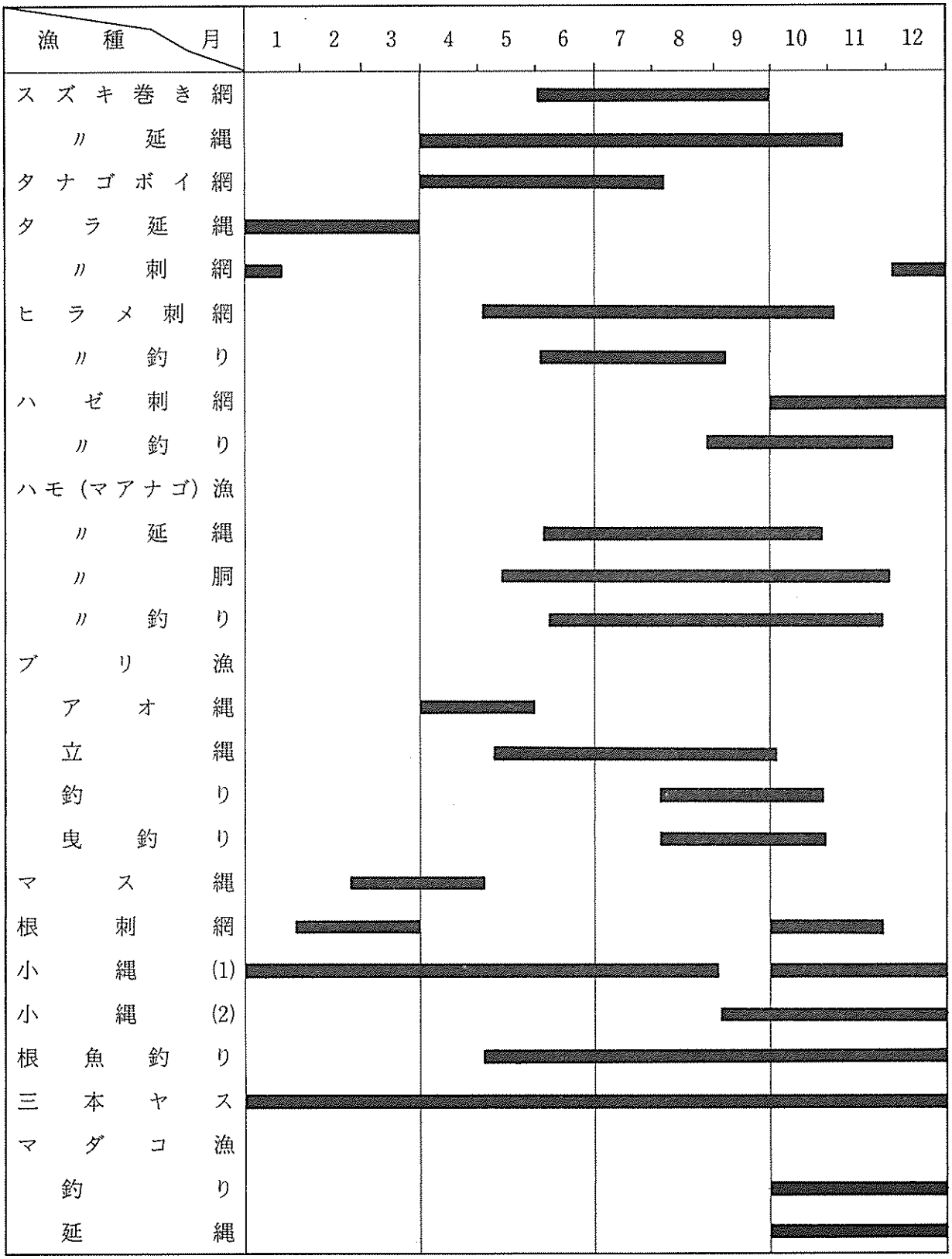
本海域は、本県中央部沿岸域に位置しており、新・旧北上川が栄養塩類の補給源をなし、また、河口域には藻場・干潟に覆われた入江を擁し、幼稚仔の発生・成育に好適環境を形成している。

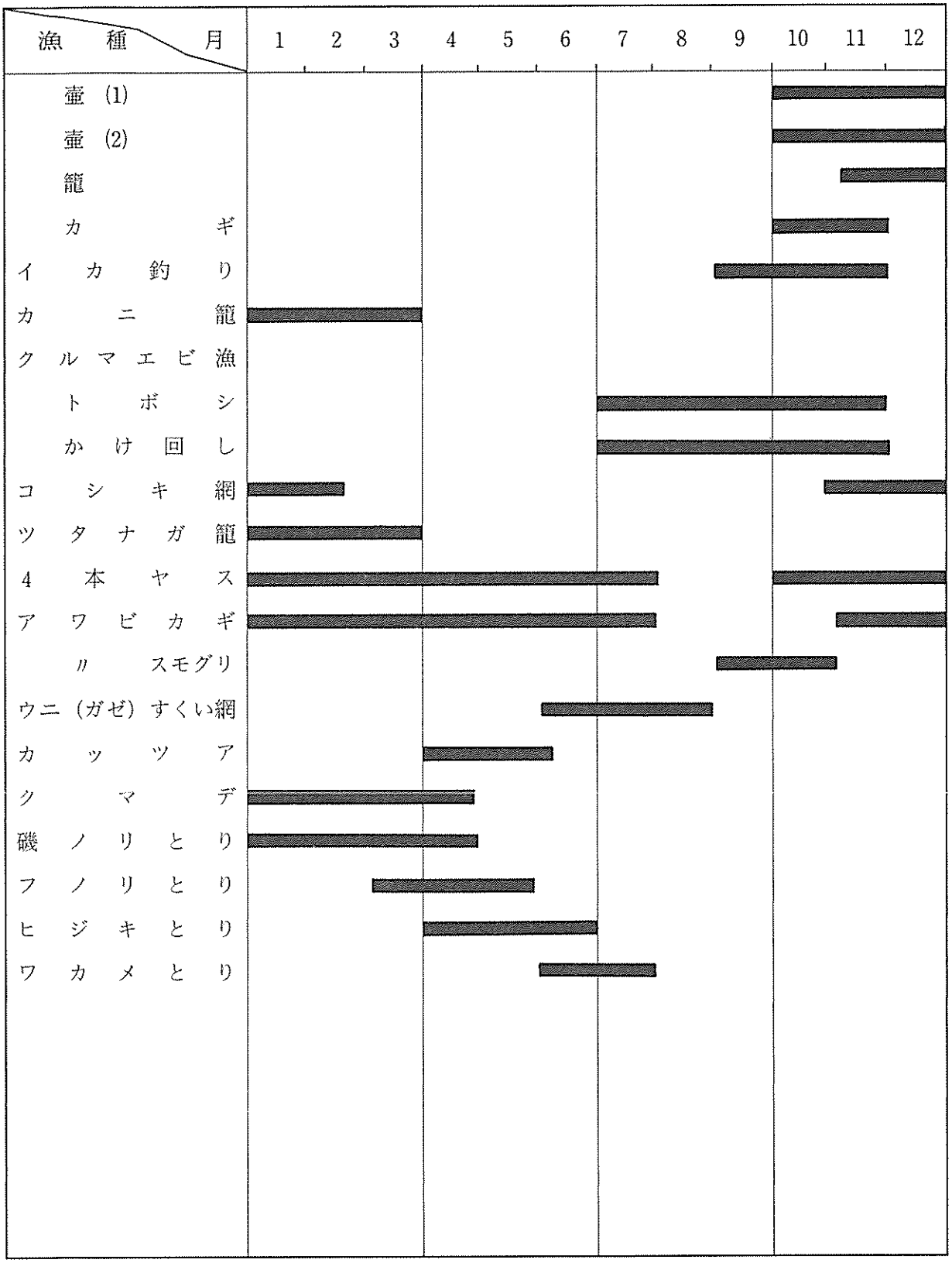
沿岸は矢本町、石巻市、牡鹿町、女川町、雄勝町、河北町、北上町の１市６町に亘り、合計26単協の漁業共同組合がある。

複雑に屈折する沿岸域は、カキ、ノリ、ワカメ等の養殖場に、また、これに接連する岩礁域では、アワビ、ウニ等を中心に採介藻漁業が営まれ、沖合根落周辺域は抄網・ランプ網・１本釣り・まき網・刺網・底びき網など小型漁船漁業の好漁場となっている。また、地先沿岸では大型、小型の定置網が行なわれている。

# 各漁の主漁期


漁種
月
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
カツオ一本釣り
サメ刺網
アカウオ立釣り
アカウオ刺網
大網
イワシ落とし網
水晶型機械網
移動定置
壷網
建網
ロク（ムツ）の地曳網
イシナギ漁
延縄
曳釣り
釣り（小型）
釣り（大型）
イカナゴ漁
メロウドすくい網
コウナゴ船曳き網
コウナゴすくい網
エイの空釣り
カレイ延縄
〃刺網
クロダイトボシ
コチ曳き網
コヨソザメ刺網
シラウオタモ漁


漁種
月
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
スズキ巻き網
〃 延縄
タナゴボイ網
タラ延縄
〃 刺網
ヒラメ刺網
〃 釣り
ハゼ刺網
〃 釣り
ハモ(マアナゴ)漁
〃 延縄
〃 胴
〃 釣り
ブリ漁
アオ縄
立縄
釣り
曳釣り
マス縄
根刺網
小縄(1)
小縄(2)
根魚釣り
三本ヤス
マダコ漁
釣り
延縄

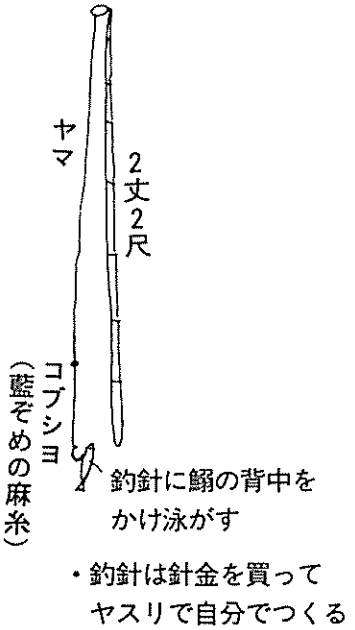

漁種
月
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
壺 (1)
壺 (2)
籠
カギ
イカ釣り
カニ籠
クルマエビ漁
トボシ
かけ回し
コシキ網
ツタナガ籠
4本ヤス
アワビカギ
〃 スモグリ
ウニ(ガゼ)すくい網
カツツア
クマデ
磯ノリとり
フノリとり
ヒジキとり
ワカメとり

# Ⅰ　沖　　漁

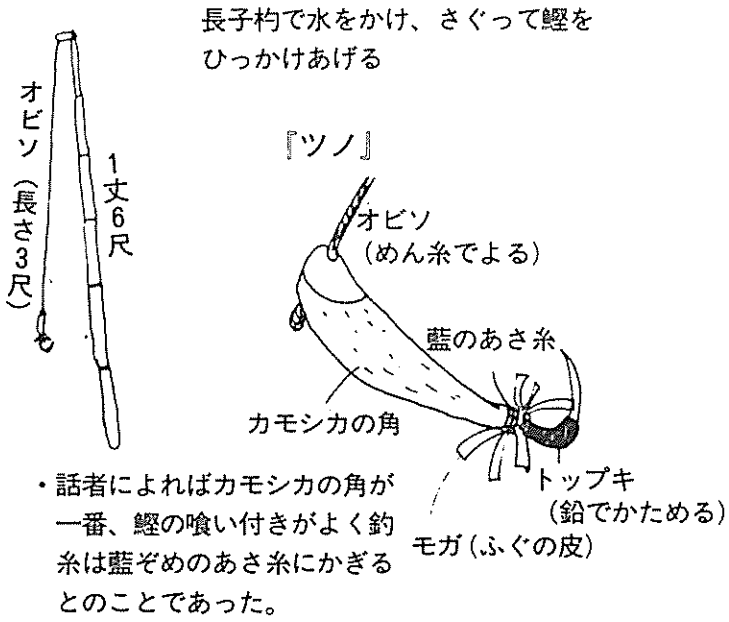
## 1　カツオ一本釣り（石巻市月浦）

明治40年代、石巻市月浦浜では７～10月にかけて、和船八丁櫓で、金華山・田代沖に出漁し鰹を漁獲した。乗組員は12～13人で、まず鰹がどこにいるかを見つけるため全員で立って鷗が旋回しているのを探し、魚群（ナムラ）を見つけると全力をあげて漕ぎ、群れに近づき魚に向って、サデで、かめから生きた鰯をすくって海面にまく。鰹が船の近くでとび跳ねるようになった時、一番最初にミヨシ（へさき）にいる二番口（船頭の次の責任者）が長さ１丈６尺の竿とオビソ（釣糸の長）３寸のバケ（擬餌釣具でツノともいう）で海水をかき回し、サグリながらひっかけあげる（ツノ釣り）。だんだん、食いつきが悪くなると、へらに長い竹をつけた杓で海水をかけながら、５、６人で一団となって、鰯の背に釣針をかけ２丈２尺の竿で釣る。釣る位置はおもてとともの、風の前の方（ない方）の舷である。その間、かしき（炊事を行う漁夫）は、かめから鰯を鉢に入れて船方たちの所に運ぶ。擬餌釣具に用いたツノは主に水牛の角で石巻から買った。一般にツノは、かもしか・鹿・和牛・水牛の角・鯨の骨などを用い包飾はふぐやねこの皮などさまざまである。

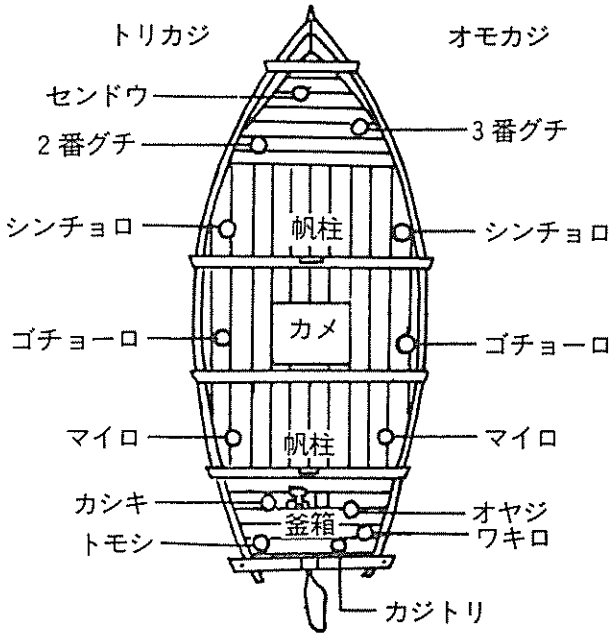
1）『サオ』（竿釣り）



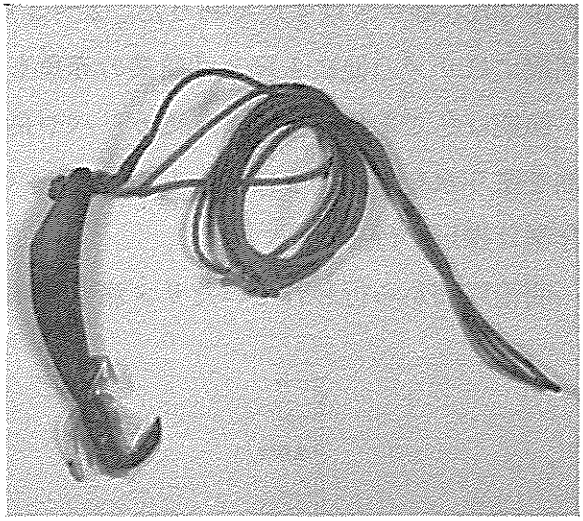

2）『サグリ』（角釣り）




手漕船時代の鰹漁具




カツオの船のロワリ



ツノ（鰹１本釣擬餌釣具このツノは水牛、モガがビニールであるので戦後も使用されたものと思う。石巻市鹿立浜（ツノの長さ約10 cm）

## 2　サ　メ　刺　網（牡鹿町前網）

サメ刺網漁の漁期は12～３月で、産仔のために回遊してくるサメ（アブラツノザメ）を対象として行っていた。漁は部落全体の相乗り経営で、サメ船を持っている家の船に他の漁民が均等に網を持ち寄って漁を営み、網を投入する順番はクジ引きで決め、自己の網にかかった魚を取り分としていた。網は自家製で綿糸４号を使用し、網を広げた状態で上が10間に対し下が７間とし、つねに弛みをつけてサメの掛かりを良くするのがコツである。１反（25間）の製作日数は３日前後であった。

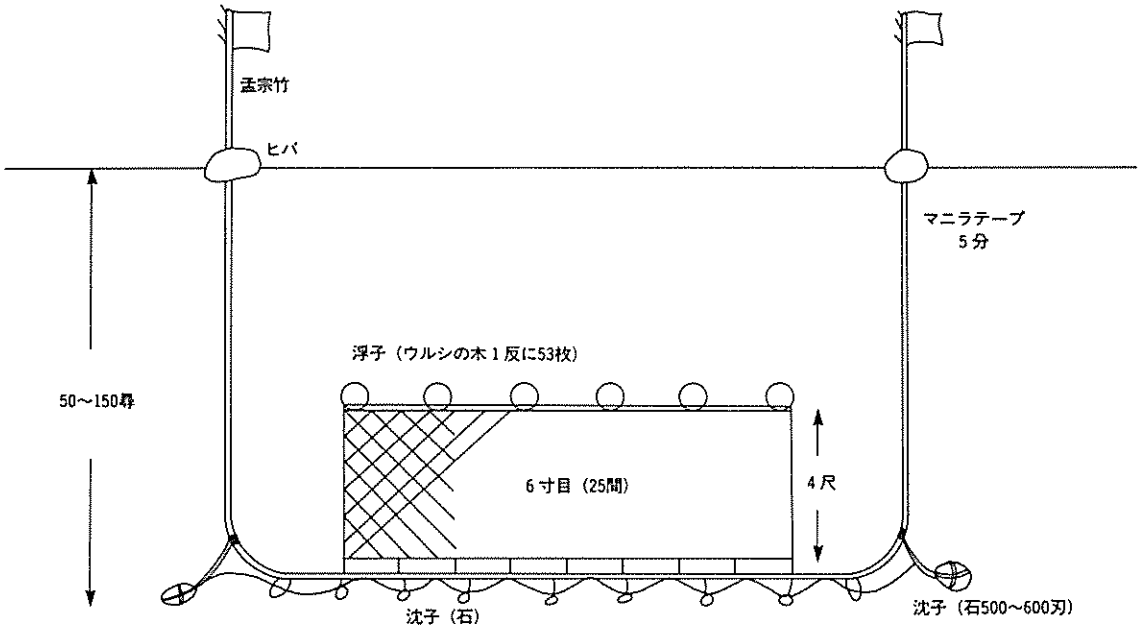
１隻に７～10人が乗り込み朝３時前後に出漁し、山ばかりと十二支羅針盤を使用し、約１時間で金華山沖５～６海里の漁場につく。まずボンデンを投入し船を走らせながら次々に船尾より沈子を付け網を投入し、全部の投げ網を投入後最後にボンデンを投入して投網を終了する。60～80反の投網には約40分かかった。刺網は漁場を変えて数か所に投網を行い翌日揚網を行う。揚網は水深50～150尋と深海のため容易でなく、先ずボンデンを揚げてから網に絡み網を絡ませ、それを肩に掛て舷側より船尾を回って反対側の舷側まで運ぶ。これを乗組員全員が繰り返して行い揚網を完了する。その時間は大体５時間前後を要し、漁獲率がよい場合には再び別の網を投網した。翌日は別の漁場の揚網を行うが、天候次第で海がシケているときは４～５日揚網しないことも往々にしてあった。

漁獲は多い時には１反で10本、普通は60反～80反の網に20～30本であり、大きさは雄ザ

メが3尺、雌ザメは4尺であった。2～3月には雌ザメが卵を持っており値段が良かった。刺網にはサメの他に1尺3寸前後の赤魚もかかった。

漁期は冬であり現在のようにカッパや長靴も一般に普及していなかったため、布に豆の油を塗り水を弾くようにしたものをカッパ替わりとし、漁期には1人2着は用意していた。作業は裸足で行った。

明治以前から行われていたサメ漁も昭和10年前後で終漁を迎え、現在は行われていない。




サメ刺網見取図

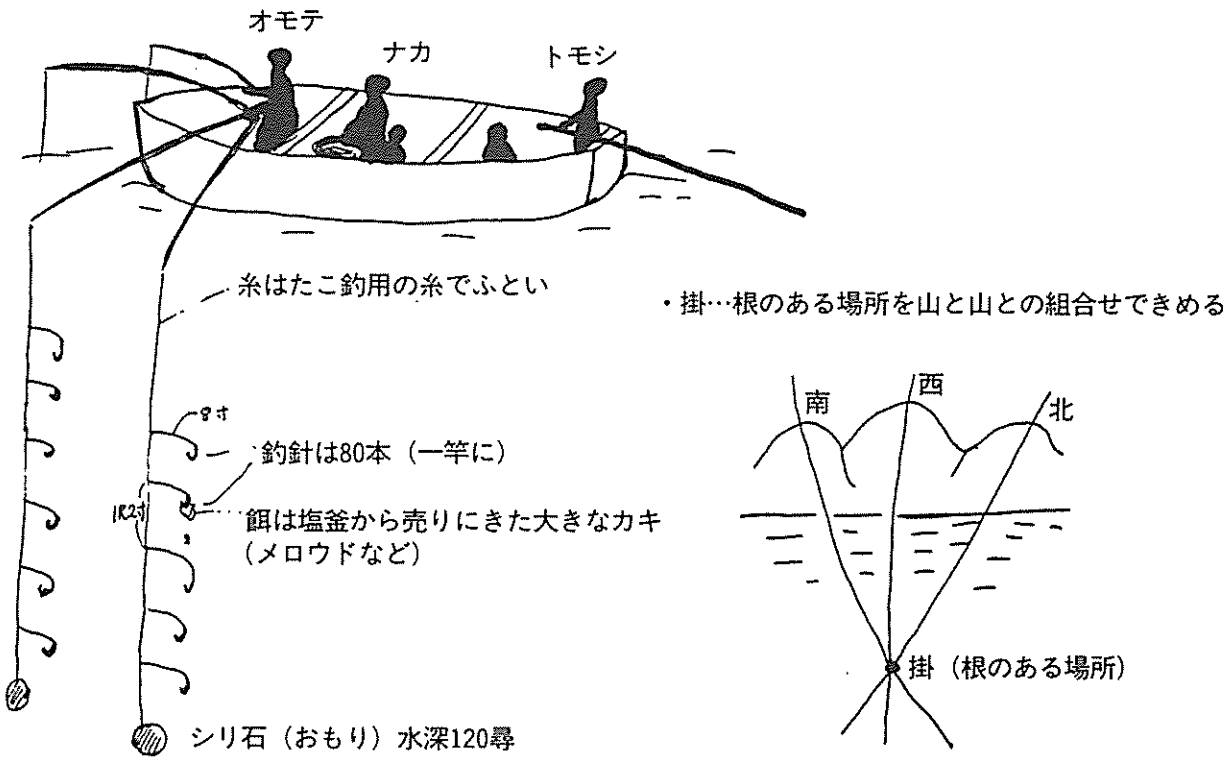
## 3　アカウオ立釣り（女川町江の島）

赤魚の立釣り（立延縄）は文久年間から明治42年まで女川町江の島で行なわれた漁法で浜はこの漁で繁栄した。

赤魚は「メヌケ」位の大きさで、体形は「ネウ」や「スエ」に似た魚でうろこは「メヌケ」よりしまっている。和名「ヤナギメバル」。当時は鯛についで珍重された。

漁場は岩手県の綾里崎（三陸沿岸の北限）の遠塚根と江の島の沖の根のみで、水深120尋のカバ草のある暗礁にしか魚はつかなかった。

餌はカキまたはメロードを用い、3月を盛漁期としている。道糸は80～120尋のたこ釣用の太い麻糸を用い、シロ（ハリス）は5寸程度、釣針は牡鹿型7分位のものを一本の道糸に40～80本位つけ、シリ石と言う大きなおもり石で沈める。




赤魚のタテヅリ

船の乗組員はオモテ１人（釣る人）・ナカ２人（釣具をさばき、使いやすくする人）・トモシ２人（１人は櫓で舟を支え定着させ山ばかりする人、もう１人は交代して釣る人で、すわって待っている）で釣針に赤魚が全部かかった場合、シリ石（おもり石と仕掛け）がきれ、流される。これを「モゲヨ」（もげ漁）といい、横浦の浜人の中にはこれを拾って商売した人もあった。

立釣りの釣船は明治初年、35艘位で、釣りあまった魚は浜にあげ、むしろをかけておいたため、烏が食べる程であった。

女川方面に運搬できるのは船のかた側、かご６箇に魚各２本、計12本、全部で24本位である。女川から陸路で運搬するのが困難であったので、舟で塩釜方面に運搬せざるを得なかった。

## 4　アカウオ刺網（牡鹿町寄磯）

アカウオ刺網漁は、底刺網であり、一艘の舟に網を持ち寄って行う相乗り漁法である。

漁具は網に綿糸２号を用い目合３寸５分とし、50間の網に５割の縮結をくわえ、25間を一反とする。目通糸は浮子方、沈子方とも綿糸４号を使用する。浮子は漆の木長さ７寸５

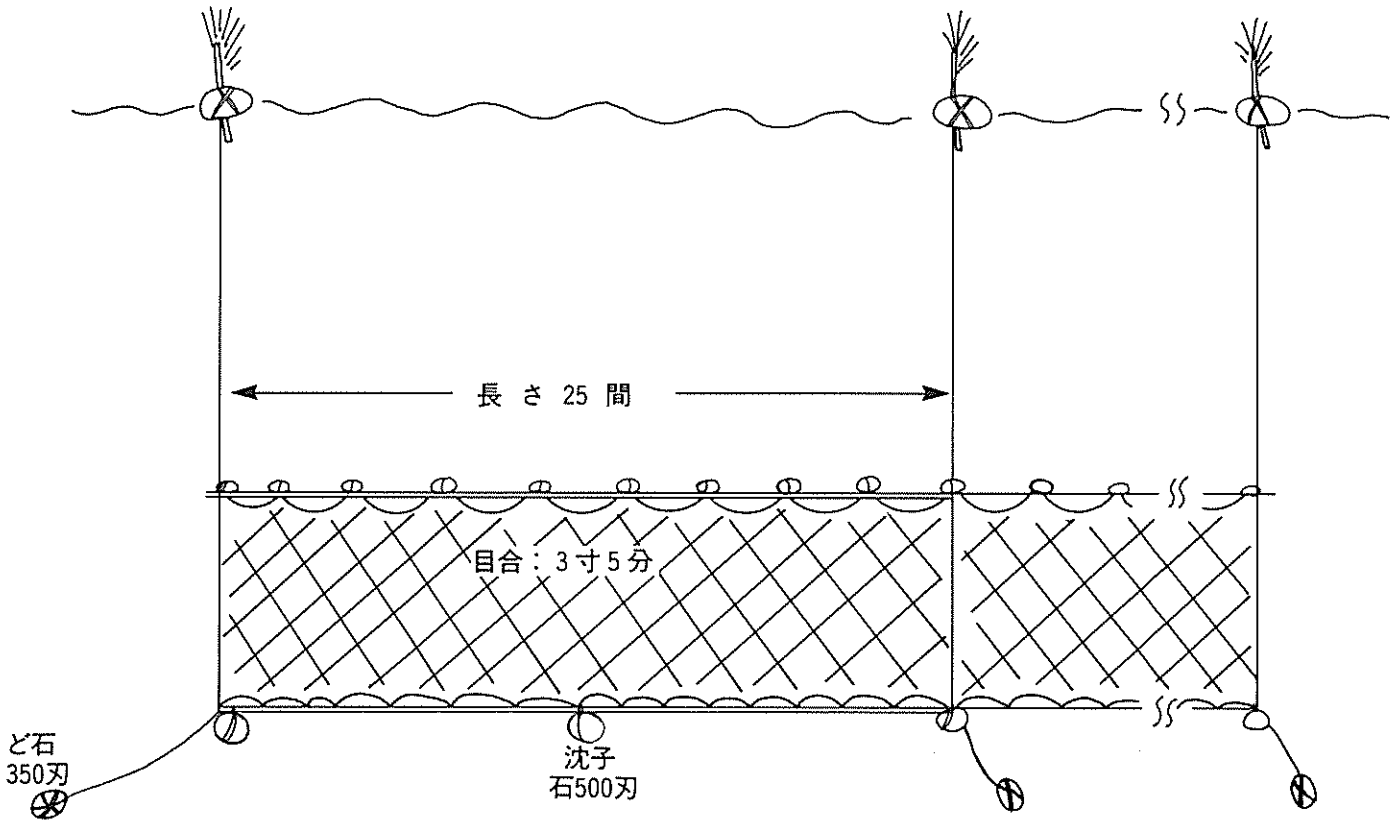
分幅、厚さ共に１寸の卵型のものを浮子綱１尺８寸の間隔で１個ずつ結びつける。浮子綱には、くご縄径２分のもの25尋、沈子綱は岩手麻径３分のもの25尋を使用する。沈子は、石500匁位のもの一反につき３個、ど石は350匁位のものを両端に１個取り付ける。浮綱は藁縄径４分のものを用意する。

漁場は、礁上又は礁間の水深40～70尋の場所で、３～６月に操業する。

一艘に３～４人乗りこみ、40反の網を持ち寄り出漁する。山立てにより漁場を決めると根（礁）の一端より40反を１連として、両側に投網する。根が円形の場合は２連とし、両側に投網する。揚げ網作業は翌日行う。漁獲が多い場合には同じ場所に、少ない場合は、別の場所に投網を行う。

漁獲されるアカウオ（ウスメバル）の大きさは１尺２寸位のものが多い。

明治以前から昭和初期にかけて盛んに行なわれたこの漁業も戦前で終漁をむかえた。その後サメ刺網で幾分漁獲されていたアカウオも現在ではほとんどみることができない。




アカウオ刺網漁具見取図

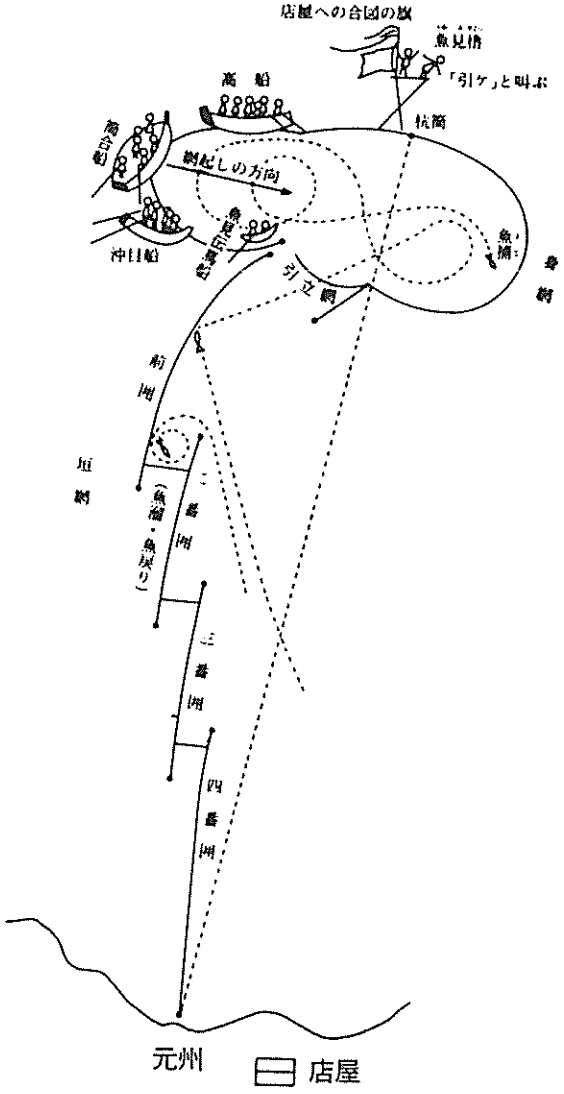
# II　定置網漁

## 1　大　　網　　漁（石巻市田代島）

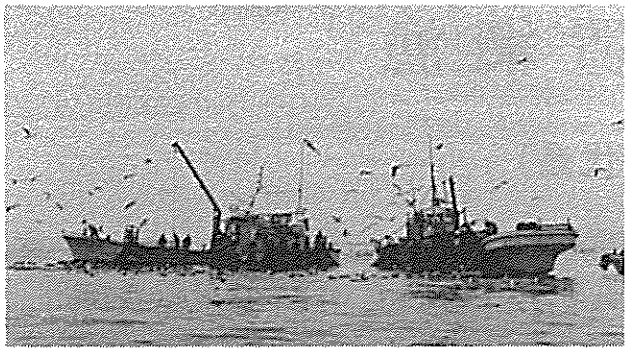
牡鹿半島は、わが国の定置網漁業のうち、建網漁業における四系統の一つ、東北系大網漁業の発祥地と言われている。この大網は、鮪を獲ることを目的とした大謀型定置網で、伝承によると嘉承年間（1106～07）に前九年の役でのがれてきた鳥海弥三郎が給分浜に創設したのがはじまりと言われている。

明治32年の調査によれば渡波町３、萩浜村９、大原村７、田代島６、網地島５、金華山２、女川村２の、合計32カ統あった。

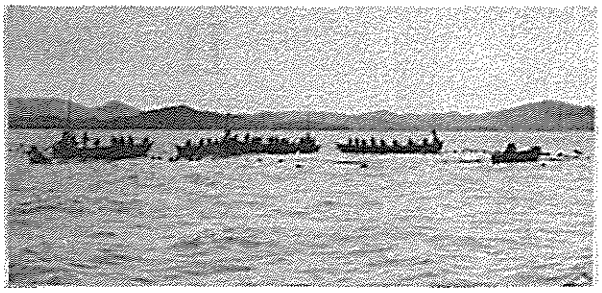
大網は、安政年間（1854～59）まで安政古式大網が用いられていた。簀立てに近い構造は大網の古い形態をとどめている。網は全て藁縄網で、魚取網、囲網、垣網からなっており、魚取網と囲網で身網を構成し、魚取網にのみ底網がついていた。



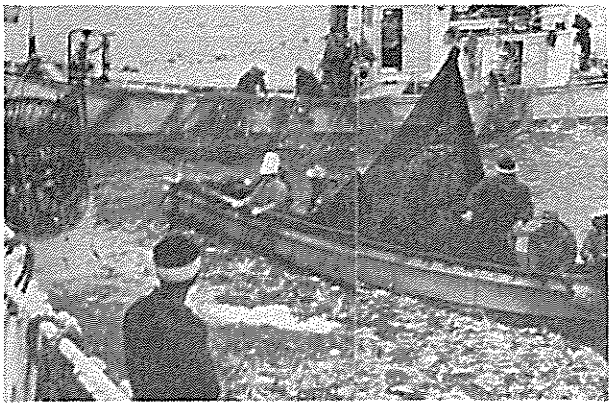

田代松石大網（明治40年代）



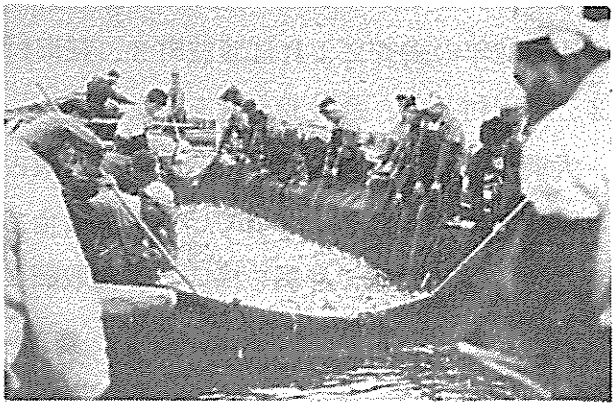
網起し



網起し　左…高船　中…筒合船
右…沖ノ目船
昭和20年代～30年代



田代の大網漁（三ツ石漁場　昭和60年撮影）



大網漁（昭和20年代～30年代）

文政年間（1818～29）に、陸中閉伊郡船越村の田代角左衛門によって考案され、各地に普及したのが田代型大網である。身網を楕円形として全体に底網をつけ、網口に引立網をつけて魚の退路を遮断し、身網に入った鮪をすべて捕獲した。身網は藁縄網で長径約90間、短径25間ほどであった。身網に糸網が用いられるようになるのは大正７年頃で、垣網は依然として藁縄網であった。

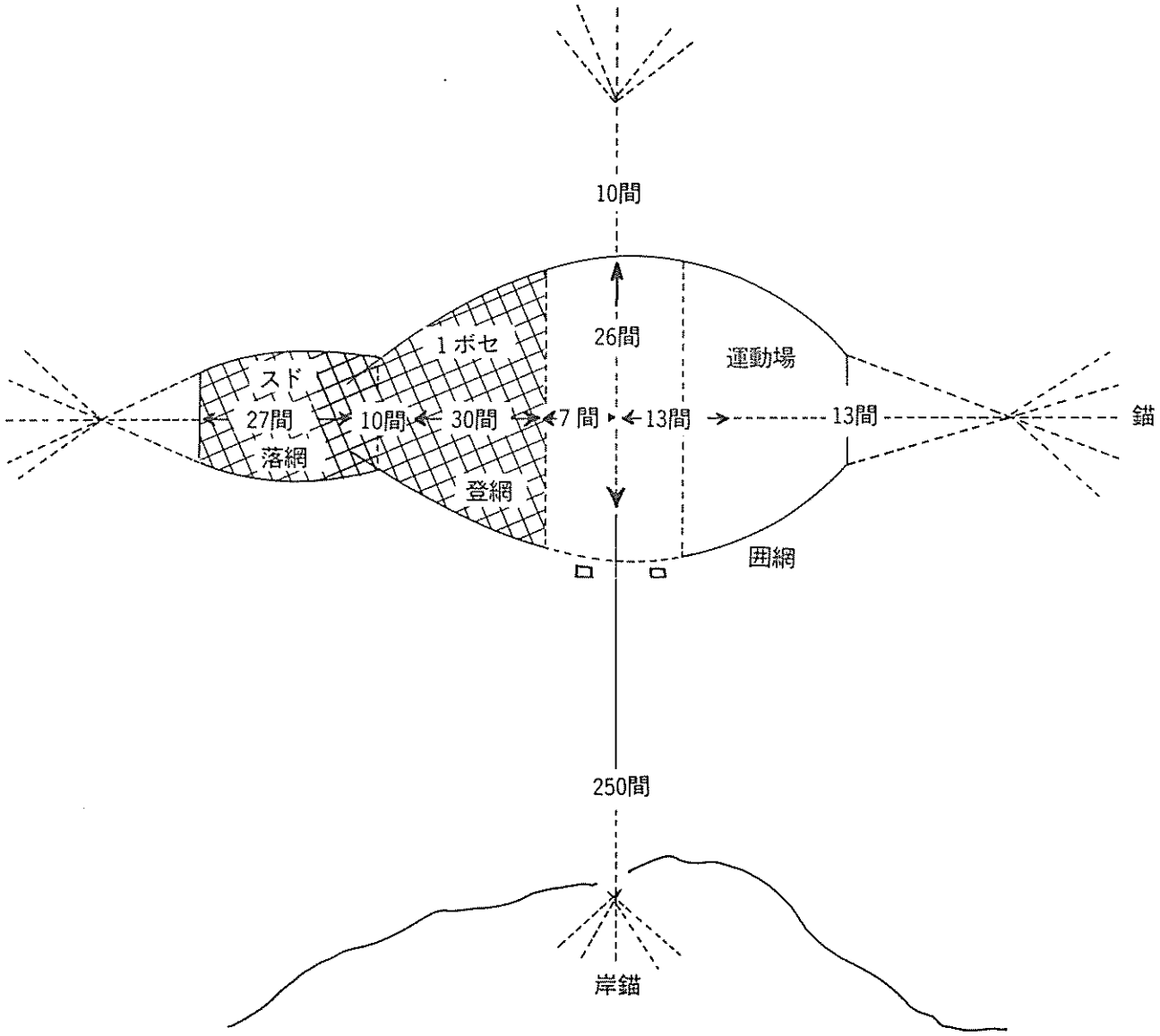
昭和初期、大網は改良され、落網がつく改良大網（落網）に構造が大きく変化する。次に明治40年代の田代島の漁獲法をのべる。

鮪は夏鮪（ナツシビ）、秋鮪（マグロ）とあった。仙台湾に入った鮪が牡鹿半島の岬端をめぐり北洋に向うのが前者であり、田代島では夏鮪で、八十八夜から立秋までが漁期で、網は田代島の西岸に建てられていた。

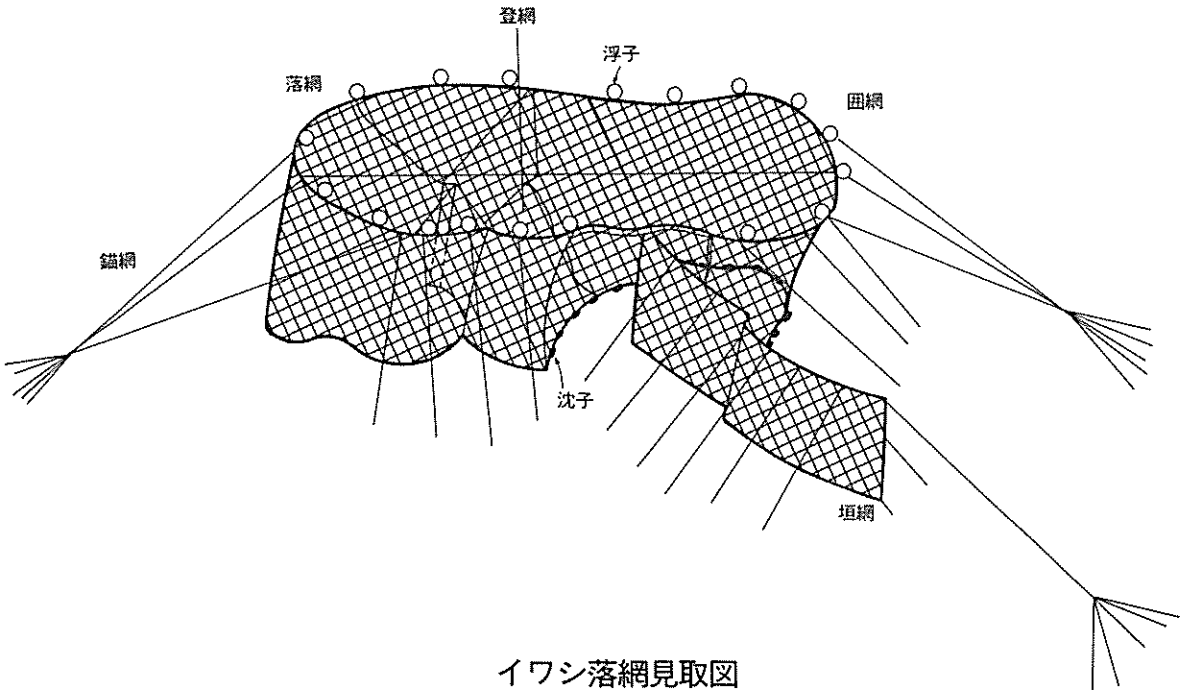
漁夫は総員36名で、大謀が漁夫を指揮する。漁船は４艘で筒合船・高船・沖の目船と引立船の傅馬船である。魚見櫓には漁夫２名が終始魚の遊来するのを注目している。鮪が網中に入ってくると傅馬船に『引けー』と叫けび伝え、傅馬船には漁夫３人が乗組み、中の口筒にあって網口の引立網を引き揚げ、魚の逃脱を防ぐ、魚見はまた合図の旗を上げて店屋に報ずる。店屋にいた漁夫は筒合船に12人、沖の目船に８～９人、高船に８人乗込み、

網場に漕ぎつけ、中央より筒合船が、右より沖ノ目船、左より高船が網を起して、魚を魚捕網に追い込み、鈎で捕獲する。

## 2　イワシ落とし網（牡鹿町鮫浦）




イワシ落網見取図




イワシ落網見取図

イワシ落網は大正末期、それまでの大網に落網がつくようになった改良型（構造的に大きく変化）である。

構造は垣網、囲網、登網、箱網からなる。

魚は垣網にそって囲網に入り回遊しながら登網を登って箱網に入る。登網には漏斗状の口があり、箱網に落ちた魚は囲網にもどれない様になっている。網越しは、箱網を定期的に起こすようにする。

鮫浦での落網は、イワシを漁獲目的としている。落網の側には生簀を用意しておき、漁獲されたイワシは、カツオ釣用の餌として蓄用し6～11月にかけてカツオ船に売渡す。餌用として馴らしたイワシでないと、船のカメに入れた時、壁にぶつかる等して弱り、カツオ釣りには適さない。馴らしたイワシは、カメの中で群れを作り回りながら泳ぎ、活力がある。イワシは生簀に入れてから4日位で馴れる。

## 3　水晶型器械網（牡鹿町谷川）

水晶型器械網は、牡鹿町谷川浜の石森善左衛門が明治24年に考案した定置漁具である。浅場の海域に適し、その建込方式は簡単だが、漁獲能率が良く、小人数での作業が可能である。

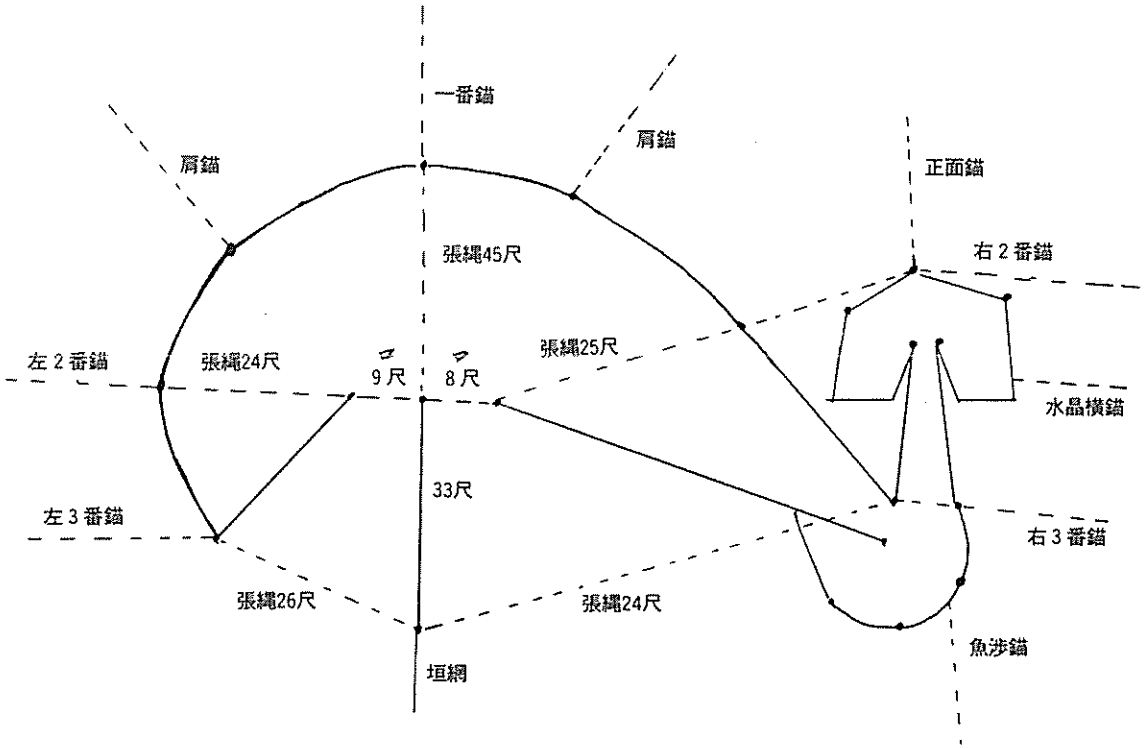
構造は一般定置網と同様で垣網、側網、昇網、箱網からなっている。又杭木(ヒバか杉)立

ての作業がある。杭木立ては、水深より6尺長くなるように木を2本継げて協同で行なう。

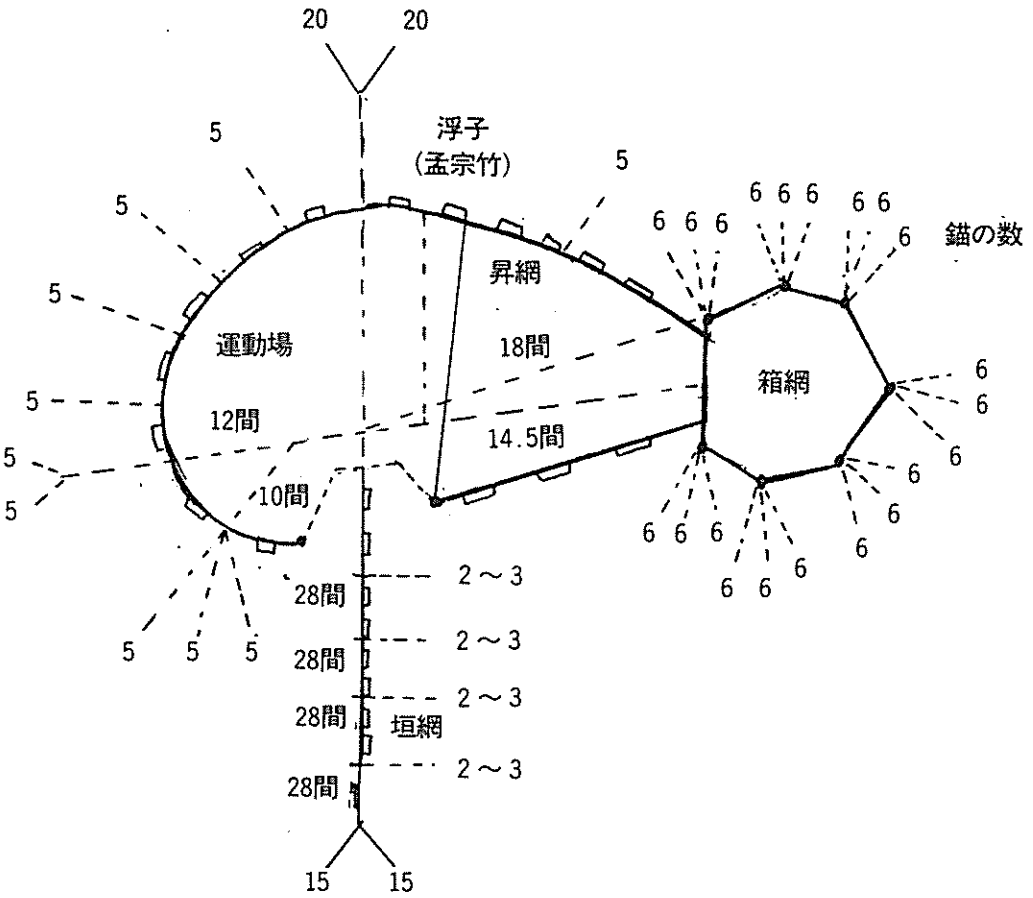
漁場は地先の水深8～12尋、杭木の建てられる深さの砂地の場所である。漁期は5～12月である。

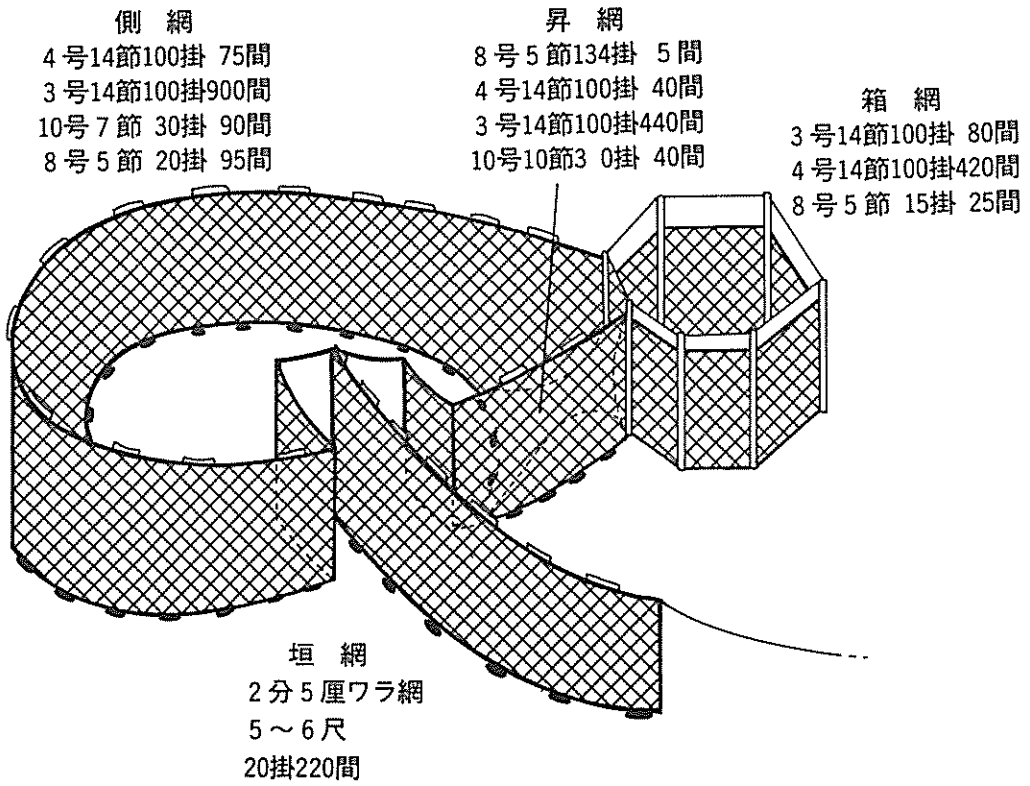
揚網方法は漁船に2～3人乗り込み、船を箱網に乗り付け、桟木を渡って各杭木に結びつけてあるナンバン網をゆるめ昇網の落口から揚げ始め、箱網の側をたぐって魚をすくい取る。それが終了したなら再びナンバン網を締めて、箱網、昇網を元どうりにしておく。漁期中この作業を繰り返す。

漁獲物はイワシ、サバ、イカ等である。



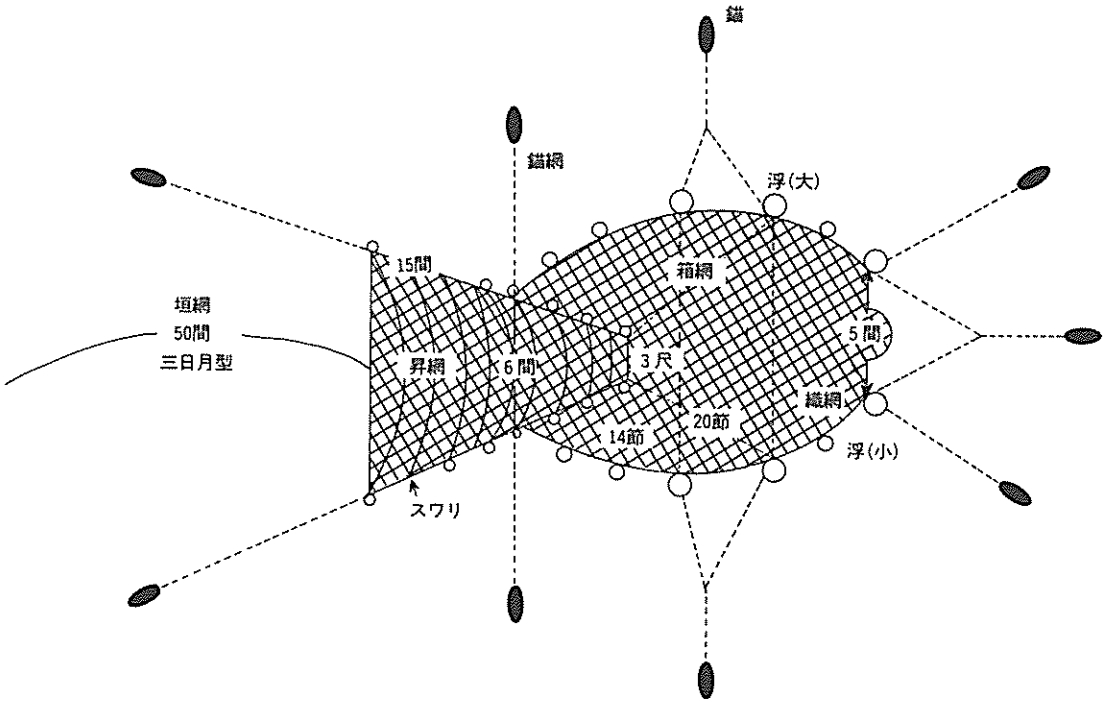

水晶型器械網旧式（明治）

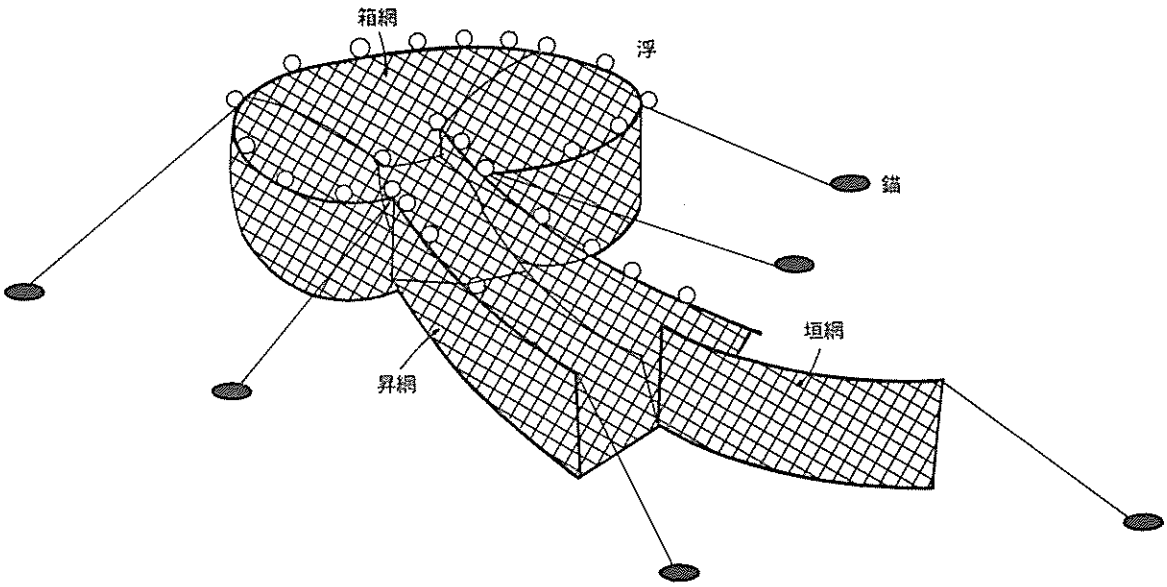

20
20
浮子
(孟宗竹)
5
5
5
5
5
5
5
5
5
5
5
6 6 6
6 6 6
6 6
6
錨の数
昇網
運動場
18間
箱網
12間
14.5間
10間
6
6
6
6
6
6
6
6
6
6
6
6
2～3
28間
2～3
28間
2～3
28間
垣網
2～3
28間
15
15


側　網
4号14節100掛 75間
3号14節100掛900間
10号7節 30掛 90間
8号5節 20掛 95間
昇　網
8号5節134掛 5間
4号14節100掛 40間
3号14節100掛440間
10号10節3 0掛 40間
箱　網
3号14節100掛 80間
4号14節100掛420間
8号5節 15掛 25間
垣　網
2分5厘ワラ網
5～6尺
20掛220間

水晶型器械網見取図

# 4　移　動　定　置（牡鹿町泊）




移動定置見取図

移動定置は、小人数で作業のできる小型定置漁業である。

この漁では、漁獲対象魚種により、袋網の目合をかえ、操業を行うことができる。

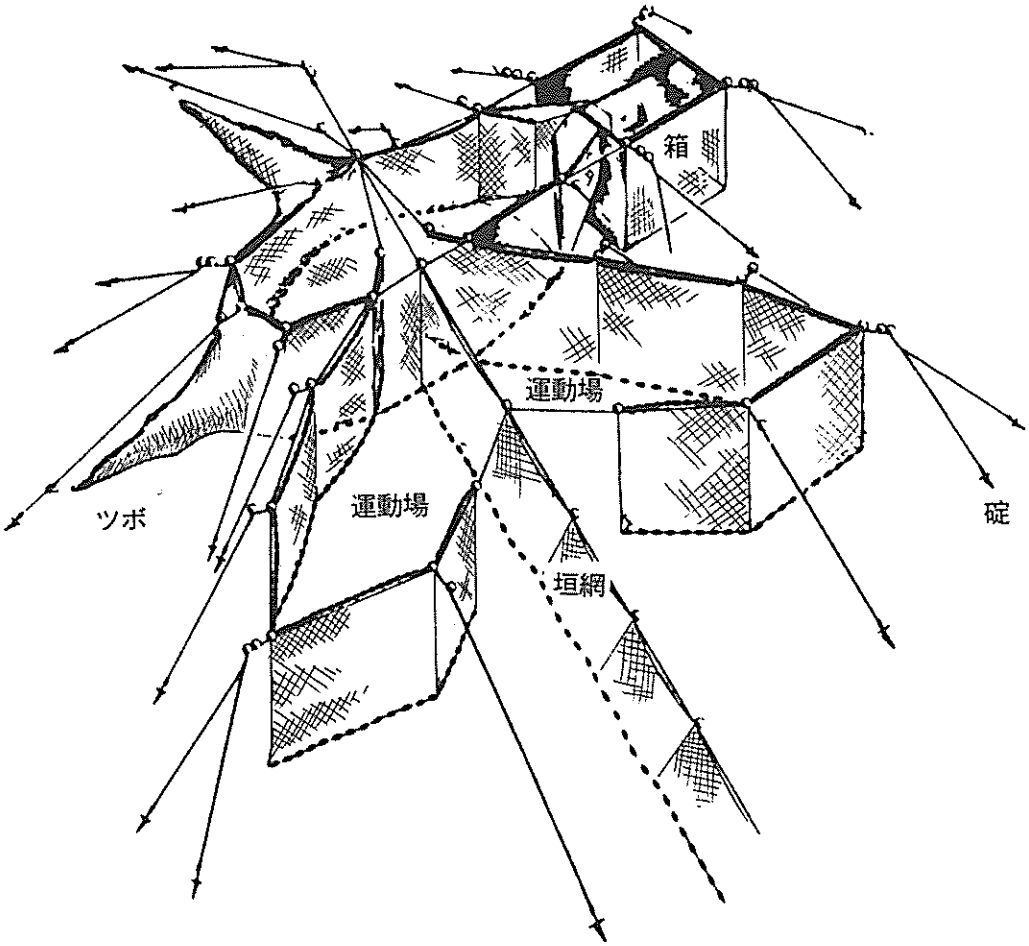
漁具の構造は垣網、昇網、袋網からなる。垣網は、長さ50間で、流れに合せ魚を誘動するため、三日月型とする。昇網は長さ15間とし、底網にはスワリを入れる。袋網は普通14～20節を使用するが、コウナゴ漁では16～20節、魚取口には、織網を使用する。浮は錨網の結び目の所には、大型のものを、それ以外の所には小型のものを使用する。定置網の設置については、陸からの陽のあたり具合や(朝、夕が当り、日中はあまり当らない所)、対象魚種の移動、棲息場であることが重要である。垣網については流れの方向に逆にふくらむようにし、魚を誘いこむこと等を考えて行なう。網の設置作業は２～３隻、４～５人で先ず、錨の設置に１日、網の取付けに１日の２日がかりで行なう。又海藻等が網に付着（目づまり、網が暗いと魚が入らない）し、汚れた場合や時化による取り揚げ移動も簡単に行なえるため、移動定置と呼ばれる。設置水深は、10尋位の場所である。

コウナゴを対象とした漁は、牡鹿町泊で行なわれている。同地区では、戦前コウナゴ船曳き網を行なっていたが、１回の操業で多くの人数を必要とするため、戦後は小人数で行なえる定置網に代って行き多い時には、20ケ統前後あったが、現在は数が減り、２ケ統が操業している。網の設置は、毎年同じ場所で良い。

漁法は、漁船に２人乗りこみ網場に向う。網場に着くと先ず、昇口、底網に結んでおいたロープを揚げていき、織網に魚を集め、船に魚を扱み揚げる。この作業を１日１回行なう。網替え作業は１ケ月前後で行なうため、替え網も用意しておく。コウナゴは毎年同じ場所で漁獲する。

## 5　壺　　網（石巻市田代島）

瀬戸内海地方で行われていたものが、その簡便さから改良されながら全国的に普及したもので、牡鹿半島沿岸の小型定置網の主流となっている。魚は、箱と壷の中に捕獲されるので、その部分だけを引き揚げれば良く、極めて省力化された定置網である。漁期は４月～翌年２月中旬で、水深５～15ｍ前後の所に設置した。魚種はイワシ・サバ・スズキ・ヒラメ・カレイ等である。牡鹿半島沿岸一帯で行なわれている。




壺網の構造

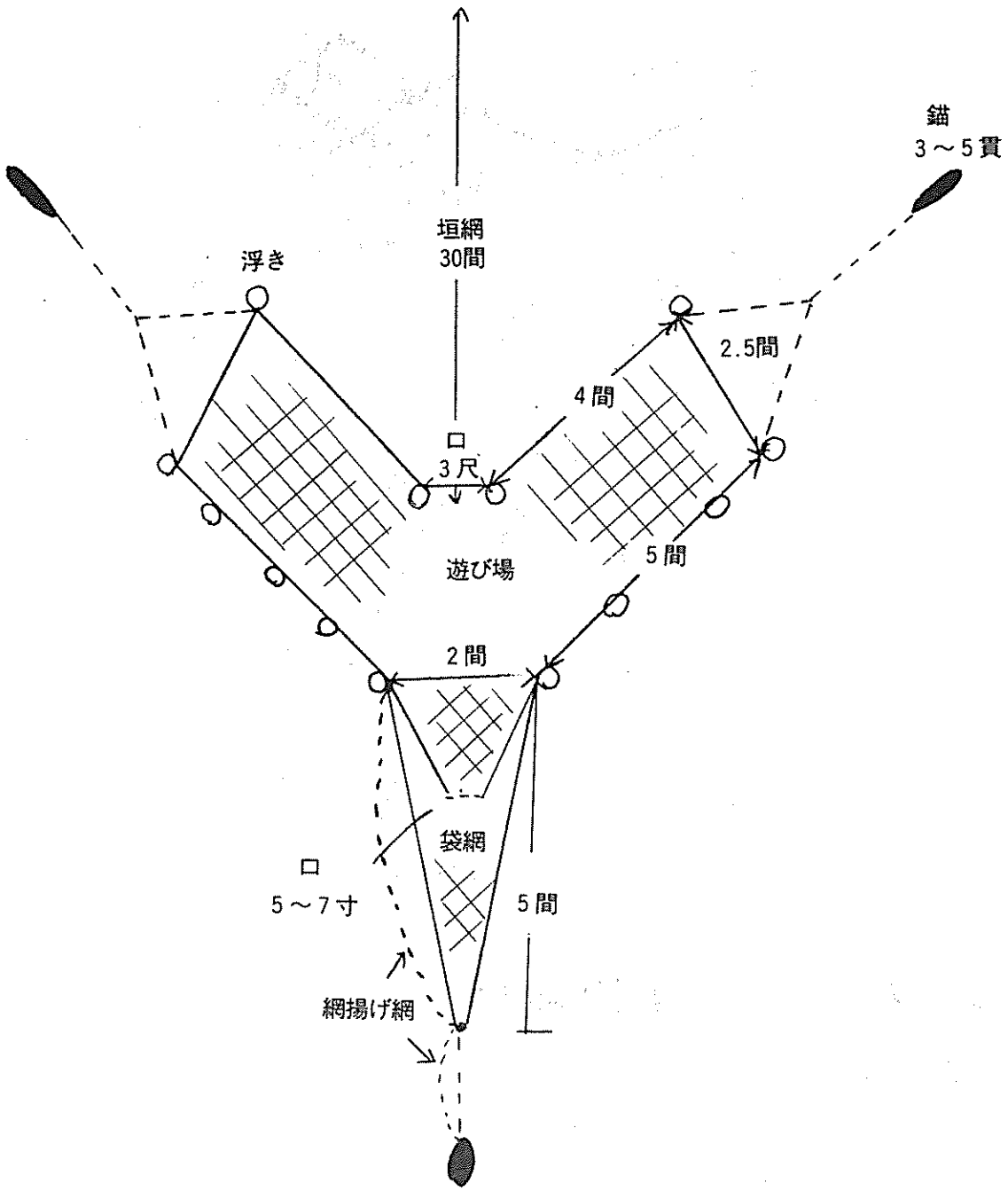
## 6　建　　網（牡鹿町泊）

建網漁は５～11月まで行なわれ、タナゴ、メバル等を漁獲する。

漁具は、垣網の長さ30間、側網は２段になっており、上10節、下８節とする。袋網は長さ５間とし、網は12～14節とする。建網の設置は１人で行える。漁場は、深さ４尋位の砂地か岩場の所が良い。網は漁期（魚種）に合せて移動して行なう。

建網は小型であり、作業は小人数で行なえる。又肩に背負って移動できるため、たがき網とも呼ばれる。

漁法は漁船に１人乗り込み、網場に向かう。作業は先ず、袋網を引き揚げ、尻の結びを解き、漁獲物を船に取り込む。その後再び袋網を沈め、袋尻の網を張る。この作業を１日１～２回位行なう。




建網の構造図

# III　地曳網漁

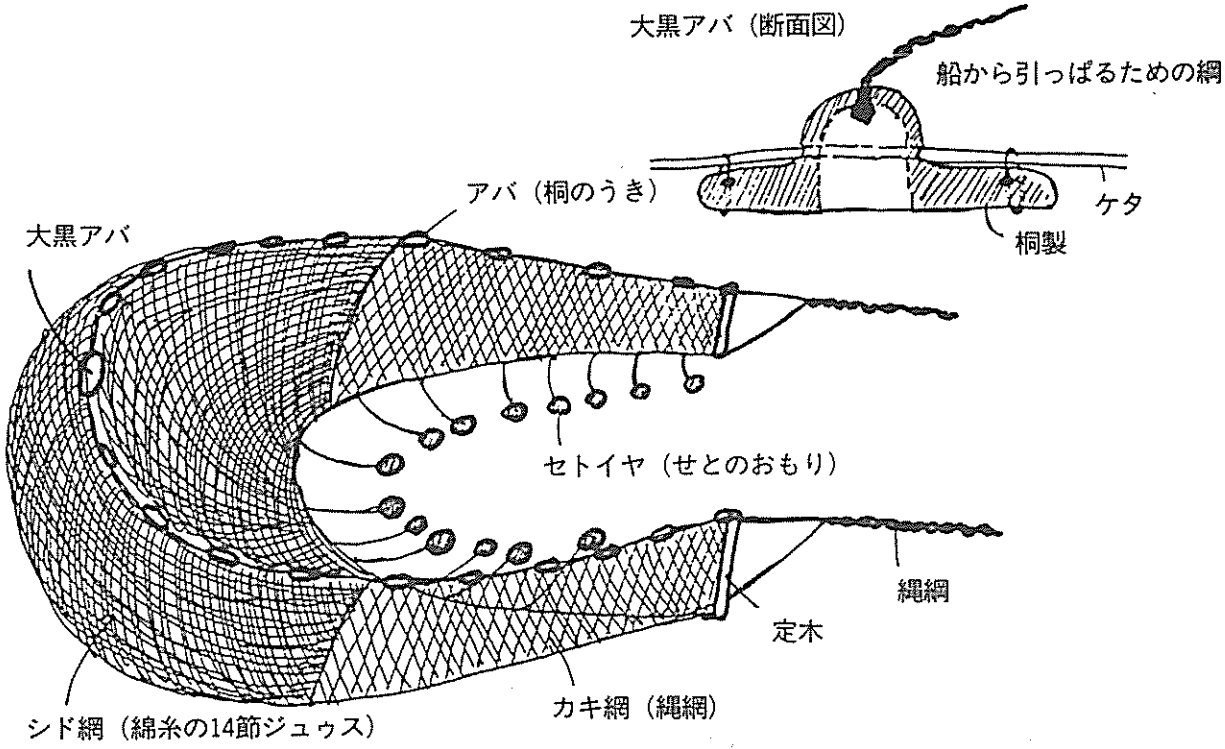
## 1　ロク（ムツ）の地曳網（牡鹿町谷川）

明治・大正の頃、石巻市田代島大泊浜や牡鹿町小淵・谷川浜などの地先沿岸では９～10月にかけてロクの地曳網でにぎわった。

最初、ダンベ船２艘でふた手にわかれ、魚を左右にまいてシド網に追い込む。魚が入り、網が浜より遠くにあるうちは、２本の縄綱を陸のろくろで巻きあげる。いよいよ網が岸近くになるとまるで運動会の綱引きのように大勢の男女が「ヨイト、ヨイト」とかけ声勇ましく縄綱を引きあげる。このときもし「大黒アバ」（桐製のうき）が真中から左によれば右の引き手が負けたことになるので、沖の右手の船人がさっと旗を立て岸の人々に頑張るように合図を送る。アバが右によれば左の船が合図をし、平均になるように曳き上げさせる。

浜は、ロクでいっぱいになり、地曳網の株に入っていないおかみさんたちも、この時ばかりと「前かけ」いっぱい、こぼれ魚を頂だいする。

（注…ムツの幼魚は浅海性で陸前・陸中では藩主が陸奥守であるため遠慮してムツと言わずロクのウオと言った。）




ロク（ムツ）網（地曳網）見取図

# Ⅳ 小　　魚

## 1　イシナギ漁

イシナギは根（岩礁）のくぼみや、根と根の間の深みに生息し、成長すると2ｍにもなる大型の根魚である。

この漁は明治頃には延縄がおこなわれており、その後一本釣が普及するようになった。昭和30年後半までかなりの漁獲があったものの、昭和40年に入ると漁獲量の減少等の理由から終漁をむかえた。

現在魚市場で幼魚が希に見かけられる。

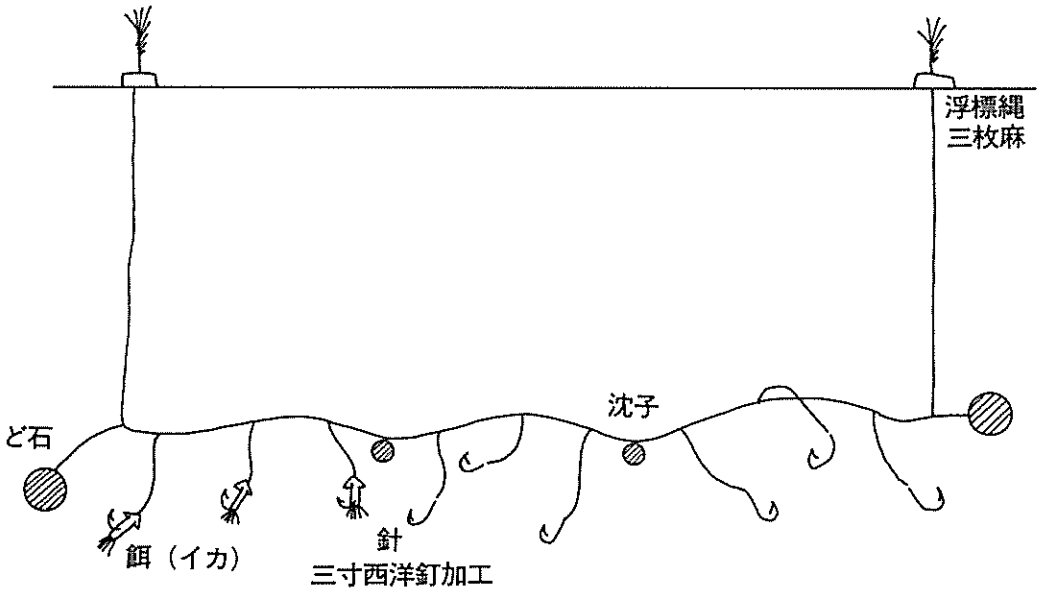
### 延　　縄（女川町尾浦）

イシナギ延縄は小縄の副業として夏は７．８月、冬は11月から翌年の１月まで行なわれた。

漁具は幹縄４枚麻190尋、枝糸３枚麻６尺のもの１鉢に付10本、釣鈎は３寸西洋釘を加工して使用する。浮綱には３枚麻を用い、水深より60尋、80尋又は100尋の３種類を用意する。沈子は、１貫匁位の石２個を取り付ける。

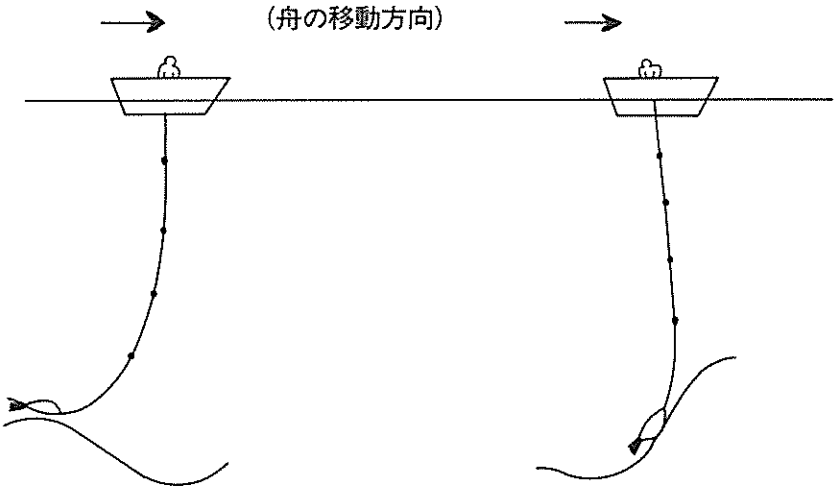
餌は主としてイカを使用するが手に入らない時期はイワシ等を用い、１匹をそのままかけ、糸を使い針に結びつける。

夕方漁場に到着するように出港し漁場に到着したら、縄の一方の端のど石、浮標を入れ、直線に投縄していく。途中60尋に１個の割で沈子を結び付け作業を行なう。翌朝引き揚げるが漁獲が多い場合は同一漁場で操業を繰り返す。

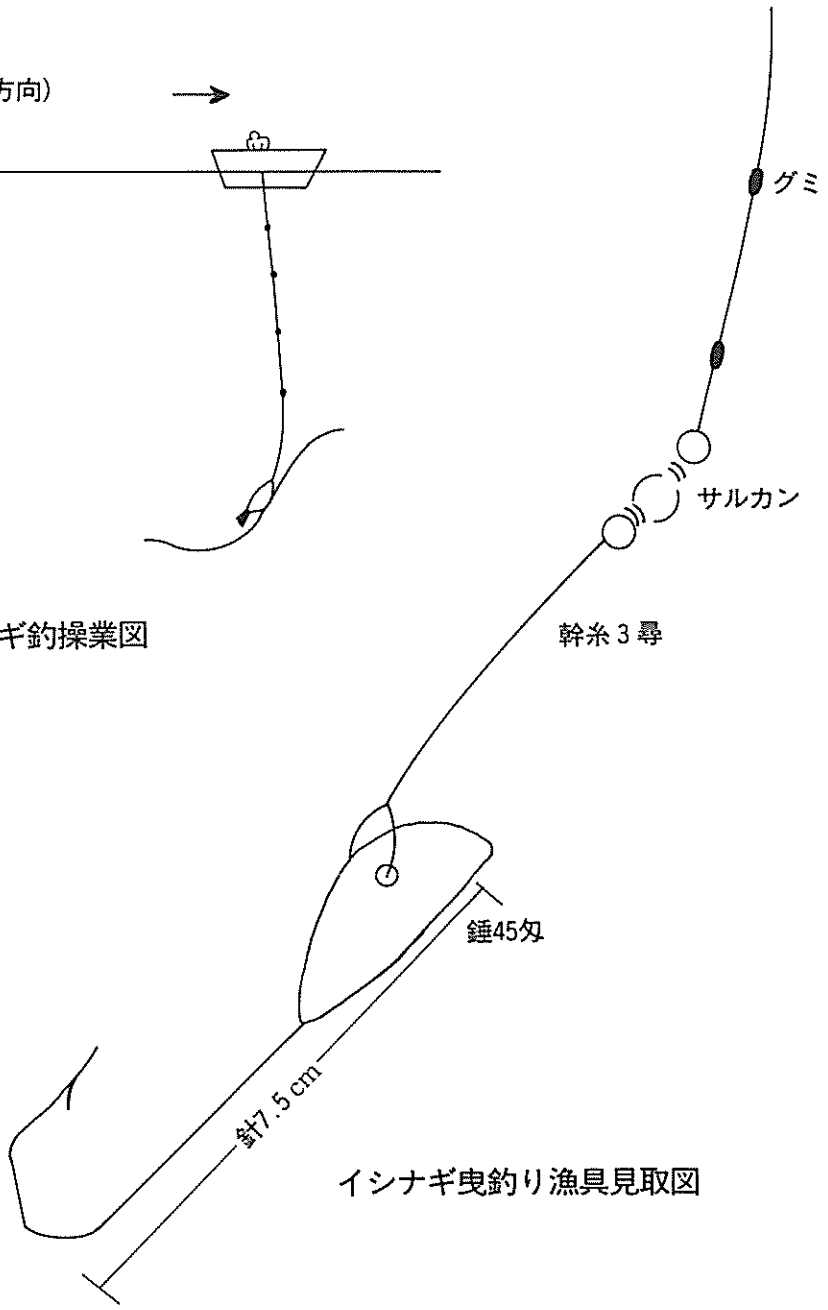



イシナギ延縄漁具見取図

# 曳　釣　り（牡鹿町鮎川）




イシナギ釣操業図




イシナギ曳釣り漁具見取図

漁場は金華山、網地島、田代島周辺の根（礁）周辺である。

イシナギは根の溝を遊泳しているようで漁獲される場所が狭く限定されている。漁期は春、夏、秋が良く、特に３～４月頃が比較的餌付が良い。

漁具は幹糸12～15匁、人造テグス５把釣針付糸は３～５分のナイロンテグス２～３尋、ナイロン人造テグスとの継目は樽型サルカン又は、函型サルカンを使用した。人造テグスと人造テグスとの継目には函型サルカンを使用する場合と使用しない場合がある。釣糸にはグミ

を付ける。釣針は錘と一体型である。釣針は鋼鉄及び錬鉄製で軸長型（イナズマ型、田辺型)、高さ7.5 cm、ふところ2 cm、錘は45匁位を使用する。錘の中央に穴をあけ、幹糸を結びつける。グミは人造テグス１把に対し30匁位必要で６寸に１個の割合で取付ける。人造テグスはフグにより切断されるため、茶渋により染色する。方法は器一杯に熱湯を張り、茶碗に半分位の日本茶をいれて冷やす。微温湯になったら人造テグスを漬ける。時間は朝から昼頃迄で１回。テグス使用については漁場に向う度、海水に漬けると回を重ねる度色を吹く。

漁船は電気着火の18～20馬力が多い。操業は漁場が重要である。魚群探知機があれば一番良いが、前以って山計りをしておき漁場位置を確実に摑んでおく。漁場に於いては舟首を風に向けるか潮の強い場合には潮流に向けて機関を操作する。水深50尋の場合、水深より更に10尋位長く糸をたれる。その後、自然に糸を一尺ずつ静かに手操る。それを糸が張る迄続ける。根の傾斜面が好漁場であり、根に釣針をつけて根の山から谷へと深くなるに従って釣り糸をのばしながら静かに引くようにする。途中で重くなったら一尺位糸をゆるめ、時間をみて曳く。この場合最初より手ごたえが強くなるので３度強く合せ、順に曳き揚げる。１本釣ったら、山計りを行ない、最初糸を投げた場所にもどり繰返し操業する。

餌は活きたイカが良く80～100匁のものを使うが大きいほど良い。イシナギを釣り揚げて腹をひらくと、イカ、タコ。水ガレイ、アンコウ等がでてきた。

漁獲サイズは６～７貫、最大のものでは40貫の物も水揚げされた。

## 釣　り（小型）（女川町）

イシナギ釣りは春（５月）～秋（10月）まで行なわれるが大きさにより漁場と、漁法、漁具が異なるため小型、大型釣りと分けて記載する。

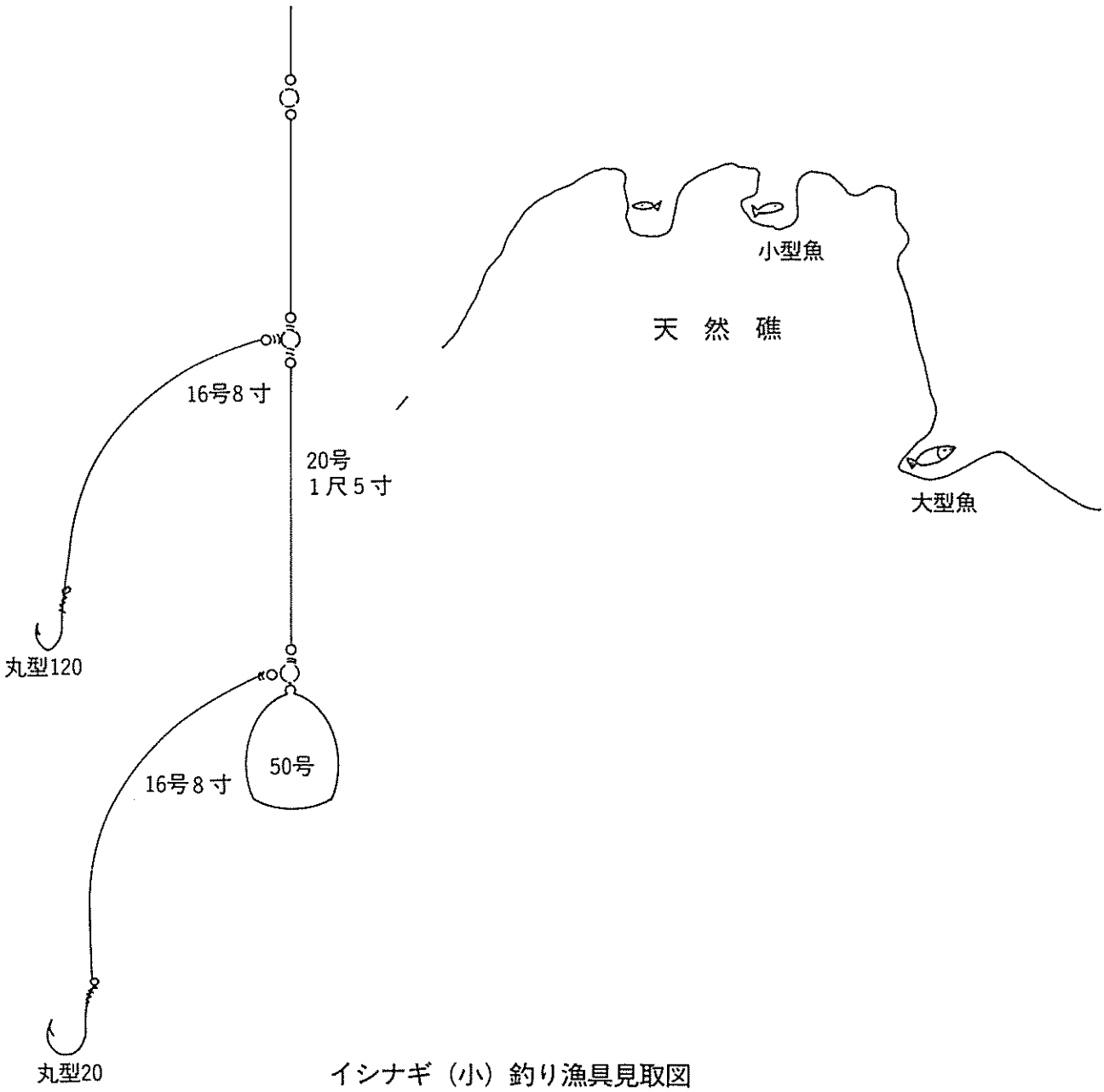
小型のイシナギは大きさが１尺５寸～２尺であり、テンテン釣りで漁獲される。

漁具の構造は道糸ナイロン25号、幹糸ナイロン20号を１尺５寸として２本、枝糸ナイロン16号は８寸とし２本結びつけ、針は20号を使用し、錘は50号とする。

漁場は水深20～40尋の根（岩礁）のくぼみの場所がよい。

まず、カマスかタナゴを漁獲して、カメの中に生かしておき朝出漁する。漁船には１～２人乗り込み、山立てにより位置を決めると、カメの中のカマスを取り出し鼻掛けして下ろす。錘が底に着いたなら、上げ下げを繰り返し当りを待つ。重くなって食いついてもイシナギの場合、口が大きくすぐに引き揚げるとはきだしてしまうため、すこしそのままにしてのみこませてから引き揚げるのがコツである。

この釣りでは１度に２本釣れることもある。半日で20本前後漁獲があった。




イシナギ（小）釣り漁具見取図

## 釣　り（大型）（女川町）

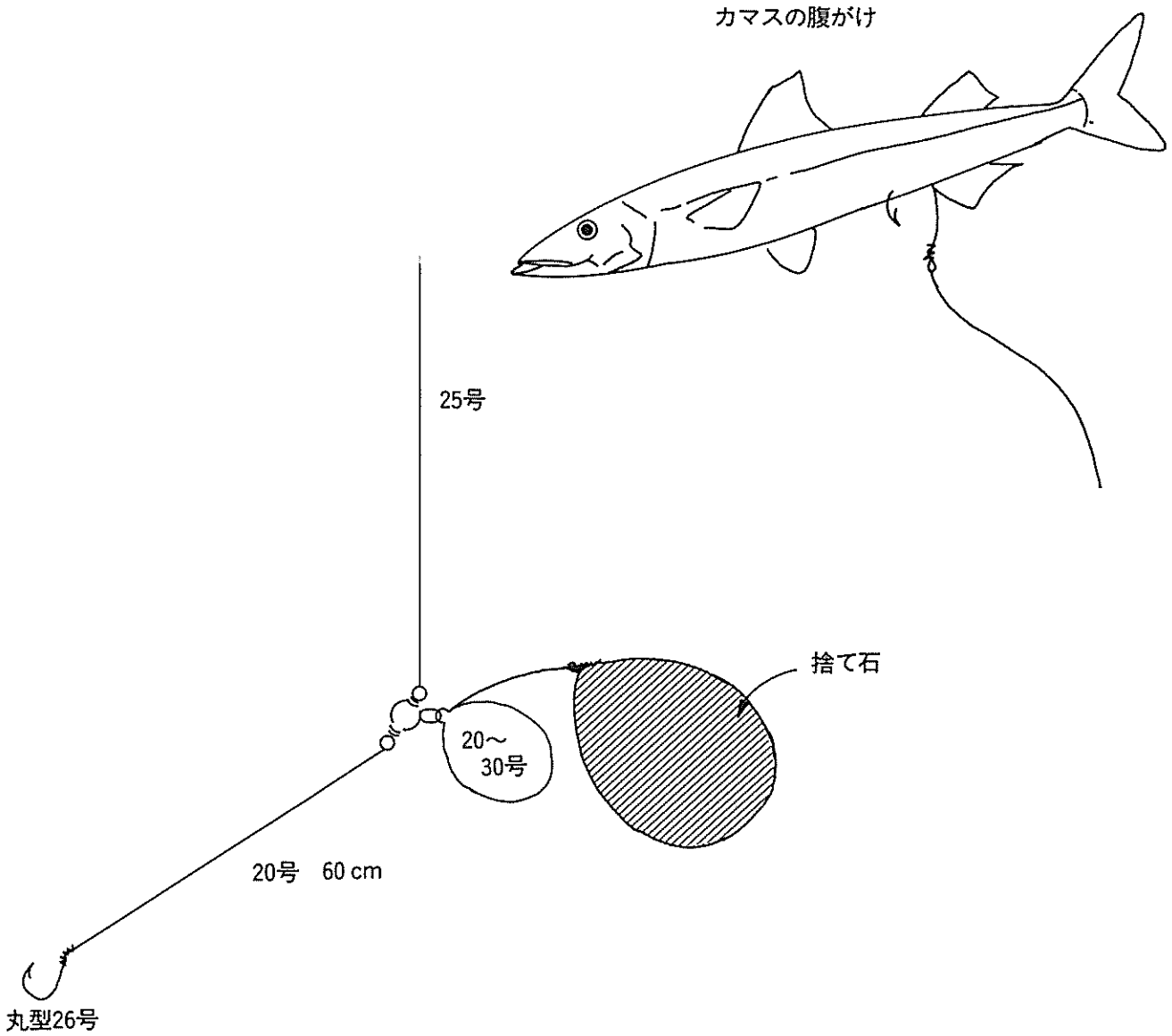
大型のイシナギは6尺を越える、漁法は1本釣である。

漁具の構造は道糸ナイロン30号、枝糸はナイロン25号を2寸とし、針は26号を使用する。大型のイシナギは生息水深が深く重量もあるため、作業を考え錘は20～30号とし、当りがあり合わせた時、はずれるようにしかけた石を取りつける。これは水深が深く魚が重いため、引き揚げ作業がし易いように考えられた。

漁場は根と根の間の深いくぼみの所が良く、水深は60尋前後である。

漁船に１～２人乗りこみ、山立てにより漁場の位置を決めると、カメの中に生かしておいたカマス（15～20 cm）を取り出して腹掛けし（腹掛けすると直正に泳ぐ）、仕掛けを投入する。仕掛けが底に着いたのを確認し、その後底から３尺程度引き揚げカマスを泳がせておく。当りは重くなるのでわかるが、そのままの状態で少しおき、のみこませてから引き揚げる。この漁では、同じ漁場にアオザメが多く、一匹めのイシナギを釣り揚げてすぐに釣り糸を下ろすとサメがかかるので少し時間をおいて釣りはじめることが必要である。

アオザメがかかった場合には、舟べりまできたらアオザメの口にモリを刺しこみ、動かなくなったのを確認し引き揚げる。




イシナギ（大）釣り漁具見取図

## 2　イカナゴ漁

本県沿岸におけるイカナゴは、０才魚は「コウナゴ」と呼ばれ１才魚以上は「メロード」と呼ばれる。

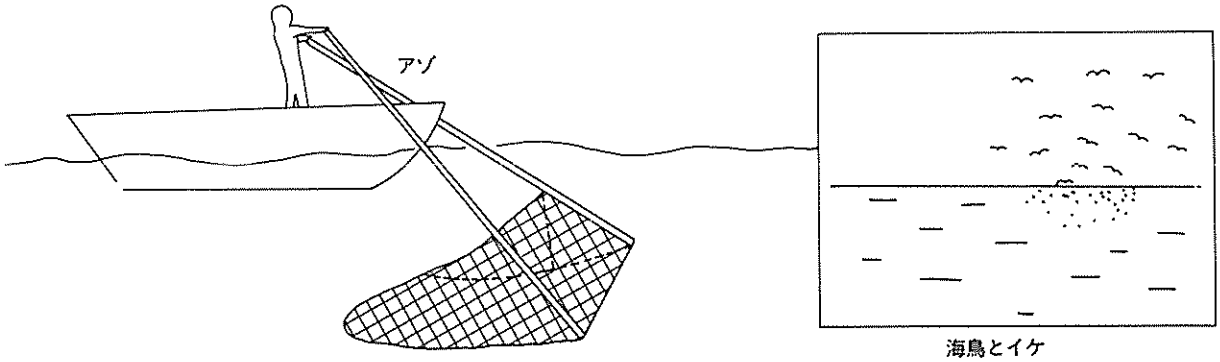
３～5 cmのコウナゴは煮干しとして利用されるが6 cm以上のコウナゴは養殖魚（ヒラメ、ギンサケ等）のエサとして利用される。

本種の産卵期は１月で、１月に生まれた仔魚は４～６月には４～８ cmに成長し、翌年の４月には10～12cmに達する。

イカナゴの生態で最大の特性は高水温期（７～11月）に海底の砂に潜入して夏眠することである。プランクトン食性でコペポーダ、オキアミ（イサダ）などを補食するが、夏眠期には補食しない。

漁法は、戦前はすくい網と船引き網であったが戦後は船引き網がなくなり、ランプ網が加わった。

### メロウドすくい網（牡鹿町寄磯）




**イケ抄い操業図**

この漁法は本県独特のものであり、明治時代から行われている。漁期は１～６月であり漁場は、初漁期（１～３月）は金華山周辺の岸、女川湾鮫浦湾で、盛漁期（４～５月）は金華山周辺の沖及び網地島沖、終漁期（６月）は網地島周辺である。漁具は船の舳先に25尺前後のひばの丸太材（アゾ）２本を図のように交差させて設置し、その前方に抄い網をとり付けたものであ。

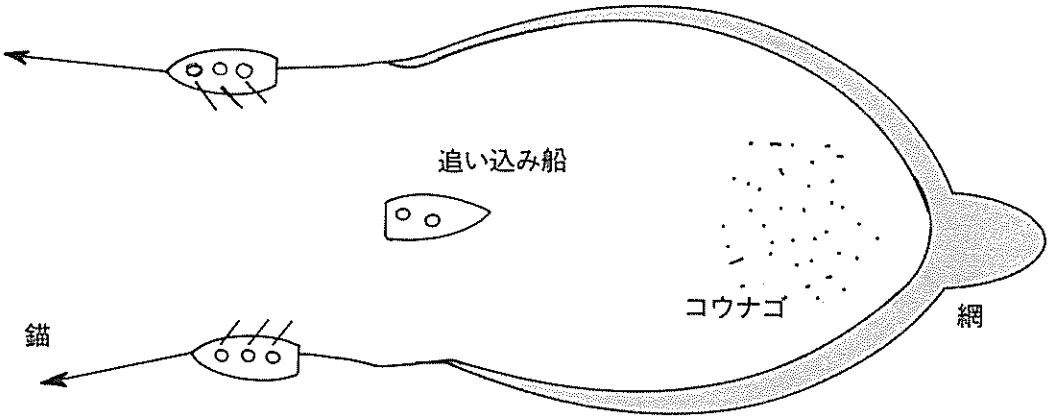
出漁は未明までに漁場に到着するようにする。ウトウ、ハナダカ等の海鳥が水中に潜ってメロウドを下から上に散乱しないように追い上げると、メロードは海面に盛りあがるように渦を巻ながら一団の塊となって浮上する。この様をイケと称し、海上からはウミネコ等が魚群めがけて飛びこみ補食する。この状景を見て漁師はイケが形成されたことを察知

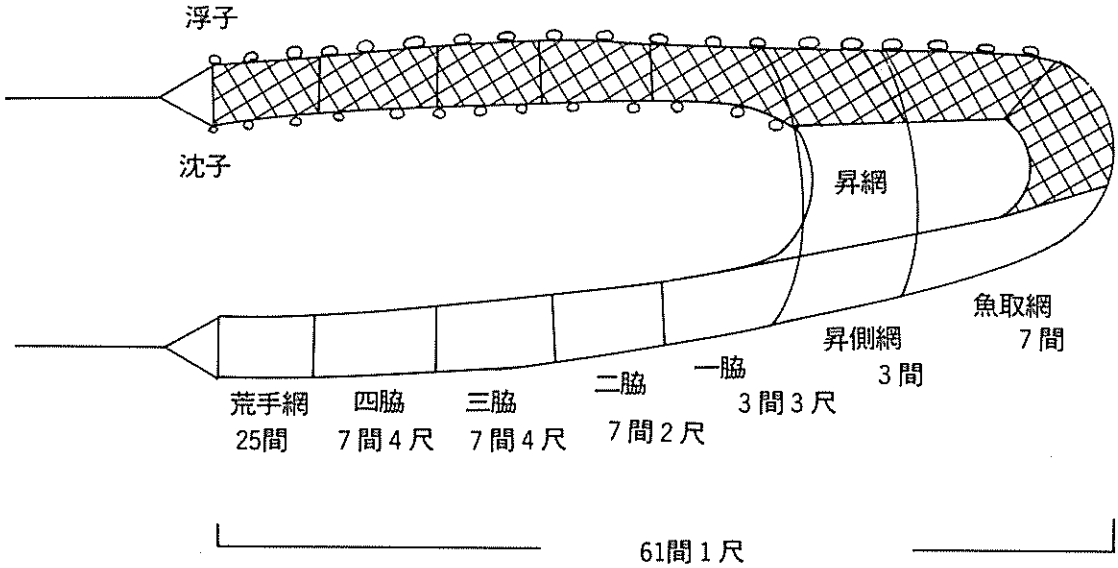
し急行して舳先に装備してある網を全面に差し入れ押し進むようにして魚群を捕獲する。

機械動力の無かった和船時代は、イケを発見すると全力で櫓と櫂を漕ぎイケに近づき、到着順を守ってアゾを差し入れていた。最近は機械動力船の発達と共に、船も次第に大型になりアゾの太さ、長さも和船時代とは比較にならないものとなり、イケを発見すると全力で近づき、機械操作によってアゾを差し入れ、イケの大きさによっては一網で数トンの漁獲ができるようになった。

又同一漁法でイサダ、イワシの漁獲も行なう。

## コウナゴ船曳き網（牡鹿町泊）




コウナゴ船曳網見取図

コウナゴ船曳き網漁は、昭和35年頃まで行なわれていたが、１回の操業で10人前後の人手がかかること等から、その後小人数で作業できる移動定置が普及していった。

網は、荒手網、４脇網、３脇網、２脇網、１脇網、昇網、魚取網と、次第に網目を細かくしていく。曳網の長さは、61間１尺である。沈子は20匁のもの350個、浮子は桐材で長さ６寸５分、幅２寸５分のものを使用する。曳網の長さは左袖は50尋、右袖は30尋位を用意する。

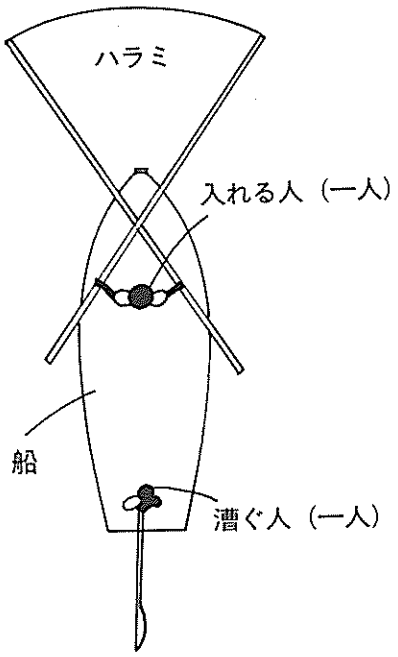
漁期は４～６月の３ケ月間で、水深７尋前後の砂地が良い。

３隻の漁船に10人前後乗りこみ朝出漁する。漁場（コウナゴの場合毎年同じ場所で操業する。）に着き、コウナゴのイケ（魚群）を見つけると、魚群の移動方向を見極め、魚取部より網を投入しながら魚群を囲んでいく。群を囲むと曳網を20～30尋延ばし、更に30尋位の錨綱を投入して曳網を開始する。この時、網舟、調査船とも竹を使い海面をたたきながら魚群を魚取部に追いこみ、最後に魚取部からコウナゴをすくい取る。１回の操業は１時間位である。

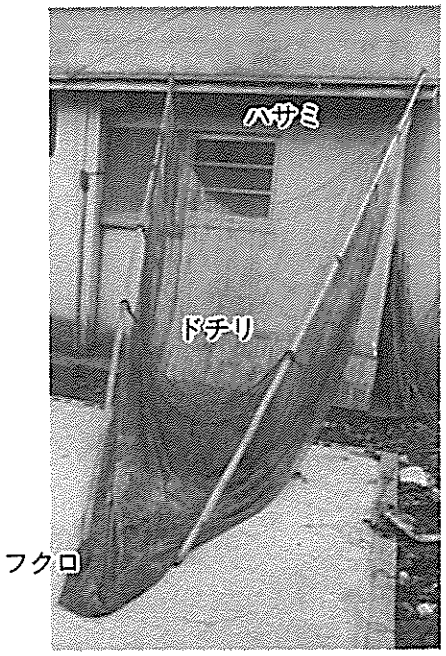
## コウナゴのすくい網（石巻市田代島）

４～６月まで、網地島・金華山の周辺でハラミと称するすくい網でシラス（いかなごの幼魚）のむれの位置をカモメの集まるのを見て知り、すくい、タモにて汲みとる。

注…田代島仁斗田浜




ハラミ操業図




ハサミ322 cm

ドチリ276 cm

全　長433 cm

ハラミ（しらすのすくい網

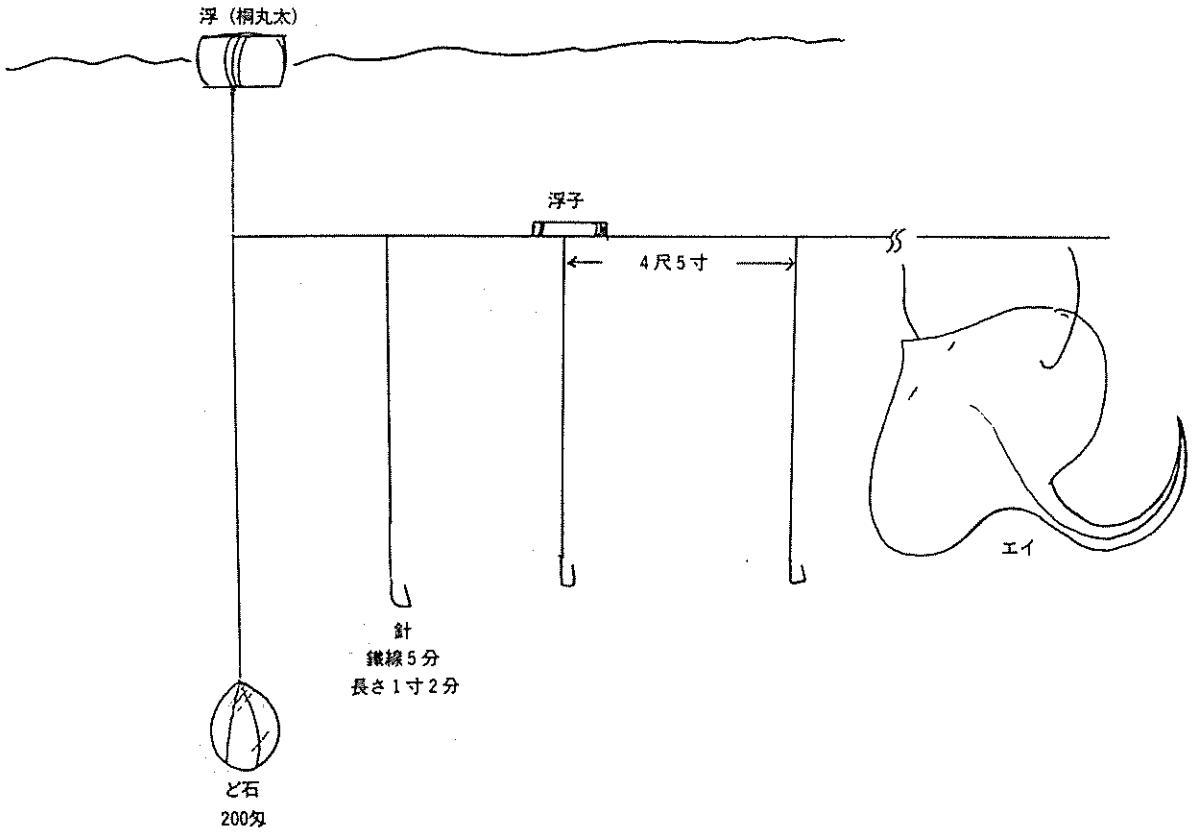
仁斗田浜）

## 3　エイの空釣り（矢本町大曲）

夏期（6～9月）に沿岸に接近して遊泳するエイを対象とした延縄漁法である。漁場は、10尋以内の砂泥質の場所である。

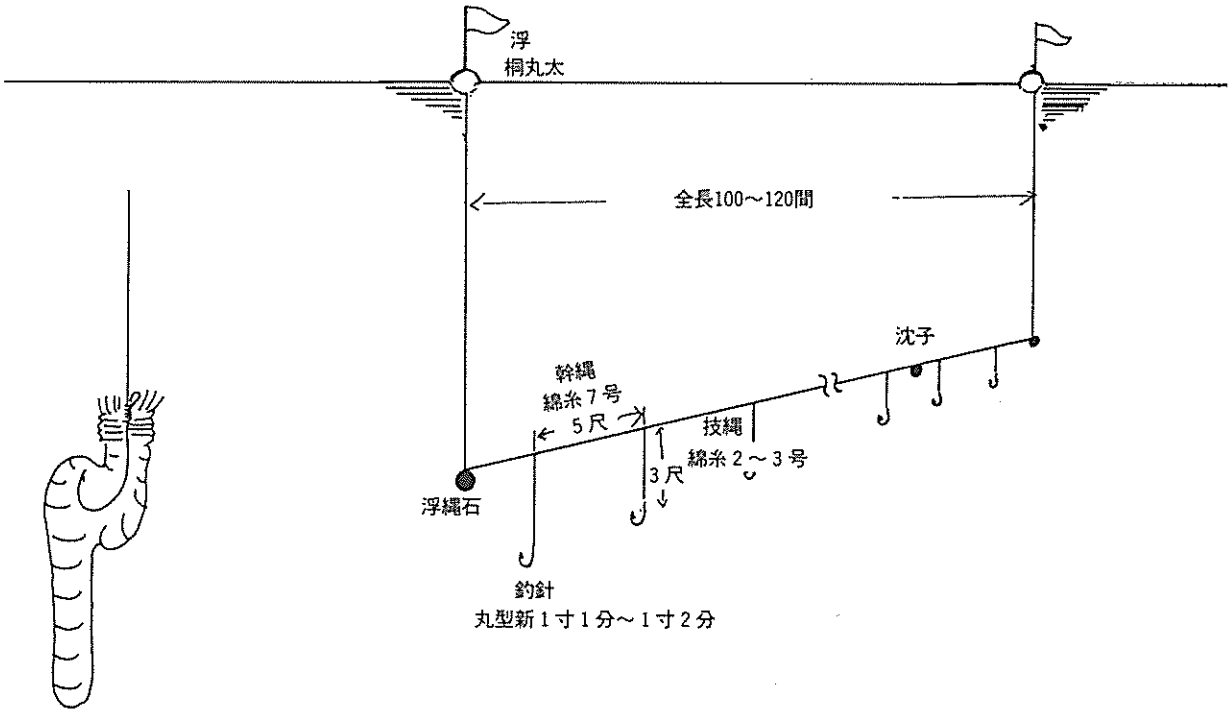
幹縄は岩手麻径7厘を用い、長さ71尋とする。技糸は綿糸4号、長さ1尺5寸のもの、幹縄4尺5寸間隔で結び付け1縄で78本使用する。釣針は鉄線5分長さ1寸2分のものを角に曲げて用いる。浮標は、桐丸太長さ1尺3寸、径2寸のもの3本。ど石は200匁位の石2個を両端に用いる。染料は、柏ノ皮染めとする。

漁船に3人乗り組み夕方出漁する。漁場につくと数鉢を継ぎ合せ1縄とし、投入を開始する。針には、餌を付けない。索餌等のため遊泳しているエイが、仕掛けにあたると、枝縄を押し分けて進もうとするため、針に掛かるそれを漁獲する。揚縄は翌日行なう。　この漁法は、戦前まで行なわれていた。




エイの空釣漁具見取図

# 4　カ　レ　イ　漁




カレイ延縄漁具見取図

## 延　　縄（牡鹿町新山）

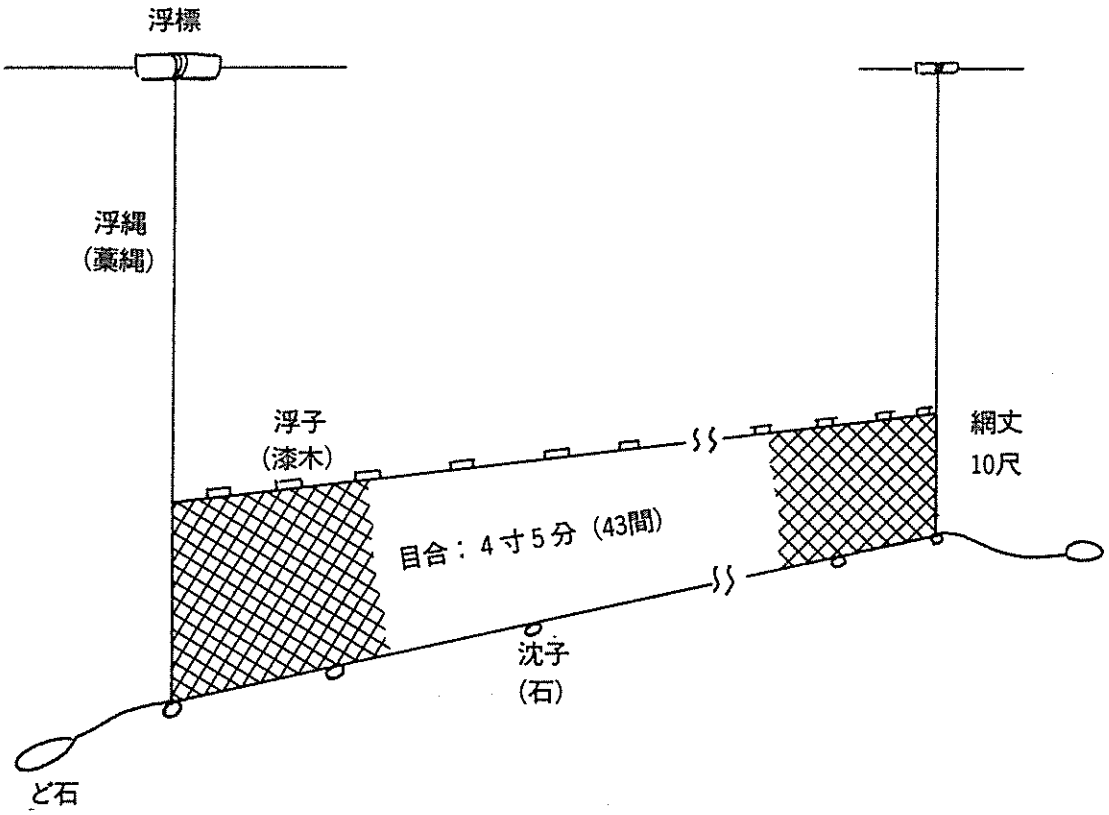
カレイ延縄は底延縄である。漁具の構造は幹縄に綿糸７号を使用し、全長は100～120間、枝縄には綿糸２～３号を長さ３尺とし、幹縄に５尺間隔で取付ける。釣り針は丸型新１寸１分～１寸２分を用いる。一鉢の延縄には100～120本の枝縄がつく。沈子は縄と縄の繋ぎ目に約40匁の石を一個、浮子は底のべた縄のため使用しない。浮縄には綿糸25号を水深の５割増しに、浮き縄石には200匁位の石を用いる。

漁場は水深20～30尋の砂地が良く、漁期は３月末～５月頃までの約２か月間である。

和船に男女一組となって乗り込み夜明けに漁場に着くように出漁し、漁場に着くと女が櫓を漕ぎ男が延縄の投入を行う。一隻で約10鉢の籠を使用する。投入終了後30分前後で揚げ縄を開始し、この作業を１日３～４回繰り返し行う。一回の漁で５～６貫目、多い時には７～８貫目の漁獲がありアオメ（マコガレイ）がおおくかかる。餌はエラコを使用するが釣り針に掛けるのは、出漁前に家族全員の作業で行われる。

カレイ延縄漁は現在も行われているが、戦後は刺網が多く行なわれるようになった。

## 刺　　網（牡鹿町新山）




カレイ刺網漁具見取図

漁法は底刺し網であり、春には水ガレイ、秋～冬にかけてはマガレイ（マコガレイ）を漁獲する。

網は長さ100間のものを浮き子方で五割、沈子方で五割五分の縮結を入れ仕立て上がり45間としこれを十反つなぎ合わせ一網とする。網地は綿糸２号を用い網目４寸５分、網丈10尺とする。浮木は長さ４寸７分、厚さ５分位の漆の木を一反に20～25個結び付ける。沈子には100匁位の石を一反に４～５ケ、網の両端にはど石として800匁位の石を取付ける。浮き標縄には藁縄を用いた。

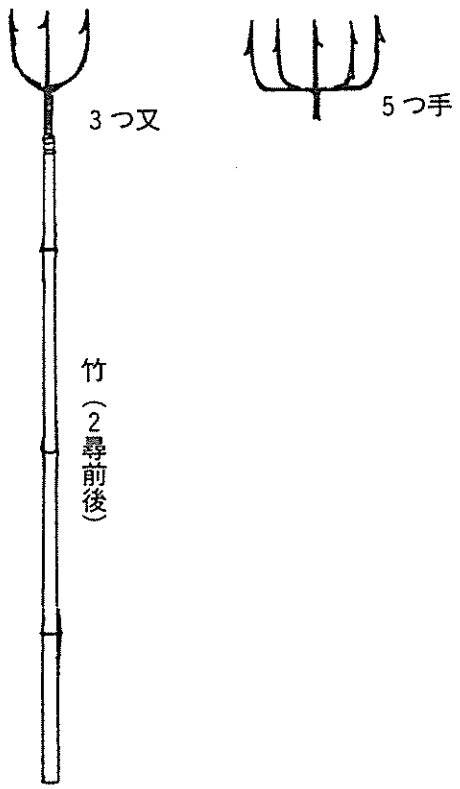
漁場は水深40尋までの砂地の場所がよい。

小船に二人一組で乗り組み、漁場に着くと浮き標を浮き標縄の一端に結び付け潮流を横断しつつ風上の舷側より投網を開始する。カレイ網は網地が軽く風の強い日には投網を行う先から網が船に押し戻されるため、風向には特に注意しながら作業することが大切である。投網は夕刻行い、通常翌朝揚網を行う。しかし、マガレイの場合冬が産卵期であり、

地元では、この時期のマガレイが網にかかると雌は苦しくなり産卵を行い、それによって雄が雌に近ずき網にかかるとして2日おきに揚げ網を行う。マガレイは網にかかり2日おいても生きているので、商品価値が下がらないことも揚網期間の長い理由である。

現在の操業では春の水ガレイ漁獲量が減少してきている。

## 5　クロダイトボシ漁（石巻市月浦）




クロダイトボシ漁具見取図

クロダイは、桜の花が咲き始める（5月）頃になると浅瀬に寄せてくる。この時期からトボシ漁は行われ、深みに下る麦刈り（8月）頃までに続けられた。

漁具としては、2尋前後の竹を用意し、細いほうの先にヤスを取付けたものを使う。ヤスは3つ又、5つ手を大きさにより使い分ける。

漁獲時間は、午後7時から8時半までの1時間前後であり、干潮から上げ潮になるときがよい。

夜間船尾にあかりを付けて箱メガネで覗きながら砂上にいるクロダイを突く。クロダイは音に敏感なので、箱メガネとヤスは海中に付けたまま櫓を操作してクロダイの上に行くこ

とが必要であり、その後は一気に突くのがコツである。

この漁ではコチも漁獲される。ヤスの使い方はクロダイと異なり、一度コチの頭上にヤスを下ろし、直ちにそのヤスを上にあげコチが油断したところを素早く突くという方法である。

クロダイ、コチは突いた瞬間身体を捻り回転するため大きいものになると突きざおが折られることもあった。漁獲サイズは大きいものでクロダイは2尺、コチでは1尺2寸であった。

現在トボシ漁は行われておらず、この地区（月浦周辺）では季節になるとクロダイを求めて釣り人が集まってくる。

## 6　コ チ 曳 き 網（石巻市祝田）

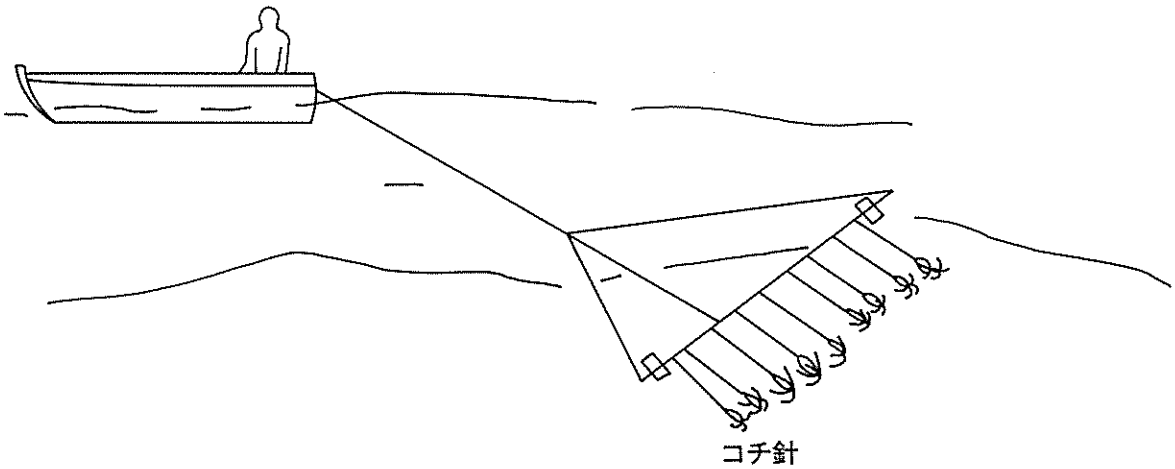
コチ曳き漁は、鉄棒に多くの針を取り付け海底をひきコチをひっかけてとる、空釣こぎ漁業である。

コチ棒（鉄棒）は、長さ4ｍで両側に木製の輪がついている。コチ棒には、コチ針を25本取り付ける。

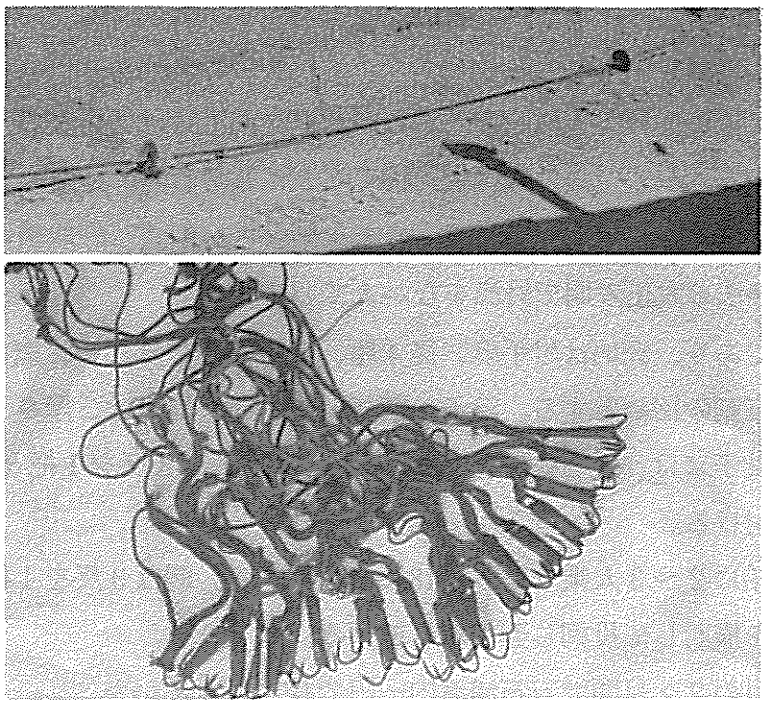
漁期は4～7月であり、漁場は、砂泥海域である。

コチ曳き和船に1～2人乗り込む。漁場に到着すると漁具を整備し、船尾より投入を行う。コチ棒が底についた後、舟曳きを開始する。曳行作業が終了後、曳網を巻き揚げ漁具を船中に揚げ、漁獲物を取りはずす。

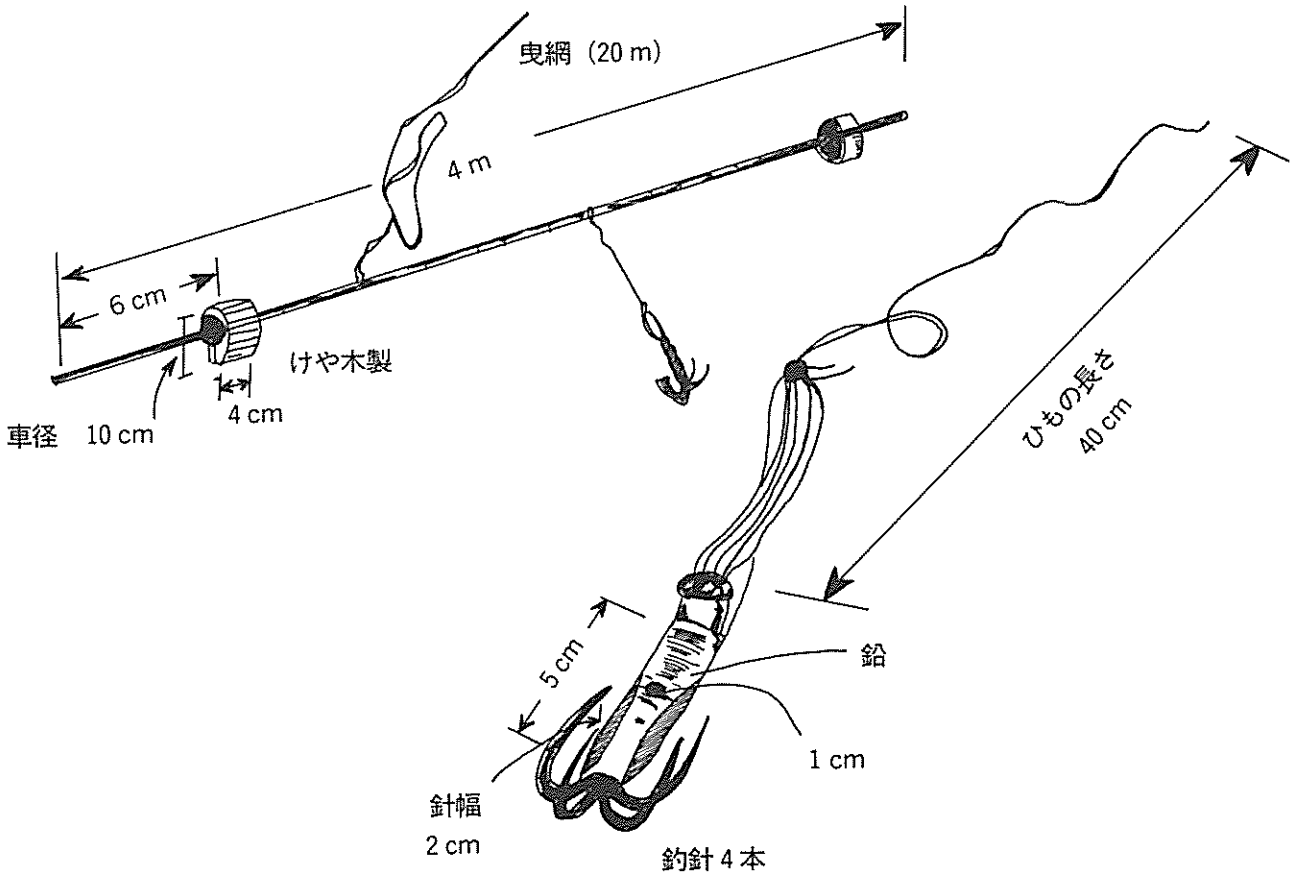
現在この漁法は行なわれていない。




コチ曳き漁操業図



コチ曳具




コチ曳き漁具見取図

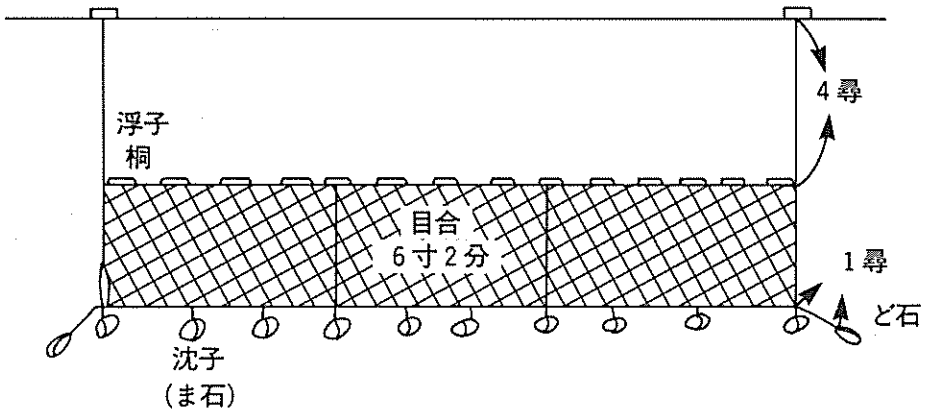
## 7　コヨソザメ刺網（石巻市渡波）

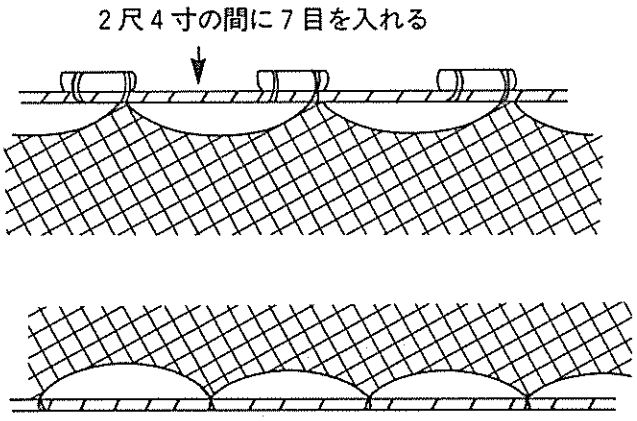
方言名トヨロザメ（ホシザメの一種であるが、現在漁獲されていないため、はっきりした魚名は不明である。)が５～６月の西南風強く吹きこむ時、産卵のため万石浦に入って来るものを捕獲する目的で、明治40年渡波町の末永東吉之が創成し好成績を得ていた刺網漁法である。この漁法も大正末期で終漁をむかえている。

漁法は底刺網であり、網地は岩手麻、径４厘、網目６寸２分とし、網は１反36尋を浮子方、沈子方とも五割の縮結とする。浮子は桐材長さ８寸、幅１寸、厚さ５分のものを１反に36枚用いる。沈子には、ま石約500匁１反に４個、ど石は３反を１把とし１把の両端に、約１貫目を取り付ける。

肩４尺位の漁船に２～３人乗り組み網18反を使用する。網は３反を１把とし、６ケ所に放ち、夕刻潮流を横断して投網し翌朝取り揚げる。

漁期は５、６月の２ケ月間で万石浦湾内一円で操業されていた。

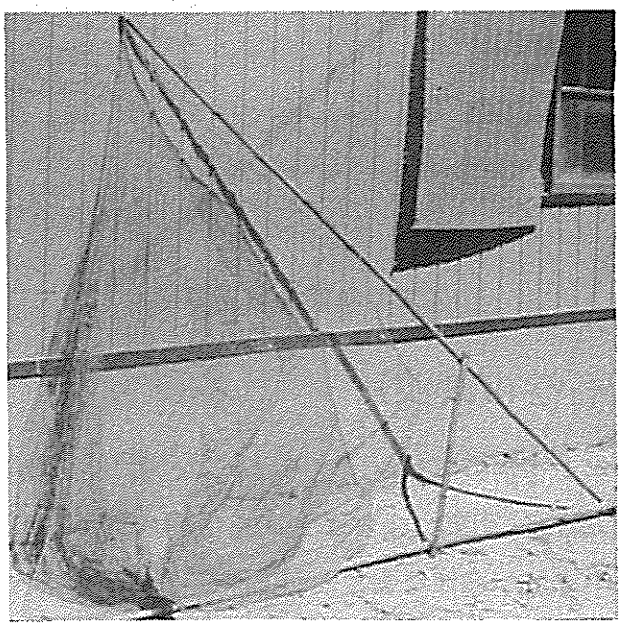


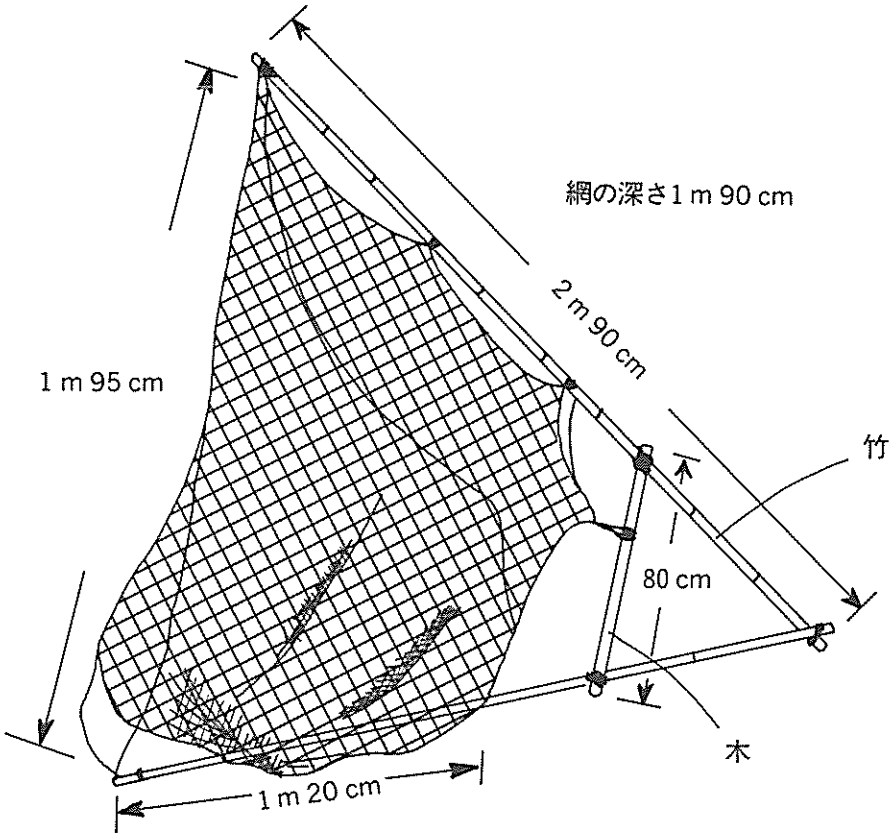




コヨソザメ刺網漁具見取図

## 8　シラウオタモ漁（石巻市祝田）

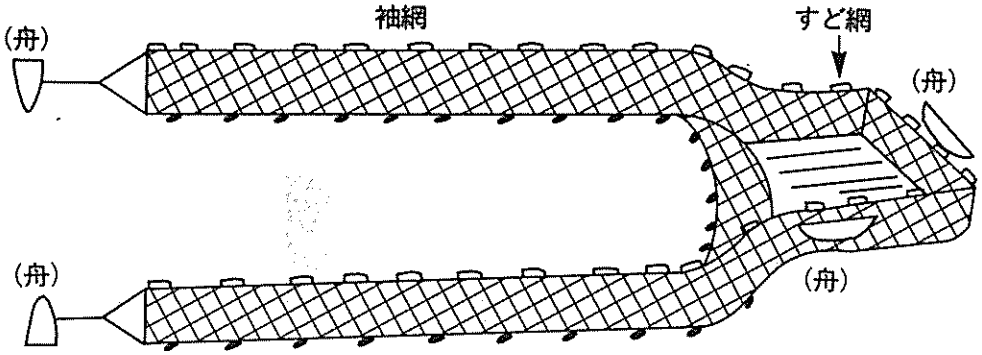
石巻市祝田浜では、三～五月にかけて佐須浜前より万石浦湾口付近に至る間、水深二尋以内の砂浜汀線近くに泳ぎ回るシラウオの群を砂浜で「夜とぼし」して待ち、魚影を認めるとタモ（手網）をもって海に飛び込みすくい揚げる。

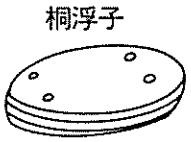





シラウオタモ漁具見取図

# 9　ス　ズ　キ　漁




スズキ巻網漁具見取図

## 巻　　網（石巻市渡波）

スズキ巻網は文久３年より始められた。当時は、すど網と垣網が一体となった構造で、魚群の一部がすど網に入ると、引網によりすど網を手繰り揚げ、垣網の沈子方も曳揚げた。この方法では、作業途中で魚が逃げだすことがあり、明治８年にすど網部に改良が加えられ、漁獲効率が向上した。

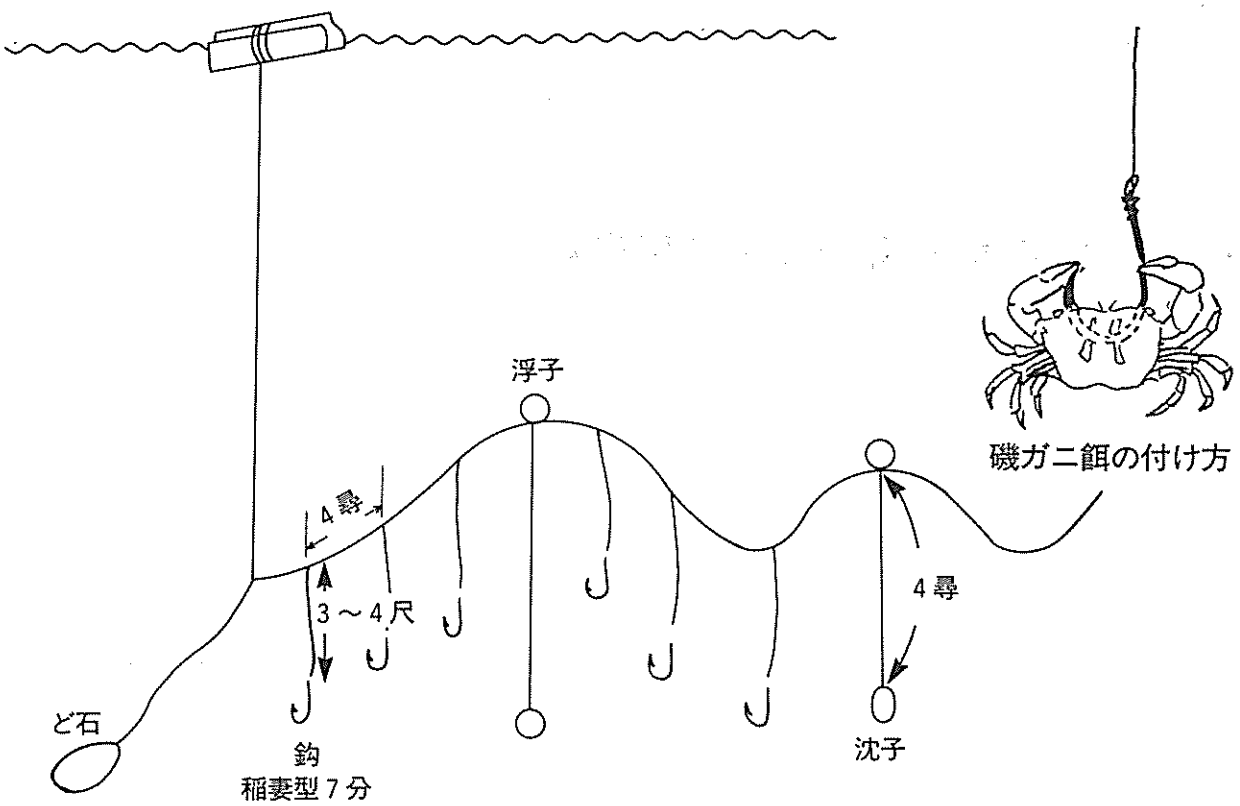
漁期は６～９月の４ケ月である。漁場は水深６～15尋までの、砂泥、暗礁の場所である。

網は、魚取網（すど網、縁網、曳切網、舌網）と囲網（袖網）からなる。浮子は桐製、長さ１～１尺１寸、幅２寸５分、厚さ８分のものをすど網には１尺５寸間隔で、袖網には２尺間隔で取り付ける。沈子は鉛製円筒型１個40匁ぐらいのものを１尺５寸間隔で結び付ける。

漁船は、巻網船２隻（各５人乗）、すど船１隻（８人乗）、魚見船１隻（４人乗）、錨船１隻（４人乗）合計５隻を１ケ統とする。漁場では、暗礁や藻上に群集しているスズキを見つけると、魚見船の指示に従い、潮下から潮上に向って２隻の巻船はすど船のすど網に垣網を綴合し、投網しながら魚群をおいたてる。その後錨船と魚見船は、投錨を行い、網の曳き寄せ作業を行う。魚群がすど網中に入ったなら曳切り縄により曳切り網を曳上げ魚群の逃網を防ぎ捕獲する。

## 延　　縄（牡鹿町前網）

スズキ延縄は、笠貝島、出島、金華山等、島の周辺や外洋に面した岩礁地帯で行なわれる浮延縄で、水深30尋以内の場所で操業する。




スズキ延縄見取図

漁具の構造は、幹縄に綿糸10号を用い長さ約130間を一鉢として使用する。技縄はナイロン6～7厘を使い、幹縄4尋間隔で、長さ3～4尺とし結びつける。釣針は稲妻型7分を用いる。浮子は漆の木を六角型とし長さ5寸径1寸を1鉢に8枚使用する。この漁では、浮子を使い餌の位置を変えるが、これはスズキがその時により、遊泳層が違うことから、常に餌に出会うように調整するためである。沈子は、50匁の石一鉢に8個、沈子糸は綿子20号を4尋の長さとして取り付ける。ど石は200匁位の石を2鉢に1個の割合で用い、浮標綱に結ぶ。浮標綱は綿糸9号、浮標には桐を使用する。

漁期は、4～10月の7ケ月間である。

スズキは、活き餌を好むため、餌は重要であり、4月にはメロード(イカナゴ)、9月には磯ガニを使用する。磯ガニは、出漁前取り集めるが、スズキは赤い色のカニ（場所により赤い所と黒っぽい甲らの所がある。)に食い付きが良いため、採集場所を見つけておくことも必要である。

漁船に1～2人乗りこみ、早朝漁場に着き投網を開始する。餌は、カメに活かしておいたメロードは背掛け、カニは足の付け根から甲らに針を刺しながら投縄を行う。日の出前に作業を終了し、2時間位縄待ちをし、揚縄を開始する。また場合によっては、夕方投縄

し、翌朝揚縄することもある。

一回の出漁で10～15鉢を用意するが全部を継ぐ場合と、漁場又は水深を調整して分けて使用する場合がある。最大のスズキでは４尺、３貫目のものが漁獲された。

## 10　タナゴボイ網（石巻市田代島）

ⓐ 長い竹竿で水面をたたく

ⓑ 海底にある石を引き上げ遠くへなげる

ⓒ 磯の周囲にある刺網をあげる（昭和51年夏　ニッタ浜　朝７月干潮→満潮）

タナゴボイ網漁操業図

昭和51年７月下旬、田代島仁斗田浜の湾内で、明治にあったタナゴボイ網漁をしていた。

朝６時、靄のかかった湾内にひたひたと潮が寄せてきた時をみはからって、船の上の老漁師が一人長い竹竿でぴしゃぴしゃと海面を打つ。次に海底にかくれたタナゴをびっくりさせるために、前もって沈めてあった石をいきなり引き揚げ、遠くへ投げる。磯の岸近く逃げた魚が磯の周囲にはりめぐらされた刺し網にささり、一網打尽にされる。この漁は現在おこなわれてない。

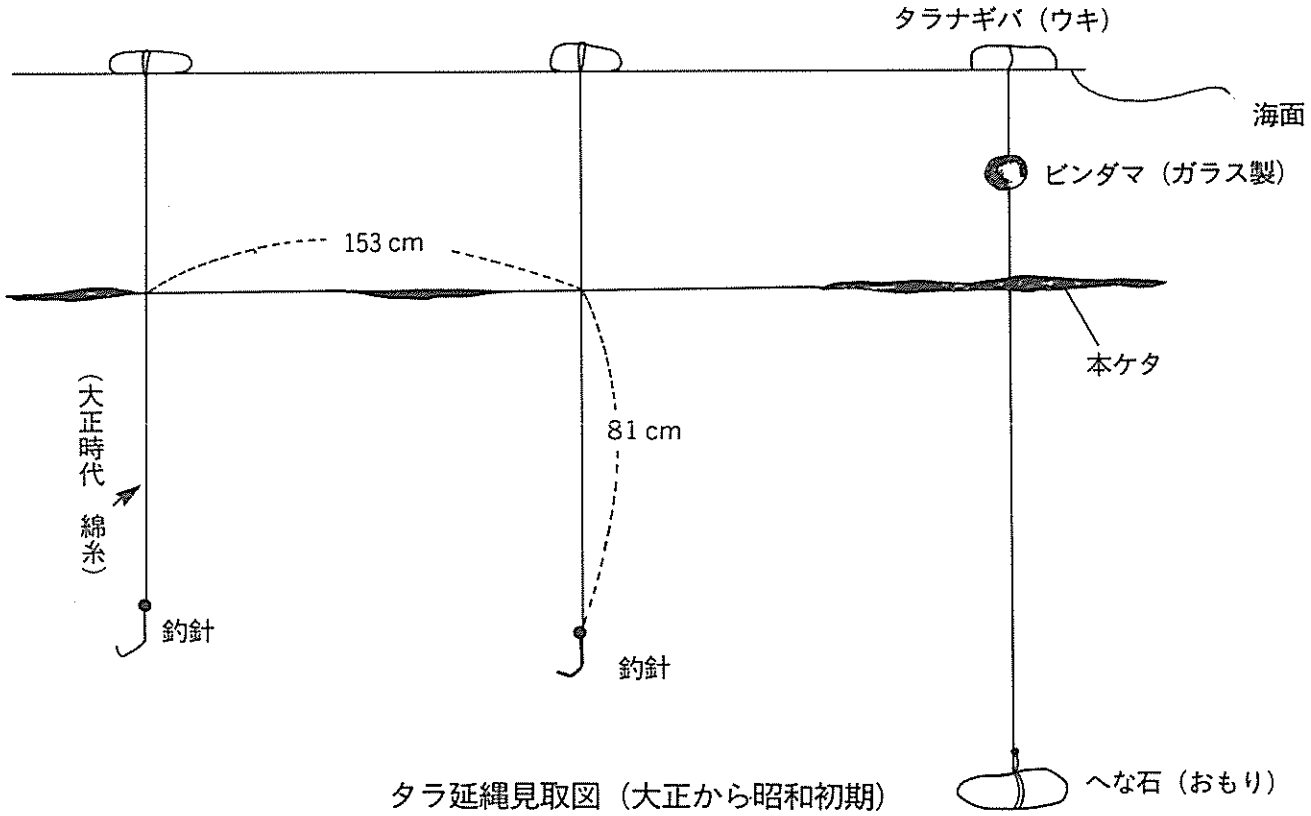
# 11 タ　ラ　漁

## 延　　縄（石巻市福貴浦）

石巻市福貴浦では大正から昭和10年頃、１～２月にかけて、金華山・田代島沖で直径60cmの縄カゴに、延縄をつみ、鱈漁をした。

釣針は60本、ウルシの木のタラナギバ（タラ縄のウカシウキをさして言う）をつけ、釣針に鰯をかけて漁をした。

注…石巻市抓崎ではウキは桐、釣針はハンコウセンを使用、延縄を流しているとき海中の中間にビンダマを用いた。




タラ延縄見取図（大正から昭和初期）

## 刺　　網（牡鹿町新山）

この漁は、冬至（12月22日）頃から約１カ月間行われるマダラを対象とした底刺し網である。

マダラは12～１月にかけて産卵のため接岸してくるので50～60尋の浅場で漁獲できる。雄はキク（精巣）、雌は卵をもっているので商品価値が高く漁獲対象となっている。その後も漁獲出来るものの２月になると産卵を終えた群が徐々に深みに下り始め、しかも悪天

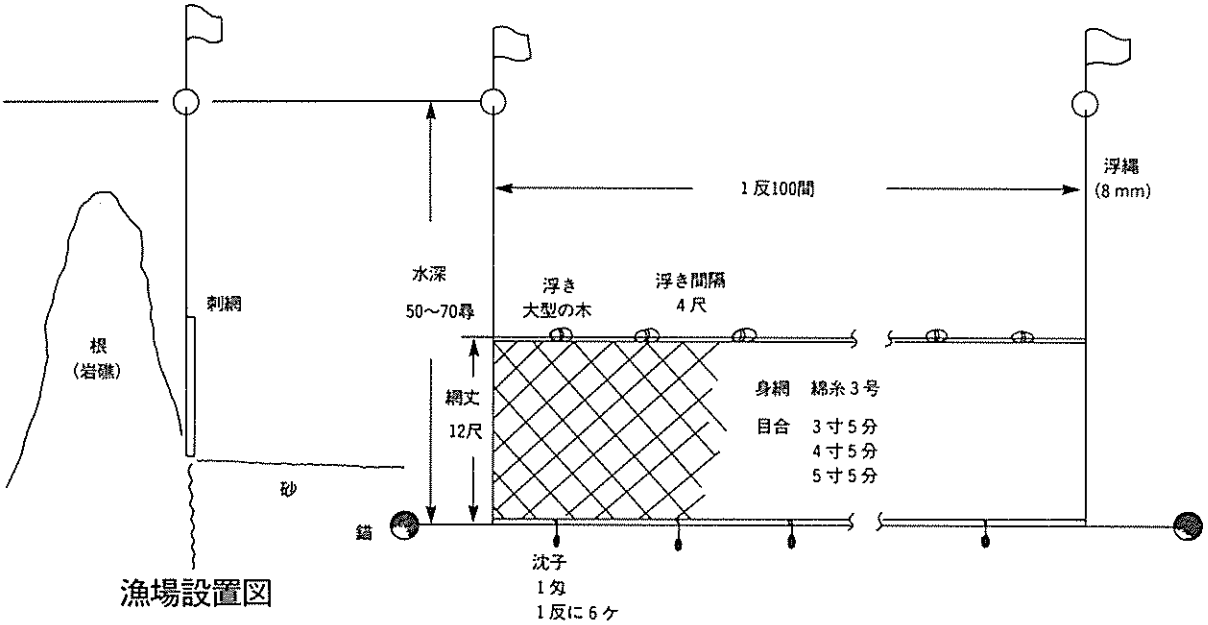
候の日が多くなることから漁は行わない。

刺網の長さは１反100間で網丈12尺、網目３寸５分～５寸５分を用意しておき、その年のタラの大きさにより使い分ける。浮子は魚体が大きく数も多いため足の強い大きめの木(漆の木)を４尺間隔で、沈子は300匁位の石を１反に６個前後取付ける。ど石は３貫の石を使用する。網は50反前後用意し３反を繋ぎ１網とし、投網場所を分けて使用していた。

漁場は金華山周辺の50～60尋前後の根（岩礁）と砂地の境がよく、毎年同じ場所につく。

手漕ぎ船に３人１組で乗り込み出漁し、夕方漁場に着くと山立法により正確に位置を定め、網を一直線になるように投じる。揚網は通常翌朝行う。網丈は高いほうが漁獲量が多いものの風の強い日には投網中に船に網が戻されるため丈を高くすることはできなかった。大正から昭和の初めは一度に100～200本の漁獲があり、揚網の途中で船が満船になるため、50間分位を揚げると浜に引き返し網ごと下ろし、又揚網を繰り返した。

現在では、一回の操業で10～20本の漁獲がある。




タラ刺網漁具見取図

## 12　ヒ　ラ　メ　漁

### 刺　　網（牡鹿町新山）

ヒラメ刺網は５～10月迄の６ケ月間行なわれる底刺網である。

ヒラメは大きさにより呼び名が異なり、漁期によって５月はハガ、７～８月はヒラメ、９～10月はソゲが多く漁獲される。

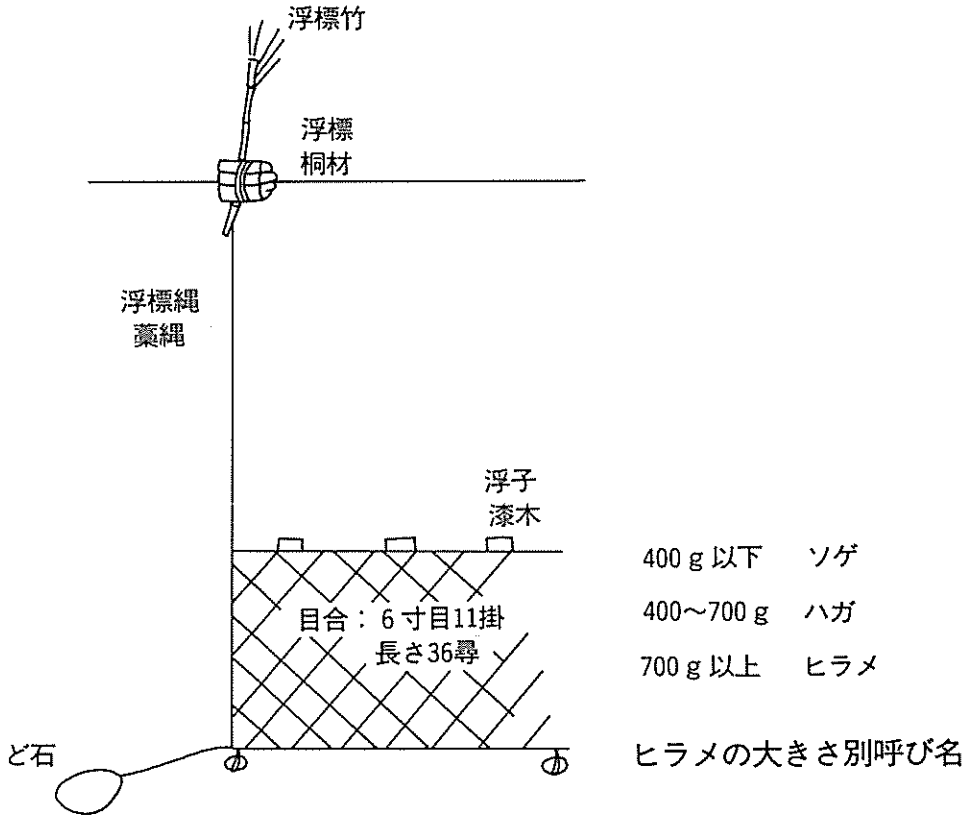
漁具は網地に岩手麻を使用し、目合６寸目11掛、長さ75尋のもの一反とし、浮子方４割

9分、沈子方5割3分の縮結を入れる。浮子は漆木長さ5寸5分、幅4分、厚さ3分のものを浮子綱2尺2寸5分の間隔で1枚を取り付ける。沈子は重さ100匁の石を藁縄に包み1反に2～4個を結びつける。浮標綱は藁縄径3分5厘のものを、浮竹には長さ1丈2尺、元径5分位の細竹を使用する。

漁場は2～40尋までの、根（岩礁）に続く砂地が良い。

手漕船に2～3人乗りこみ漁場に着くと微速で船を走らせ、10反の網を継ぎ合せ、一線になるように投網する。揚網は、翌朝行う。ヒラメは日中泳ぐため短時間での操業もおこなえる。

現在は漁具の改良が進み、カレイ刺網との併用で操業されている。

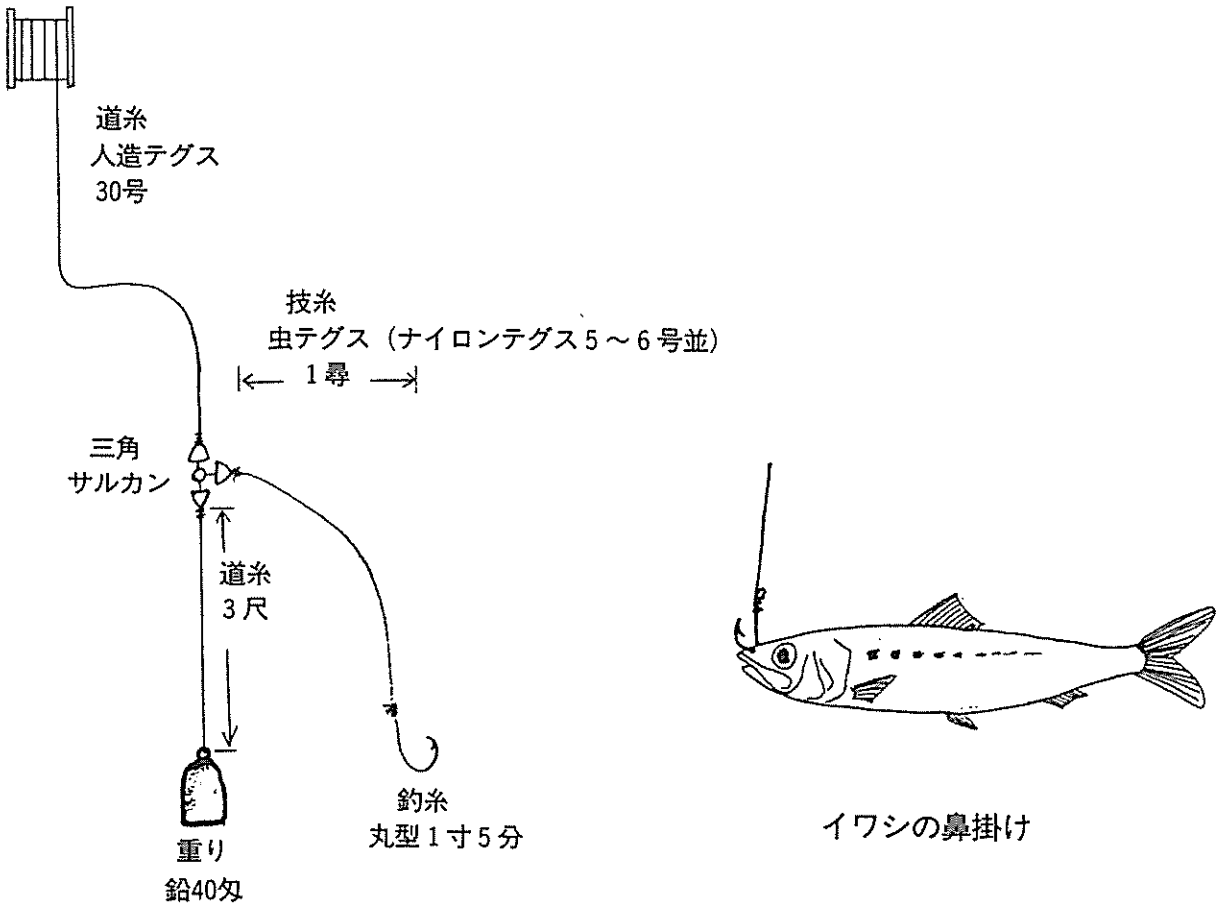



ヒラメ刺網漁具見取図

## 釣　　り（牡鹿町新山）

現在ヒラメ釣りは遊魚の対象となっているが、この漁法も古くから行なわれている一本釣り漁業の一つである。

入梅（6月）に入り沿岸に靄がかかり始める頃浅瀬に寄せてくるヒラメを、地元ではワカメのみみ（芽株）をかじりに来たといい釣りの対象としている。




ヒラメ釣り漁具見取図

漁具は、道糸に人造テグス30号を使用し、その先に三又サルカンを取付け、下に道糸を３尺伸ばし、重りは鉛40匁のものを取り付ける。枝糸にはクリムシから採った虫テグスを一尋の長さとし、釣り針１寸５分のものを結び付ける。道糸として使用している人造テグスは絹でてきており、現在のナイロンテグスと比べると弱く大型のヒラメがかかると切られることもよくあった。

漁期は６～８月の約２ケ月間、漁場は８～30尋の岸に近い砂地や根（岩礁）の上が最適である。

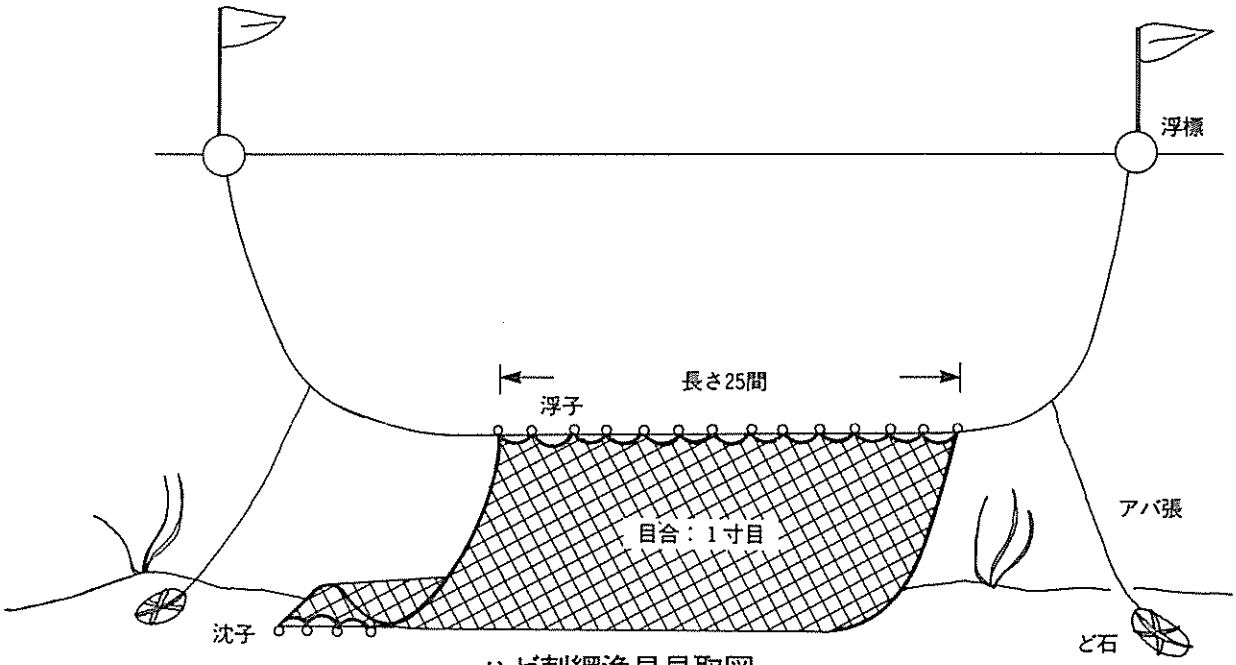
餌は、マイワシかカタクチイワシの生きたものを使うため、鮫の浦にあるイワシ定置から買入れる。これは生け簀で馴らしたイワシでないとカメ（魚艙）に入れた時壁面にぶつかり活力が弱くなるため生き餌として適さないからである。ヒラメはイワシの大きさにより、20 cm 以上のマイワシを使うと大型のものが、カタクチイワシでは小型ものが釣れる。

漁は朝夕の２回行われ、手漕ぎ船に１～２乗り込み漁場につくと、カメの中に生かしておいたイワシを殺さないように素早く取り出し、鼻掛けして海中におろす。その後、重り

がそこについたなら釣糸を少し上げ、釣り餌を底すれすれま所におく。イワシはヒラメが近づくと逃げようとするため糸の動きが変わり、その後重くなる。この時ヒラメはイワシを半分だけ噛みついており、すぐに合わせると餌が噛み切られてしまうのでキセル（タバコ）を一服吸う位の時間をおき、呑み込ませてから合わせるのがコツである。その後糸を手操り寄せ水面近くに見えたらタモ網を頭から被せるようにしてすくいとり船に上げる。

この釣りでは大きいもので4貫目のものもあり、アタリで合わせてから船に上げるまで1時間前後かかり、船に上げてからも2人ががりで押さえたものの力が強く跳ね上がるなどして道具が海に投げ出されることもあった。

## 13 ハ　ゼ　漁




ハゼ刺網漁具見取図

### 刺　網（河北町長面）

ハゼ刺網は底刺網であり、10～12月までの3ケ月間行なわれる。

漁具としては網の長さ1反25間、網地はアミランを使用し、目合1寸とする。網丈は3尺5寸。浮子は小型のものを6尺の間隔で1個ずつ、沈子は4尺に1個を結びつける。ハゼ刺網での要点は、浮子に腰の弱いものを使い、網を刺した状態で、網が底に少し横たわるようにすることでハゼの掛かり（ハゼは底をはいずって動いている。）を良くすることである。又1回の操業で50反前後使用する。

夕方出漁し網を継ぎ合せて一網とし、翌朝揚網を行う。投網場所は泥場で秋口には浅瀬

に、寒くなると深みに移る。この漁では場所の選定が大切で、カニ（ケフサイソガニ）が多くいる所に刺すと、折角掛ったハゼも翌朝までカニの食害を受けて商品価値がなくなってしまうためである。刺網で漁獲されたハゼは持ち帰り、その日のうちに焼干し作業を行う。又資源保護を考え、１日に家での焼干しを行える量を漁獲するようにし、漁獲量に応じて反数を調整する。

この漁ではギンポも漁獲される。ギンポは地元（河北町長面）では、ハゼよりも雑煮のダシが出て美味しいとされ、焼干しにしてダシ用に用いられている。かつてはボタ（桧葉）漬け等で漁獲されていたギンポも漁獲量が減少し、現在ではハゼ漁の雑魚（よろこばれる）として、取扱かわれている。

ハゼ刺網はサヨリ浮流し網にハゼが引っ掛ったことからヒントを得て、ハゼ用に改良され昭和30年頃より、それまで主漁法だったかけ廻し漁に変り、操業されている

## 釣　　り（河北町長面）

長面浦のハゼ釣は、ジュズコ（数珠こ）釣りとも呼ばれ、針を使わない漁法である。

漁具は、竹竿４尺５寸のもの２本、道糸は綿糸９号を竿の倍の長さ（竿釣りで取扱のできる長さ）を用意し、竿に巻いておき、水深により調整できるようにしておく。錘は親指の爪ぐらいの石や、鉛を使用する。又この漁で最も重要なのは、シュズコであり作り方は長さ15～20 cm の麻糸を用意し、これにカイ（イソシジミ）とミミズを交互に挿し通す。ハゼはカイの方が食いが良いが、餌持ちをよくするためミミズも使用する。全部挿し終ったなら握りこぶし大の数珠を作り道糸に結びつける。松島湾でもジュズコ釣が行なわれているが、違う点としては生餌をそのまま使用することで幾分餌持ちが悪いためジュズコに餌が少なく（食いとられる）なると舟の中で作りながら操業することである。

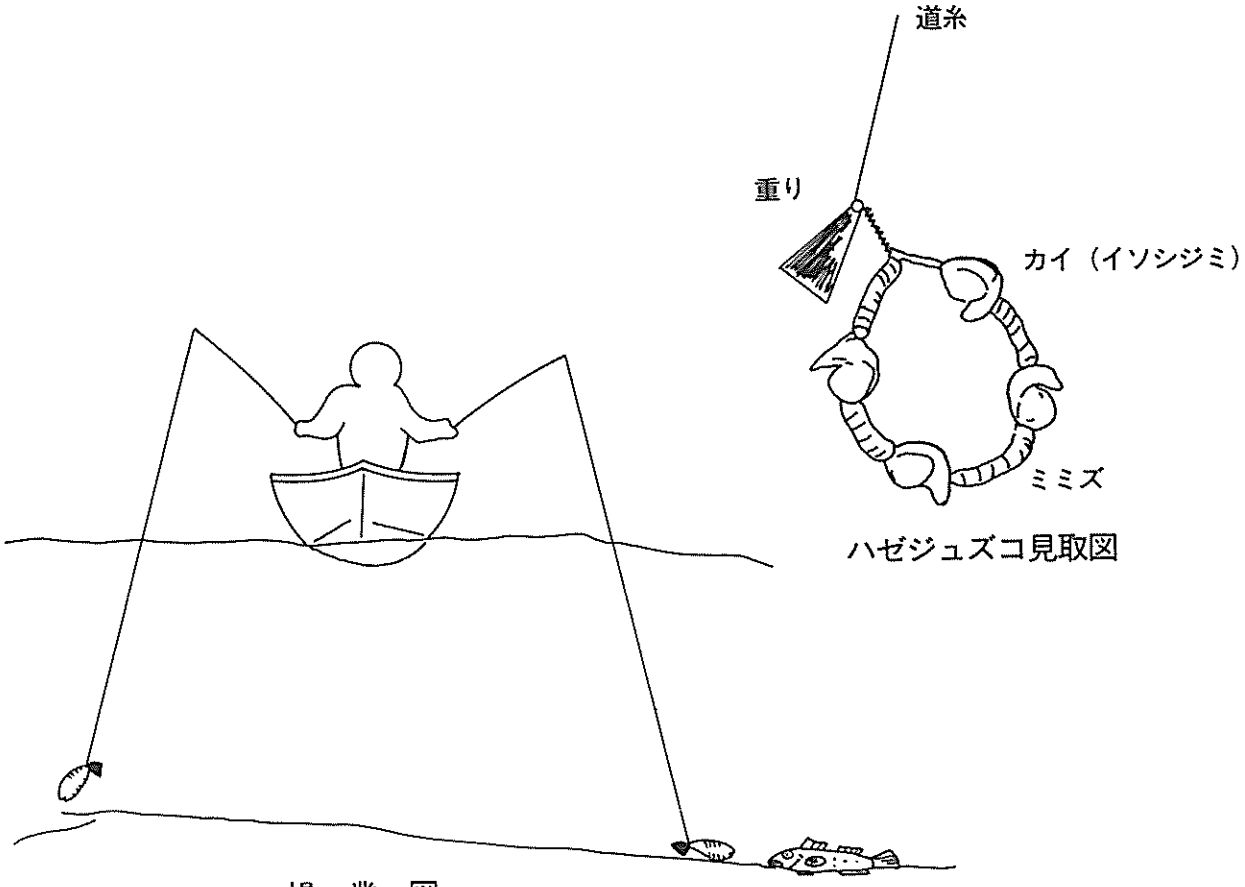
ハゼ釣は、作業的に楽で、コツを覚えると簡単なため年寄や子供たちの仕事であり、漁期は秋の彼岸から11月下旬までである。

出漁前にミミズやカイを採集し、船に用意しておき、夜明け前又は上潮に合わせて出漁する。漁場に着くと舟を流し、流れに乗せ、竿２本を取り出し両手に握る。浅瀬の場合は座ったままで、深くなると立って釣を始める。まず竿を上下に動かすが、動作は軽く小幅に動かし錘が底をこづくようにする。当りは強く横に引張るような感じである。当たりがあった場合は、静かにゆっくりと引き寄せ水面に来たら素早く取り揚げる。この釣では針がないため引き揚げる途中で糸を緩めたり、必要以上に強く引いたりするとハゼが餌を離してしまい逃げられる。このことを鼻をかくといい、餌がとられた状態を指す。

ジュズコは古い（いきが悪い）と食いが悪くなる。又補助漁具として、針のついた仕掛け

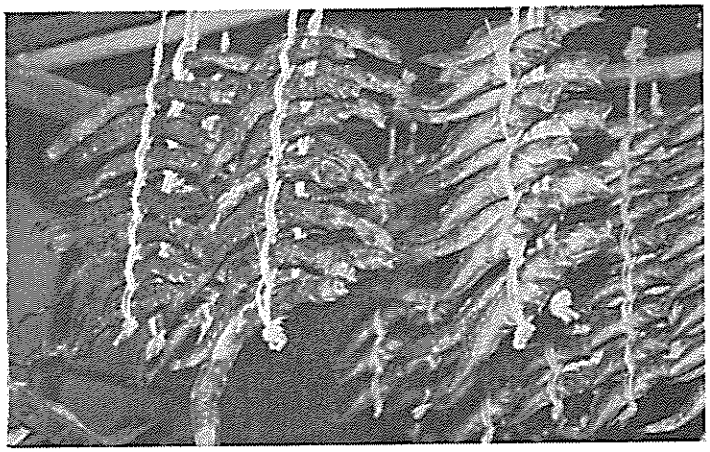
を取り付けた竿をもって行き、ジュズコの食いが悪いと使用していた。

１回の操業で１人100～300匹の漁獲があったが、昭和40年頃でジュズコ釣は行なわれなくなり、現在は刺網漁が行なわれている。




ハゼジュズコ見取図

操　業　図



ハゼ（右）とギンポ（左）の焼干し

## 14　ハモ（マアナゴ）漁

本県沿岸でハモと呼ばれているのは、マアナゴのことである。本種は夜行性で日中は岩の下や泥砂中に潜み、夜出て索餌を行う。食性は動物食であり、カニ、エビ、小魚を補食する。また産卵場は本県沿岸にはなく、アナゴの子供とはとても考えられない柳の葉の様なペラペラした形をした透明な稚魚が春季に来遊してくる。この稚漁が多い年は沿岸の漁獲量が増加する傾向が見られる。

漁法は延縄、胴、釣りがあり、いずれも夜間操業である。アナゴは水温が低下すると餌を食べなくなるため、これらの漁は５～12月にかけておこなわれる。

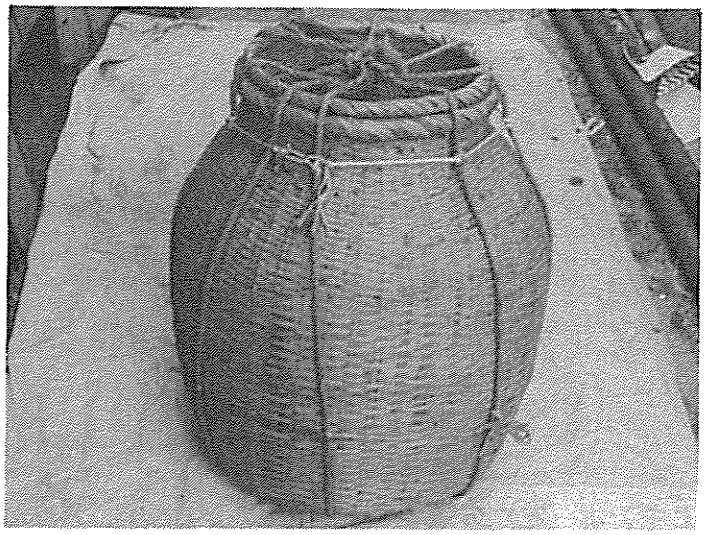
### 延　　縄（石巻市月浦）

ハモ延縄の漁期は６～10月で、漁場は水深15～16尋の砂泥の場所である。

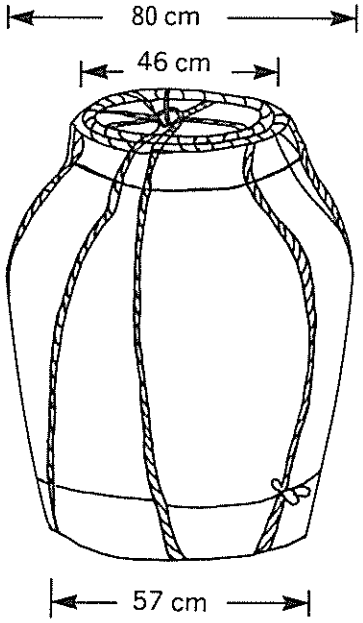
和船に２人乗り組んで夜間操業する。

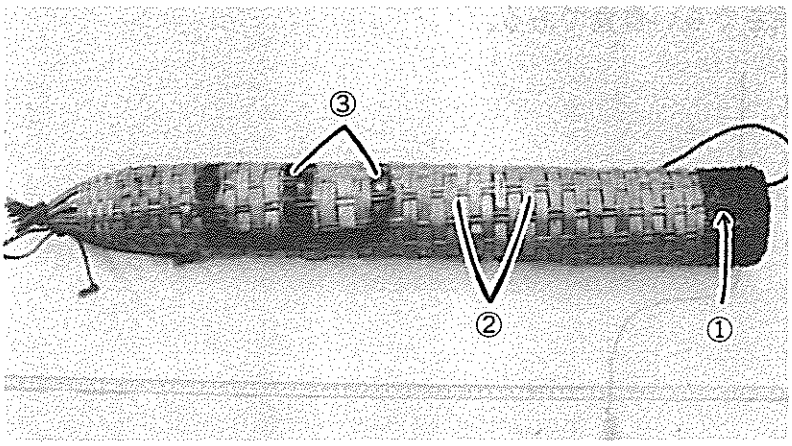
出港は日没頃で、漁場に着くと１人は漕ぎて１人は投縄とわかれる。船をゆっくりはしらせ、まずボンデンから投入していき、餌のカサゴ（メバルの子）を針にかけながら投縄作業を行っていく。１縄で90本の針を使用する。投縄を終了後１時間位縄待ちをし、揚縄作業を開始する。明け方まで延縄をそのままにして置くと掛ったハモは、技縄を絡んで死んでしまうため、永い時間置かないようにすることが大切である。

### ハ　モ　胴（石巻市福貴浦）

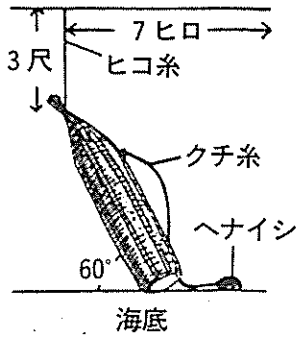


ボケカゴ（ハモ（アナゴ）を生かしておくかご）






ハ　モ　ド




ハモ胴漁見取図

①のクチはスズ竹…青くてしなる
②カラ竹（普通の竹）…縦
③スナイ竹（やわらかい真竹）…横
餌はズボロ（小さいカタクチ鰯（いわし））かイカ（福貴浦）

石巻市福貴浦は大正から昭和37・38年頃まで、ハモ胴漁の根拠地であった。漁期は５～８月までは田代沖、９月から11月までは福島県沖で操業した。

縄籠は、１籠30把（30の胴）、ケタ縄は７尋おきに1ｍのヒコ糸を結び、ヒコ糸の先に胴をつるす。胴はクチ糸につけられたヘナ石（おもり）で安定を保つ。

胴はスズ竹・カラ竹・真竹を編んで筒・円錐状に作り、口部に返しをつけて魚が入りやすく、しかも出ることが出来ないようにあまれている。これにズボロ（小さいカタクチイワシ）やイカの細切れにした餌を入れ、夕方陽のおちる頃海底に沈め、翌朝午前３時頃水底から順にたぐり上げ、胴尻の糸でしばってあるところをほどいて獲物を取入れ、再び餌を入れて海底に沈める。

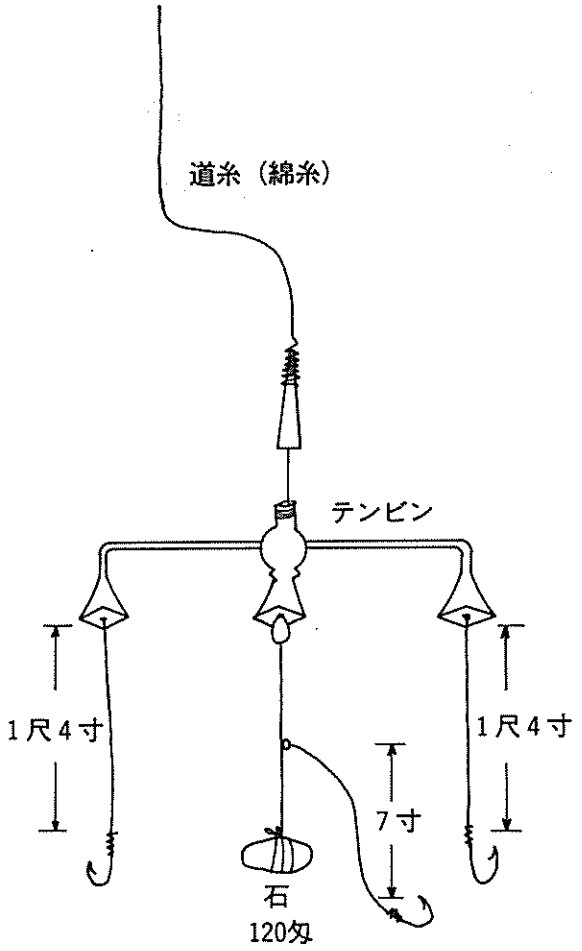
## ハモ釣り（石巻市福貴浦）

ハモは、夜間に泥砂底をはうようにして、索餌する習性をもっている。

仕掛は、秤りに似た型のテンビンの左右に長さ１尺４寸の細糸と針をつける。又中央にも長さ１尺５寸の糸に重さ120匁の重りを付け、糸の中央には長さ７寸の細糸を結び針を取り付ける。道糸は少し太めの糸を使用する。

日没頃漁場致着するように出漁する。漁場に着くと、イワシを餌とし、糸を両手に持ち釣りを開始する。釣餌は底に着いたら僅かに上げるくらいに小突く、当たりは最初軽く、しばらくコツコツと続いてからグーント重くなるくで強くひいて合わせる。ハモは、餌に食いつくと体をひねるため、すぐに引き上げ釣糸に絡まないようにする。釣り損じても遠

くへはいかず、また噛みついて来るぐらい貪食である。




ハモ釣り漁具見取図

## 15　ブ　　リ　　漁

ブリは大きさにより呼び名が異なるが宮城の場合索餌回遊による移動途中の30～50 cm前後のあおこ、しょっこが漁獲対象となる。

ブリは根（岩礁）を中心に移動するため各漁法とも、漁場、鳥山を確認しての操業となる。漁期は7～10月である。

漁法は明治にはあお縄その後昭和に入りブリ立縄、釣り、現在では曳き釣りに変わっている。又魚体も現在では30～40 cm位が中心となっている。

宮城県での大きさ別呼び名

| | | |
|---|---|---|
| ぶり | あおこ | 35～35cm(気仙沼・女川) |
| | いなだ | 18～21cm(気仙沼・女川) |
| | わかな | 20～23cm(宮　城) |
| | しょっこ | 2kg以下(石巻、岩手より伝来) |
| | わらさ | 5kg以下(石　巻) |
| | あお | 5～7kg(石　巻) |
| | ぶり | 7kg以上(石　巻) |

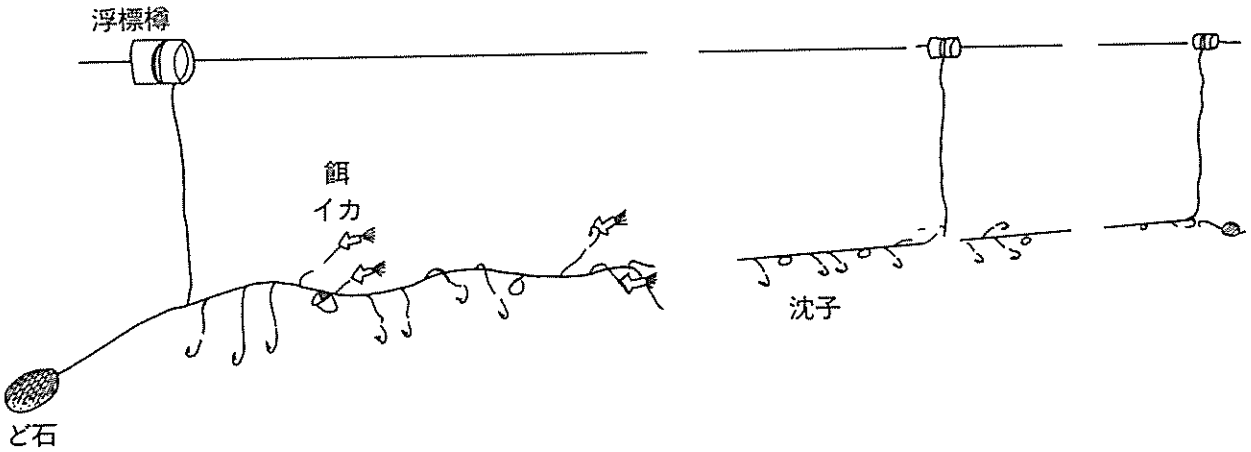
## ア　オ　縄（牡鹿町鮎川）

アオ縄は、底延縄であり、深みにいるブリを漁獲する。

漁具は、幹縄に綿糸12号、太麻糸90尋。枝糸に3号綿糸、太麻糸長さ2尋1尺のものを用い、幹縄4尋半に枝糸1本を結び付け一鉢に20本を用いる。釣針は1匁の鉄線を角形に曲げて加工したものを使用する。沈子は100匁位の石を細糸でしばり一鉢に2個を結び付ける。ど石は1貫500匁位の石を両端に1個ずつ、浮標綱は5枚糸30尋を1本ずつ、浮標樽には5升8樽を3～5鉢に1個を用いる。籠は径1尺5寸の竹籠の縁に藁を巻き釣針を掛けたものを1鉢とし、1艘で20鉢を用意する。

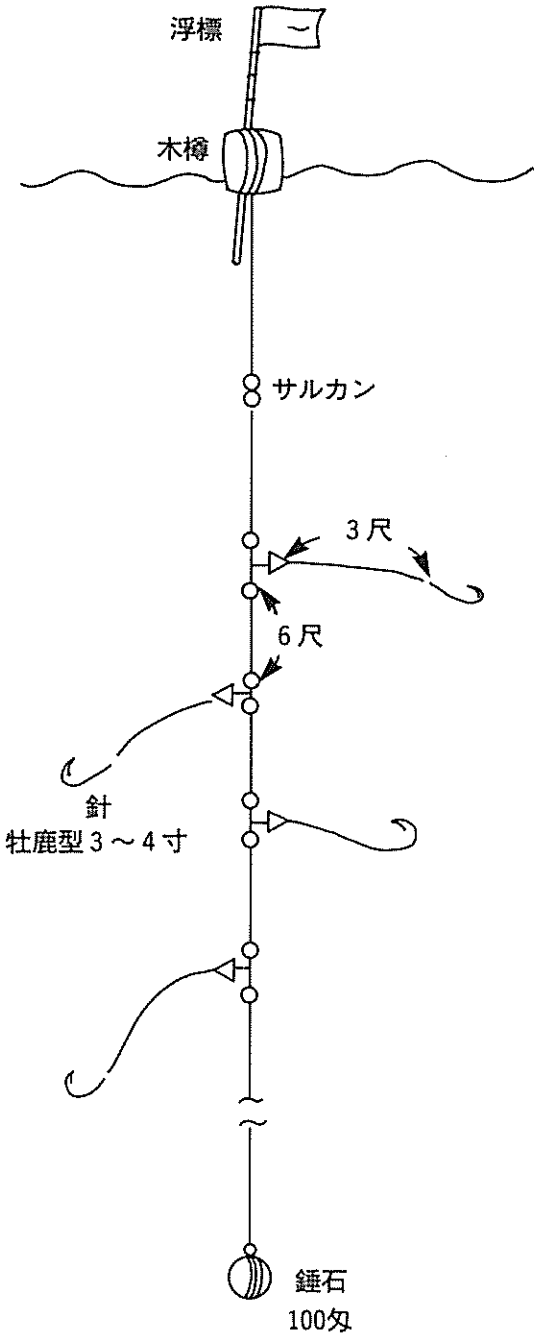
漁場は水深50尋前後の根（岩礁）の上が良い。

肩5尺位の棚付さっぱに3人乗り組み、夜明け前に漁場に着き投縄を行い、1時間半位たったら引き揚げる。その後漁獲物をとりはずし、再度次々に餌をかけて投縄を行い、1日2～3回位操業を繰り返す。餌は生きたイカがもっとも良い。




ブリ延縄漁具見取図

## 立　　縄（牡鹿町鮎川）




ブリ立縄漁具見取図

延縄漁法の場合、主漁場で各船が集中操業し縄の絡み合いが生じたため昭和30年頃より立縄漁法にかわっていった。

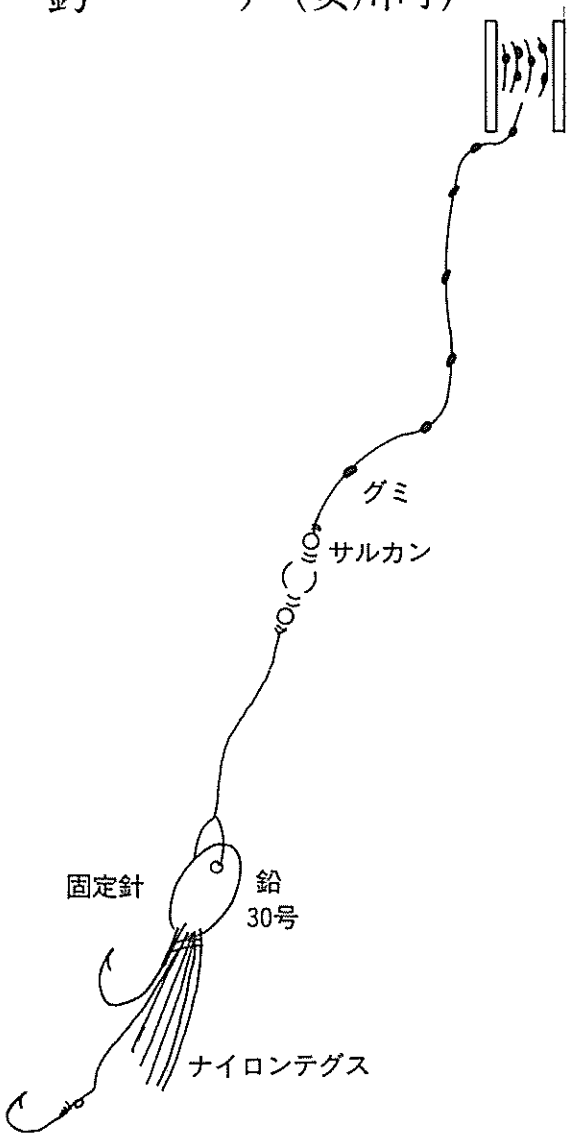
立縄は各層を遊泳するブリを漁獲する漁法である。

漁具は幹縄綿糸20号を水深により調整、幹糸は3分ナイロンテグス6尺のもの10本を親子サルカンで連結、10～13尋とし、枝糸は2分2厘ナイロンテグス3尺とする。釣針は牡鹿

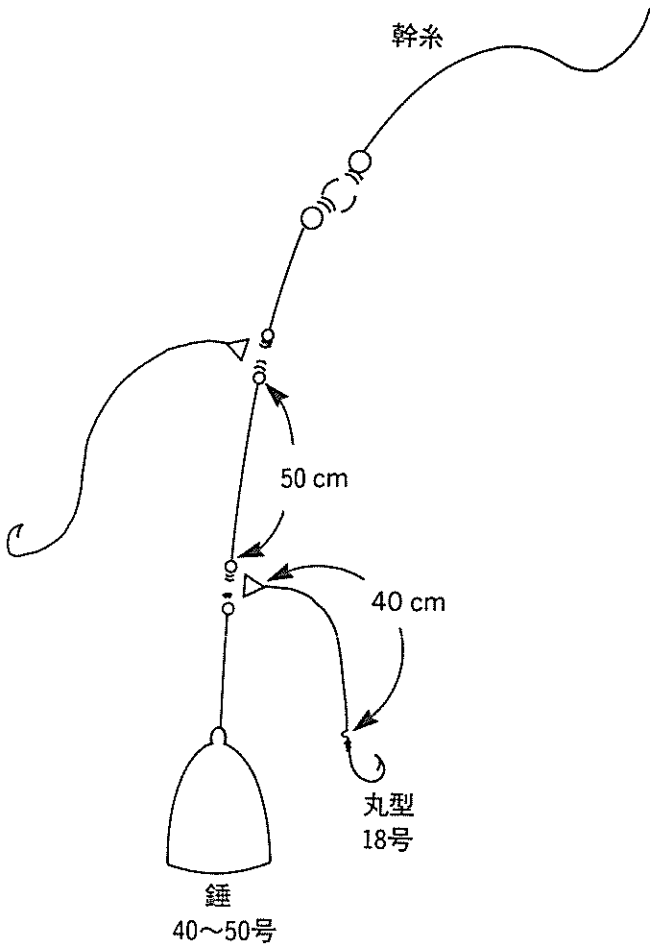
型３～４寸を使用する。錘は100匁内外の石を、浮標には直径８寸の木樽を使用し旗を付ける。

漁船に２～３人乗りこみ、漁場には夜明け前に着くようにし、投縄を開始する。餌は、イカの生きたものを耳がけ、小サバは背がけしながら作業を行なう。１回の操業で５～10組を使用する。

## 釣　　り（女川町）




ブリ釣漁具見取図（後文）




ブリ釣漁具見取図（前文）

この漁は生き餌を使用した手釣漁業である。

漁具は道糸ナイロンテグス25号に、幹糸ナイロンテグス20号を50 cm間隔で取り付ける。枝糸はナイロンテグス17号を40 cmとし、釣針は18号を使用する。錘は40～50号を用いる。

漁場は水深60～100 mの根（天然礁）が良い。

出漁前にイワシ、アジを活かしておき漁場に向う。漁場は山立てにより確認し、鳥山ができている場所を選ぶ。ブリの場合、表面に浮く場合と底にいる場合があるので、曳き釣りの用意もしていく。鳥山ができていて表面にブリが見えない場合は、舟を根の上におき仕掛けを下ろし底に付いた後、10 m 前後ゆっくりと上下させ魚群の位置を確認し、仕掛けの位置を調整する。当りは、ガツンとくるので合わせ、船に引き揚げる。この要領を繰返し1日に50～70 cm 位のものが10本前後釣れた。

また、イシナギ釣りとほぼ同じ型の仕掛けで活イカを使用した釣りも行なわれた。

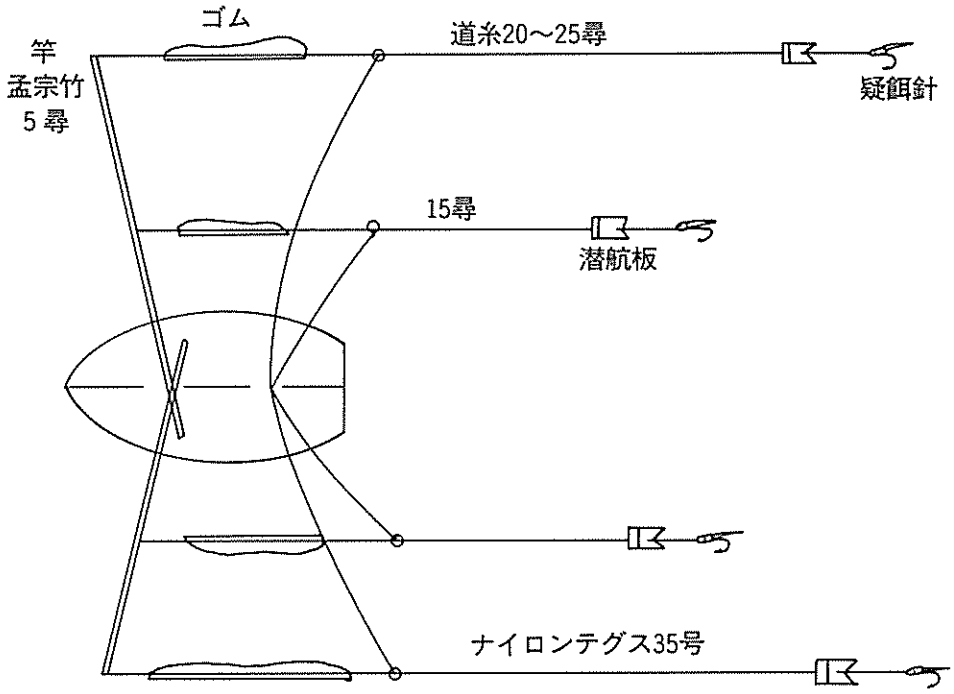
現在は魚体が小型のものが多く操業されていない。

## 曳き釣り（女川町）

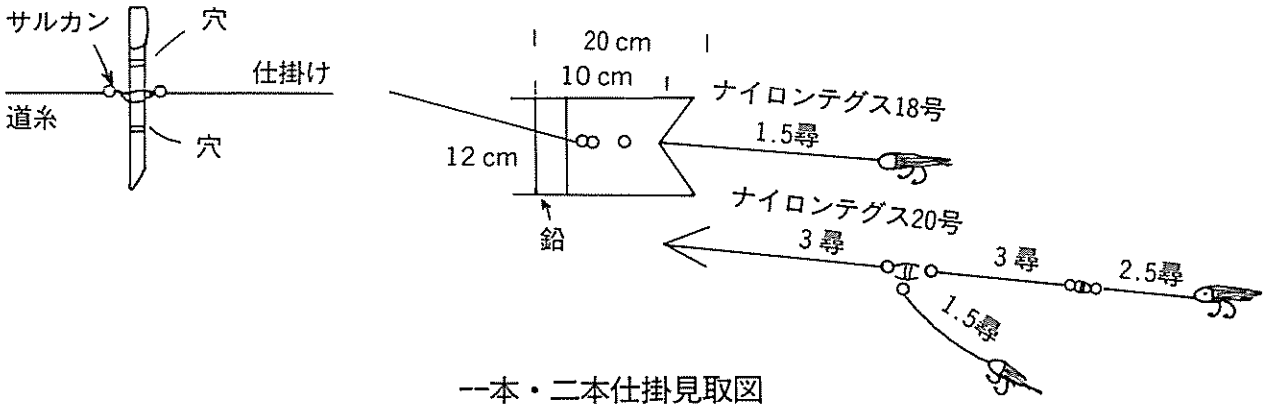
曳き釣りは表層にいるブリを漁獲する。

漁具は、竿に5尋前後の孟宗竹を用いる。竿には釣り糸の横にゴムを取り付け、魚がかかった時の目安、あるいはショック止めとしている。又竿からサルカンまではロープを使用する。サルカンには魚が掛った時引き寄せられるように舟（自分の手元）までロープを結んでおく。道糸はナイロンテグス35号を使用し潜航板までの長さは、外側で20～25尋、内側で15尋とする。潜航板は擬餌針を海中にもぐらせ、板の振り方により擬餌針を生きているように見せる目的もある。魚がかかった場合は、潜航板が反転し表面に浮き出てくるため、魚の取り入れが簡単に素早くできる役目もあり重要である。型は幅12 cm 長さ20 cm、切りこみ部の長さ10 cm、板の前部には、浮かべた時丁度立つ位の鉛を入れ、中央にはサルカン用の穴をあける。又水の流れを考えサルカンの両側にも穴をあける。擬餌針は、1本の場合（大型魚を目的）と2本の場合（小型魚を目的）があり、潜航板から1.5尋の所に取り付け、カブラは貝殻、ナマリ（光るもの）等に鳥の毛を結んだものを使用し、釣針は2本針を用いる。

漁船に1～2人乗りこみ、漁場（礁の上）に着くと鳥山を確認し、竿に道糸を取り付けるがこの場合、船を進めながら外側から行う。その後仕掛けを下ろし始め、10～15尋糸を出し、魚のいる場所を確かめながら糸の長さを調整する。魚がかかると、先ず潜航板が反転し、水面に浮いて水シブキがあがることでわかることと、ゴムが伸びるためその長さにより魚の大きさがわかる。手元まで魚を曳き寄せてから逃げられることがあるが、これは獲物を見たため慌てて、曳き縄をゆるめるためと、魚が強く頭を振るために釣針が外れるからである。魚を手元迄引き寄せたらもう一度さっと曳縄を引き合わせ（曳縄を強く手操る）、そして深く釣針を喰いこませて取りこむ必要がある。




ブリ曳き釣見取図




一本・二本仕掛見取図

又大ブリが掛かった場合は、スピードを下げて引き寄せるが、その際魚が深く潜らない様に、曳縄を早く締める必要がある。又小ブリの場合はスピードを増して水面に浮かせて、抵抗を少なくして引き寄せる様にする。どちらの場合も魚が掛ったら内側の竿より取り入れを始めるがその後魚をはずし終ったなら又漁具を海へ流し、この作業を繰り返す。

この漁では船（擬餌針）の方向を魚の動き（餌に食い付く動き）に合わせることと、掛かった魚を逃さない（魚がはずれると群が移動し、釣り始めるまで時間がかかる）こと等が釣果を左右する。

## 16　マ　　ス　　縄（北上町十三浜）

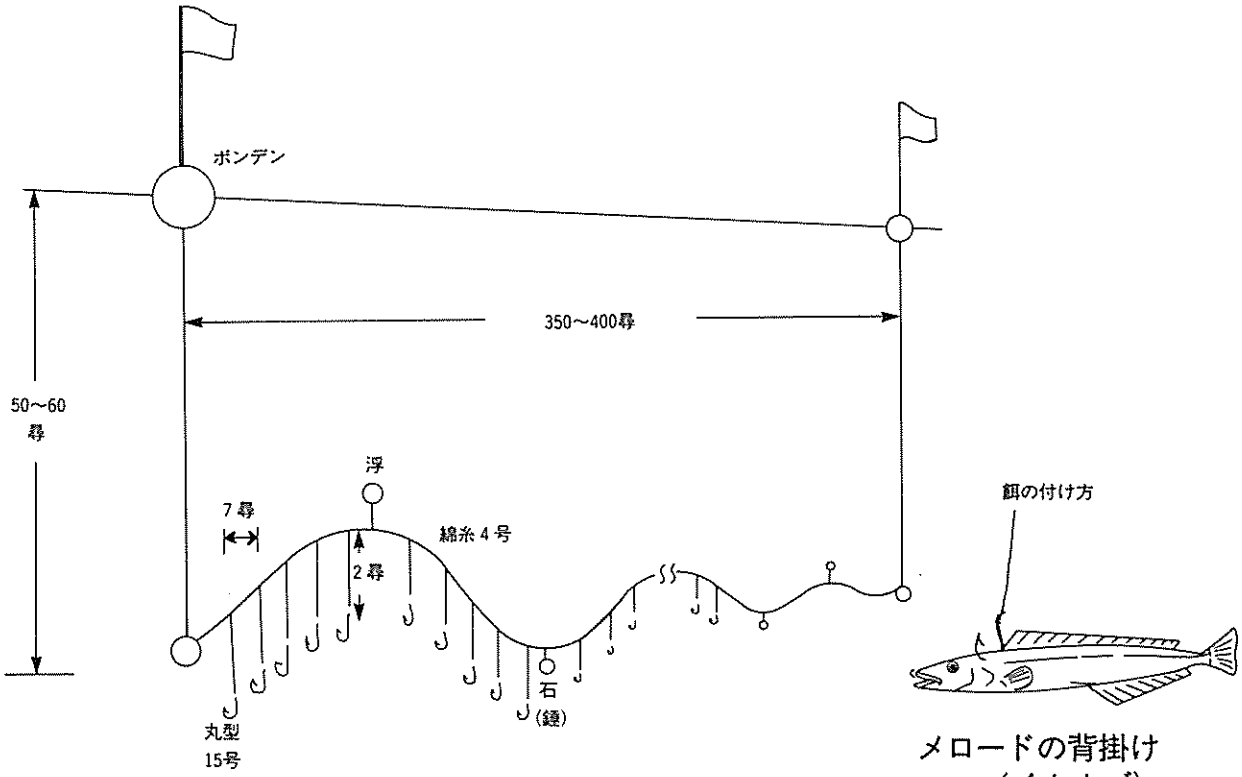
タラ漁の終漁が近づくと、マス延縄漁が始められる。漁期は、３～４月の２ケ月間である。

漁具は、幹縄に綿糸４号を用い、長さ350～400間とし、７尋間隔で長さ２尋の枝縄を結び付ける。釣り針は丸型15号のマス用を使用する。幹縄には、枝縄５本間隔で浮子と沈子を交互に取付ける。これはマスがその時により泳いでいる場所が違うので餌の位置を調整する必要があるためである。１縄で釣針50本を使用、これをナカゴ（丸い木枠に竹を編んで作った籠）に整理し、１回の出漁で５鉢前後用意する。

漁場は、50～60尋の根の上がよい。

手漕ぎ船に２人乗り込み漁場に着くと、船を走らせ最初に浮標を流す。その後魚艙に生かしておいたメロード（イカナゴ）を殺さないように背掛けしながら縄を送りこみ、最後に浮標を投入する。その後１時間位で揚縄を開始する。この作業を繰り返し行う。また、生き餌に食い付くことからマス縄をイケベ縄とも呼ぶ。漁獲は多い時には30～40本もあり船に満船になることもよくあった。

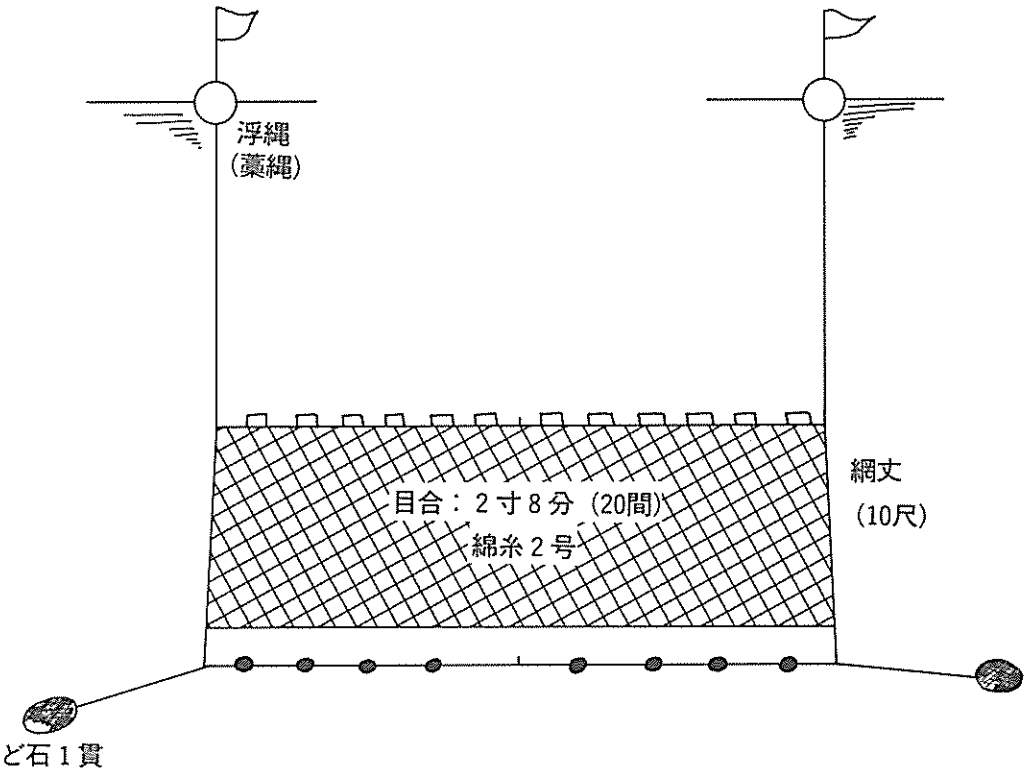
現在マス縄の漁具は枝縄の間隔も短くする等改良されているが、漁獲量がすくないことから漁を行っている人数は減っている。




メロードの背掛け
（イカナゴ）

マス縄漁具見取図

## 17　根　　刺　　網（牡鹿町泊）




根刺網見取図

ネウ（アイナメ）、ソイ、メバル等の根魚を対象とした底刺網である。

漁具は、網の長さ50間のもの浮子方５割、沈子方５割５分の縮結を入れ仕立て上がり20間を１反とする。網地は綿糸２号を使用し、目合い２寸８分、網丈10尺とする。浮子は、１尋に３個の割合で結び付け、沈子は１反に50匁の石を10個前後取付ける。ど石は１貫目のものを使用する。

漁場は、金華山周辺、水深16～30尋の根（岩礁）や沖合の根の高い所がよく毎年決まった場所である。

漁期と対象種は、10～11月頃はネウ、ソイ、２～３月はメバルが漁獲される。

漁船に３人乗り込み、漁場には夕方着くように出漁する。網は船中にて繋ぎ合わせ一網としておき、漁場に着くと１人は漕ぎ手２人は網刺しと分担を決め、山立てにより位置を測り、まず風向きを見て風上の舷側より浮標、浮標綱、ど石の順に投入し、次に櫓を漕ぎながら網を投入し、最後にど石、浮標綱及び浮標を投入する。揚げ網は翌朝行う。この漁では、メバル（30 cm 前後）が20貫、多い時には200貫もの漁獲があり、網に魚が掛かったまま船に積み込み、陸仕事ではずすのに１日かかったこともあった。

現在でも漁場は変わらないが、漁獲量が減少してきている。

# 18　小　　縄

## 小　　縄(1)（雄勝町大須）

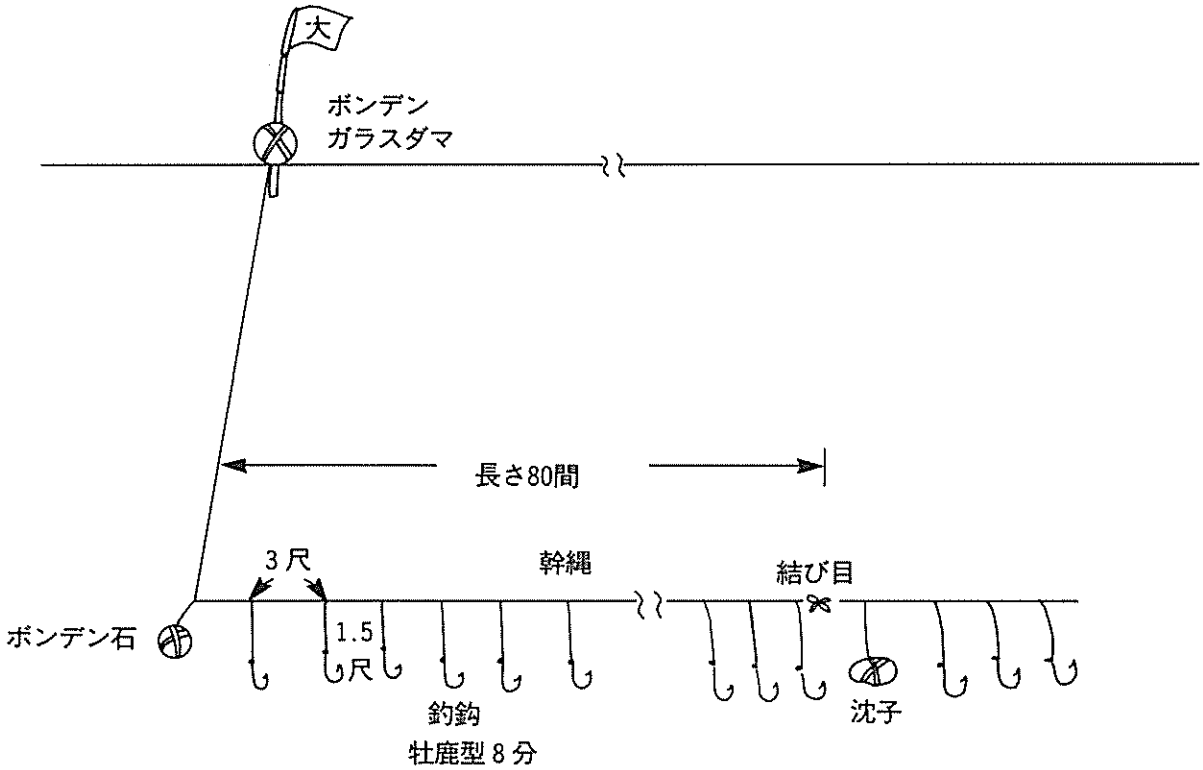
小縄は年中行なわれ、10～3月はドンコ（エゾイソアイナメ）、スエ（ソイ類）、4～8月はネウ（アイナメ）、メバル、水ガレイ等を漁獲する。

漁具は幹縄に綿糸25号を使用し、長さ80間を一鉢とする。枝縄は綿糸4号を1.5尺の長さとし、幹縄に3尺間隔で結びつける。針は牡鹿型8分を一鉢に100本使用する。ボンデン石は700～800匁の石（あかり綿子で網目を作る。）で、ボンデン石の下げ糸は普通では切れないが根掛した場合に強く引くと切れるような綿糸を用いる。縄沈子は100匁位の平石を2重に結んで、2枚目の縄端に1枚に1個ずつ付ける。浮縄はトワイン8～12 mm、ボンデン浮きは、径8寸～1尺の硝子玉を用い、これに12尺位の竹に旗をつけたものを取付ける。ボンデン石は潮の早い時には5枚に1本、普通は8枚に1本を用いる。

漁場は地先沿岸の礁間又は礁上で、水深11～12尋の場所である。

漁船に2～3人乗りこみ、日没1時間前に投縄を行なう。約40鉢投縄するのに40分位を要する。1時間30分位の縄待ちをし、投縄終了の場所から揚げ縄を開始する。1回の作業は約4時間かかる。餌は、メロード、イワシ、サンマを使用する。1日1回の操業である。

現在は夕方投縄、翌朝揚げ縄を行なっている。



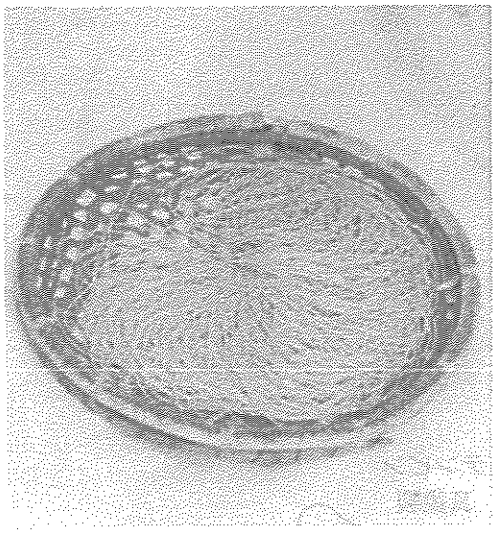

小縄漁具見取図

## 小　　縄(2)（石巻市祝田）

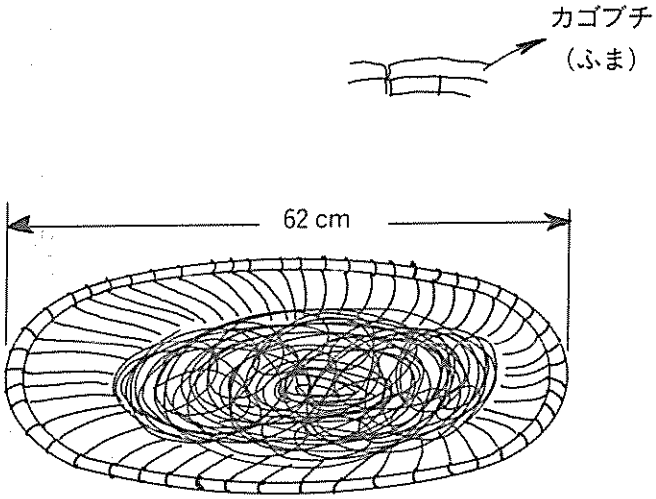
石巻市祝田で使用した。カゴは竹製、カゴブチはキルクで、昔はコモ草を自分で編んで綿糸で巻いてふまを作った。針は、針金を船具屋から買って自分達で作った。1日（雨の日など)、600本以上つくれば1人前である。

子縄には120本の釣針をつけ、冬期、金華山沖（2～10 km 沖）に和船で漕いで行った。風雪のときは金華山より松木をとり、缶で薪木をたき暖をとった。魚はスズキ・ドンコ・ネウ・カレイをとった。

祝田は万石浦の入口にある浜であるため、網漁よりも、釣漁の延縄漁、特に金華山沖での「メヌケ延縄」の本場であった。和船4丁櫓で金華山より2時間もかけて沖に漕ぎ、水深180～250尋に延縄をかけ漁をした。



小　縄　カ　ゴ




鈎針

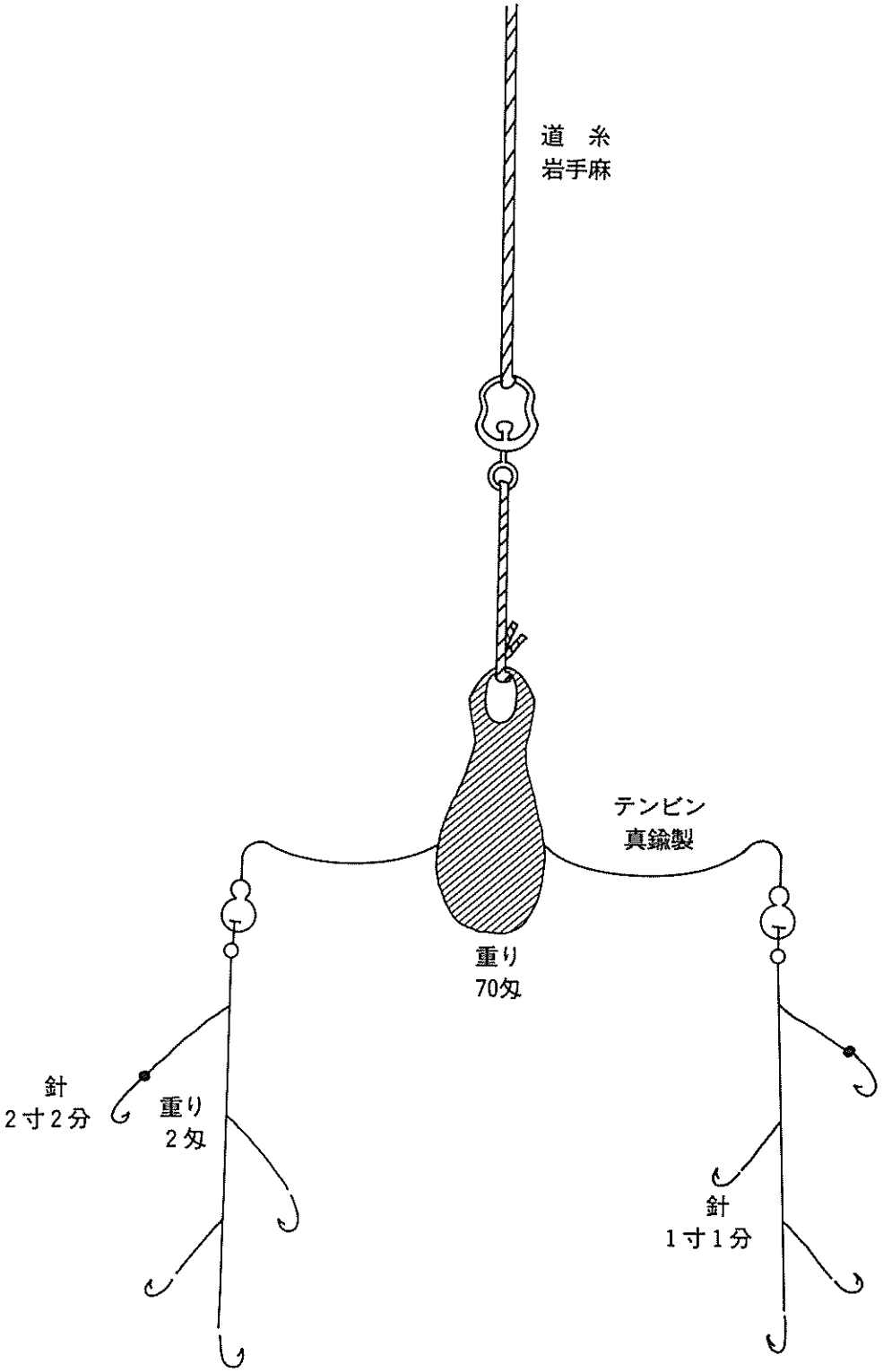
## 19　根　　魚　　釣（石巻市渡波）

この漁法は、メバル、ソイ等を対象とした底釣りである。

道糸は岩手麻2子撚のもの3つ組とし、これの径5厘、長さ15尋を用意する。釣針は2種類あり、1つは真鍮1匁長さ2寸2分のものを軸長型に曲げ、これに2匁の鉛を付けたものと、もう一つは、鉄線1匁長さ1寸9分のものを軸長型に曲げたものである。天秤は真鍮製、径8分、長さ4尺5寸のものを中央より曲げて用い、この中央に70匁位の鉛を付けたものを用いる。

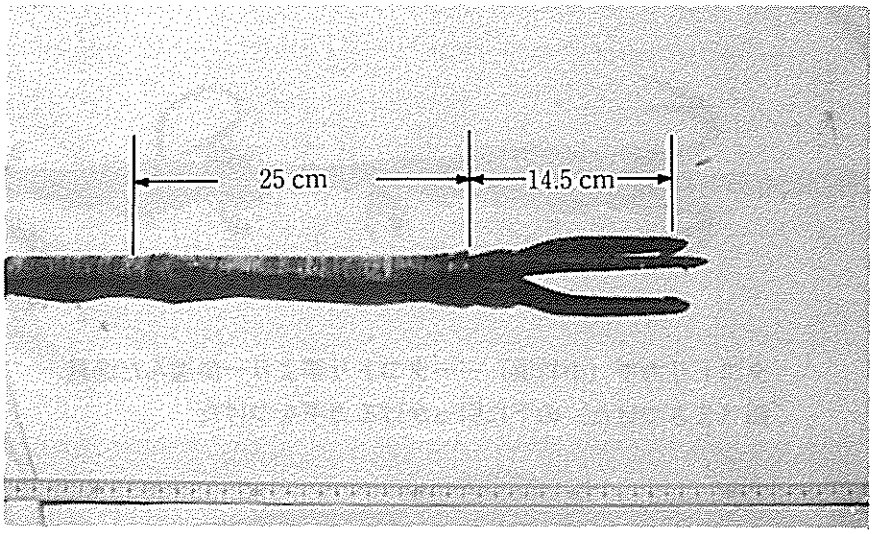
漁期は、５～12月である。漁場は３～15尋の沿岸の礁上である。

漁船に３人乗り込み漁場に着き、仕掛けを降ろす。その後釣り糸を上下させ、あたりを待つ。１匹目の魚がかかっても、そのままの状態をたもつと他の魚が食いついてくるので、ほとんど全部の針に魚がかかった所で釣り上げる。




根魚釣り漁具見取図

## 20　三　本　ヤ　ス（石巻市福貴浦）




三本ヤス（柄は竹で2.65 m）

石巻市福貴浦で昭和7・8年に用いられた。製作者は牡鹿町鮫浦、阿部喜助の祖父、代々鍛治屋で鮑カギ、テングサカギ、ホヤをとるヤスなど専門につくる。青森県や岩手県方面からも注文がくる。

三本ヤスはネウ・カレイ・スエ・タイ・ボッケなど根つき魚を、舟中からガラス箱でのぞき突く。

## 21　マ　ダ　コ　漁

マダコは、年により豊凶の差があり安定した漁業とはいえないが、味もよく商品価値も高いことから季節漁業として行われている。

マダコは、夏に育ちダコ（稚ダコ）として来遊してくる。その後、磯根につき育つため子供達が泳いでいる時等、クモダコ（稚ダコ）を捕ってくるのを見るなどして、その年の豊凶を判断する。

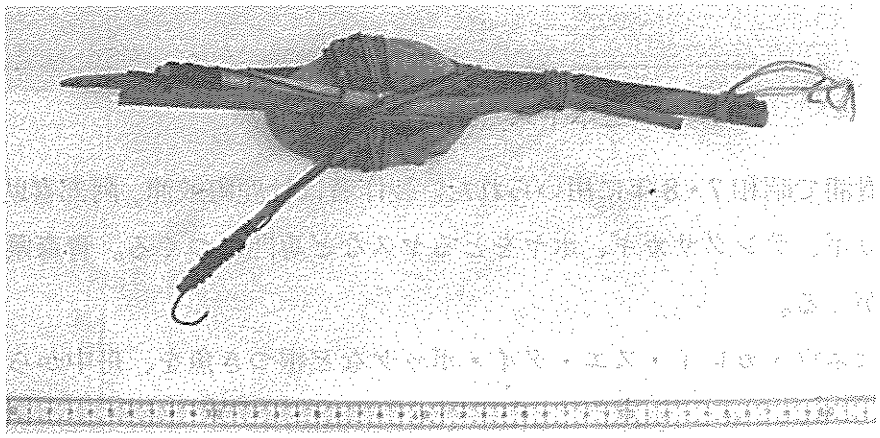
稚ダコは、志津川沿岸に多く来遊し、その後成長し産卵のため晩秋から初冬にかけて南下する。南下群は金華山周辺で一度止り、この群を牡鹿地区では落ちダコと称して漁獲している。

漁期は、10～12月にかけて地先で成長した群を対象とし、その後12月に入り山に初雪が降り出す頃から落ちダコ漁へと続いていく。

漁法は、一本釣り（いしやり）、延縄、タコ壷、タコ籠、タコ鈎と多く行われていたが、

昭和47、48年頃より漁獲量が減少し、現在ではタコ籠が中心に行われている。昭和63年には久しぶりの好漁となった。

タコトリカギ（小竹浜）……タコトリ竿より一歩進んだ漁具
餌（まきつけた）の下に引っかけるカギをつけた



イシヤリ（福貴浦浜）
釣糸をつけてタコトリ竿のとどかない潮の流れの速い場所で用いる。（おもりは石）
タコトリカギを長くしたようなもので、石の下の支えの木はそぞめで先端でとったタコをさして殺す

タコの頭がぶつかる程度にむすぶ

タコツボ（福貴浦）

## 釣　　り（牡鹿町泊）

タコ漁は、地区により口開け（漁を始める日）を決めて始める。この時には、いしやりと称される漁具を使う一本釣りが多く行われた。

漁具は、いしやりと言われる。長さ１尺３寸の自然に曲がった堅木（そぞめの木）を台木として、その下面に約130匁の石の錘を付け同じ木を添えて挟み綿糸て結ぶ。その一端に長さ４寸位の２本の細竹を弓型して上方に向け結び付け、その尖端に長さ１寸５分位の10番針金を折り曲げて縛り、台木の他端にはトワイン（8 mm）70～80尋位を付け、それを巻糸に巻いて１式とする。いしやりは自家製であった。

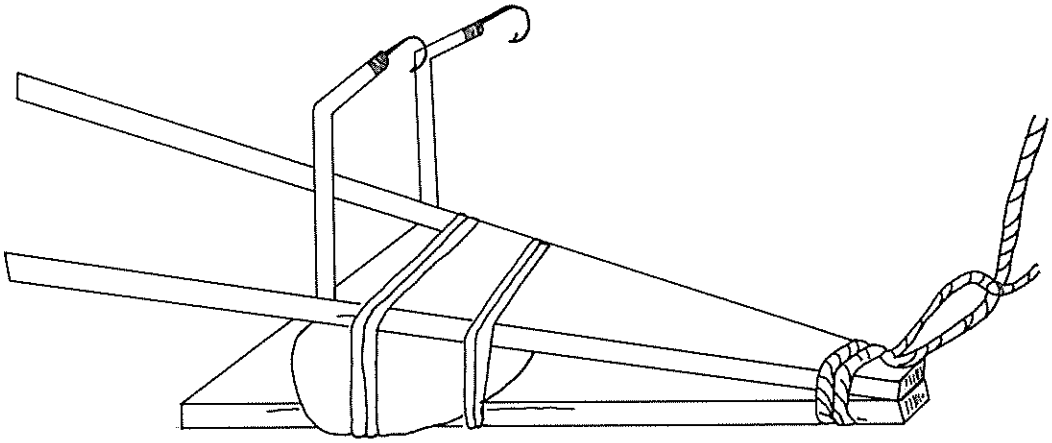
漁場は、金華山周辺の底質が砂や砂利の所がよい。

一隻に２～３人乗り込み漁場に着くといしやりに藤の蔦を使い、サンマかワタリガニ（ガザミ）のハサミを取ったものを巻き付け、船から少し離し海中に投げ下ろす。海中にいしやりが着くと糸が弛むので、糸を手繰りながらタコを誘う、手繰っている途中糸が重くなった場合、動かない時は岩等であり、タコの場合は軽く引ける感じがするのでわかる。タコがかかったなら静かに引き寄せ水面近くになったらタモですくって船に揚げる。また、引き揚げる途中タコが船縁に付くことがあるが、この時は無理に離そうとせず、補助漁具の釣り針をタコにかけ、逃げようとて泳ぎだした所を引き寄せ、タモまたは手カギで取り上げる。

餌は、始めサンマを使用するが、身が柔らかいため餌持ちが悪く頻繁に交換する必要があるため、１匹めのタコを釣り上げたら、弾力性もあり餌持ちもよい、腑（内臓）を取り出し餌としていた。

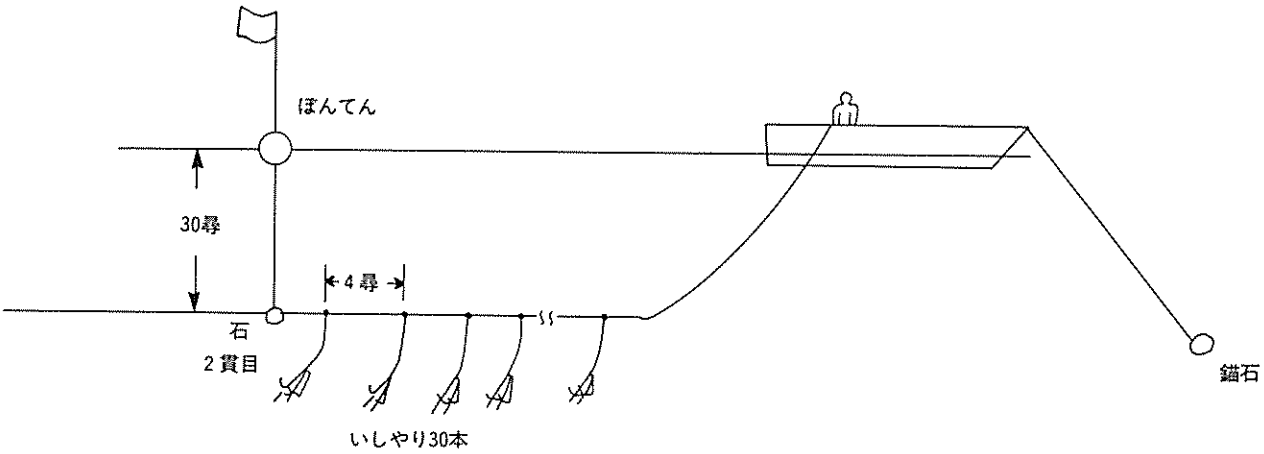
タコ釣りは１日中行い、米等持って行き、炊いて食べながら船で泊まることもあった。

この漁は、昭和47、48年頃まで操業されていた。



タコ釣（いしやり）漁具見取図

# 延　　縄（牡鹿町泊）




タコ曳釣漁具見取図

この漁は、一本釣りから考えられた底延縄で、一度に多くの漁獲を目的としている。

漁具は、幹縄に４尋間隔でいしやりを30個前後結び付ける。いしやりは数が多くなるため、作業等考え釣りの約半分位のものを使用する。幹縄には片方の端だけに重りと浮き縄、浮き標を取付ける。

漁場は、金華山周辺で根（岩礁）に続いた砂地の場所がよい。

手漕ぎ船に１～２人乗り込み、漁場に着くと山立てにより場所を定め、まず重りを下ろし底に着いたのを確認後、浮き縄の長さを調整し浮き標を投入する。その後船をゆっくり移動しながらいしやりに餌を付け海中に下ろしていき、最後のいしやりが底に着いた後幹縄の長さを水深に合わせ船に繋ぎ止める。投入作業が終了したら、船を止め船首からは錨を下ろし、船が流されないようにしておく。この状態で40分位待ち、揚げ縄を開始する。揚げ縄作業は、投縄の逆に行っていくが、この漁では浮き標をたよりとし、最後のいしやりを揚げ終わっても浮き標はそのままとし、漁獲が多い時には同じ所に、少ない時には幹縄の位置だけずらして操業する方法で行う。この作業を繰り返し行うが１回の所要時間は、２時間前後であった。

この漁で多い時には、一度に12～13枚の漁獲があった。現在この漁法は、行われていない。

## 壺　　(1)（牡鹿町鮎川）

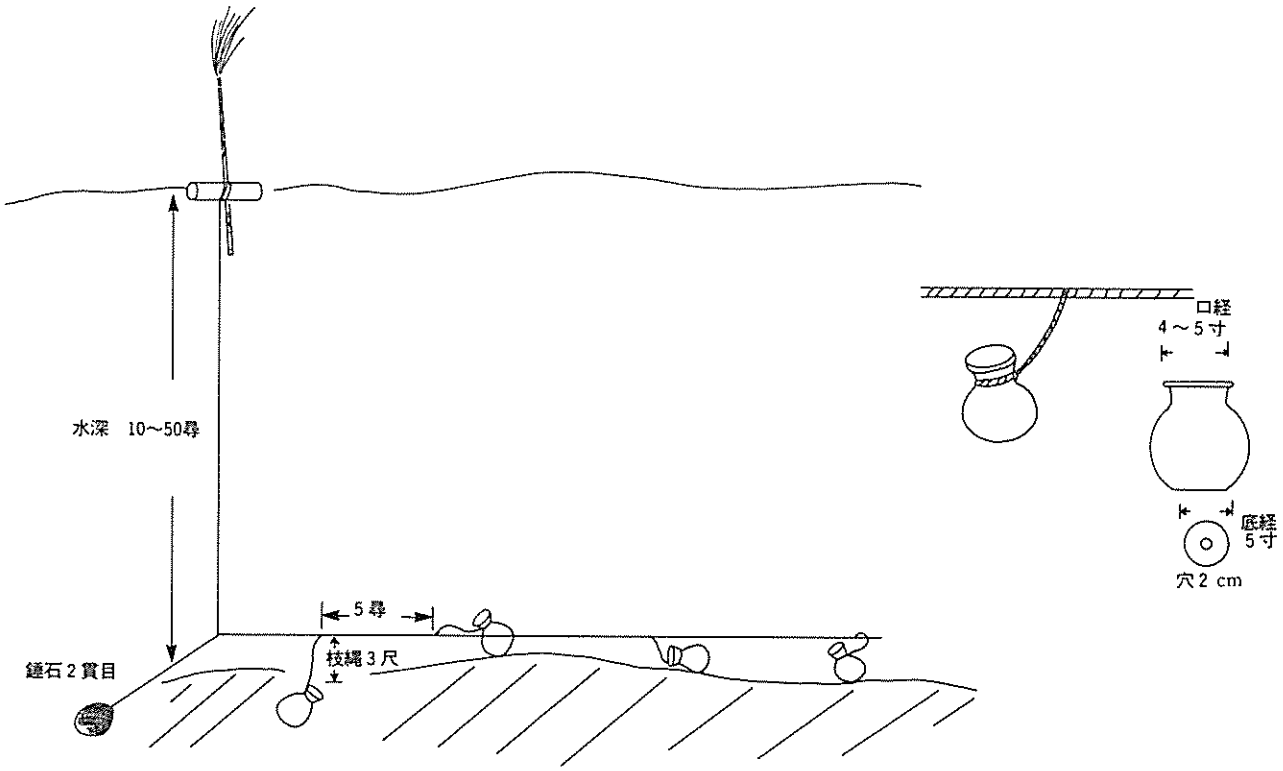
１本の幹縄に枝縄をつけ、その先に壷を結び付けて海底に下ろし、壷の中に入ったタコを採補する漁業である。

漁具は、幹縄、枝縄、浮き縄とも藁縄を使用する。幹縄は、径４分のもの300尋程度に５尋間隔で、長さ３尺の枝縄を50～60本結び付けその先に壷を取付ける。壷は瀬戸粗焼製の陶器で、口径が４～５寸、最大幅が６～７寸、高さ11寸、底形５寸前後で、重さが260～300匁、底には2 cm 位の穴があり、壷揚げ時には水が抜けて作業がしやすくなっている。

漁場は、10～50尋の砂地がよく、漁期は10～12月の二カ月間である。

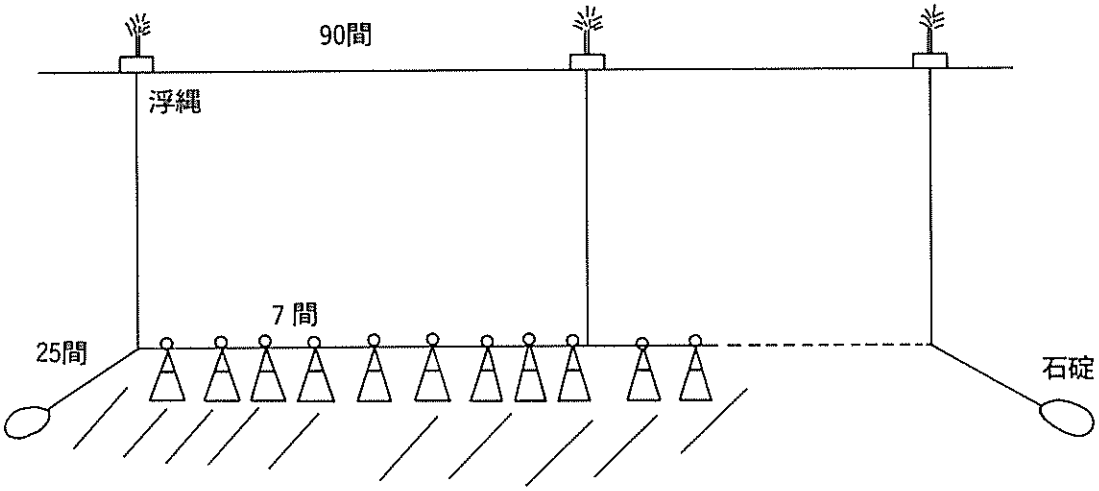
手漕ぎ船に２人乗り込み漁場に着くと、山立てにより位置を定め、船を潮の流れに乗せ壷を海中に投入していく。投壷は、夕方行い１晩おいて翌朝揚げ壷を行う。この作業では、船に揚げた壷からタコを取り出すことが必要であり、無理に取り出そうとしても時間ばかりかかり大変なので、壷を横積みしながら作業を行う。タコはひとりでにはい出してくるためそこをつかみ揚げて魚艙に入れる方法を取る。

この漁は、道具の手入れが大切であり、作業が終わると家に持ち帰り藁縄は腐らないように乾燥させ、壷は汚れるとタコの入りが悪くなるため掃除し次の漁への準備をする。

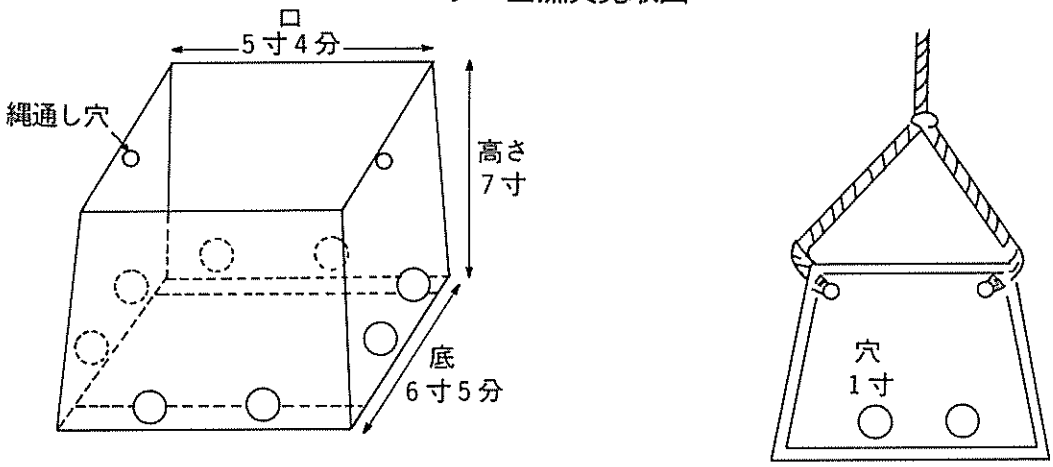



タコ壺漁具見取図

## 壺　　(2)（石巻市狐崎）




タコ壺漁具見取図




タコ壷漁では素焼の壷を使用する方法とは別に、木材を用いた壷漁もある。

漁具は、杉並五分板を用い、口は5寸4分、底は6寸5分四方とする。高さ7寸、底板は水切れを良くする為、両端を開けて固定する。又、各側板の下部に径1寸位の穴を2ケずつ開けて水切れを良くする。縄通し穴は、2ケを相対した側板上部に開ける。沈下を助けるための底板の上に100～200匁位の平石を結び付ける。幹縄は、堅縄2分5厘、約180間、タコ壷は7間に1個の間隔で普通25個用いる。浮縄はトワイン8ミリを水深の1.5倍、林浮子は桐丸木2本合せ3個を使用する。

漁場は水深6～10尋で根に続く砂地の場所が良く、漁期は9～1月までである。

手漕船に1～2人乗り込み、漁場に着けば壷を幹縄に結び付けて次々に投入し、両端を約1貫匁の石碇で固定し、翌朝一方の端より揚げ漁獲物を舟内に取り入れ、再び次々に投入し、翌朝の漁獲に備える。

餌は使用しない。

## 籠　（牡鹿町新山）

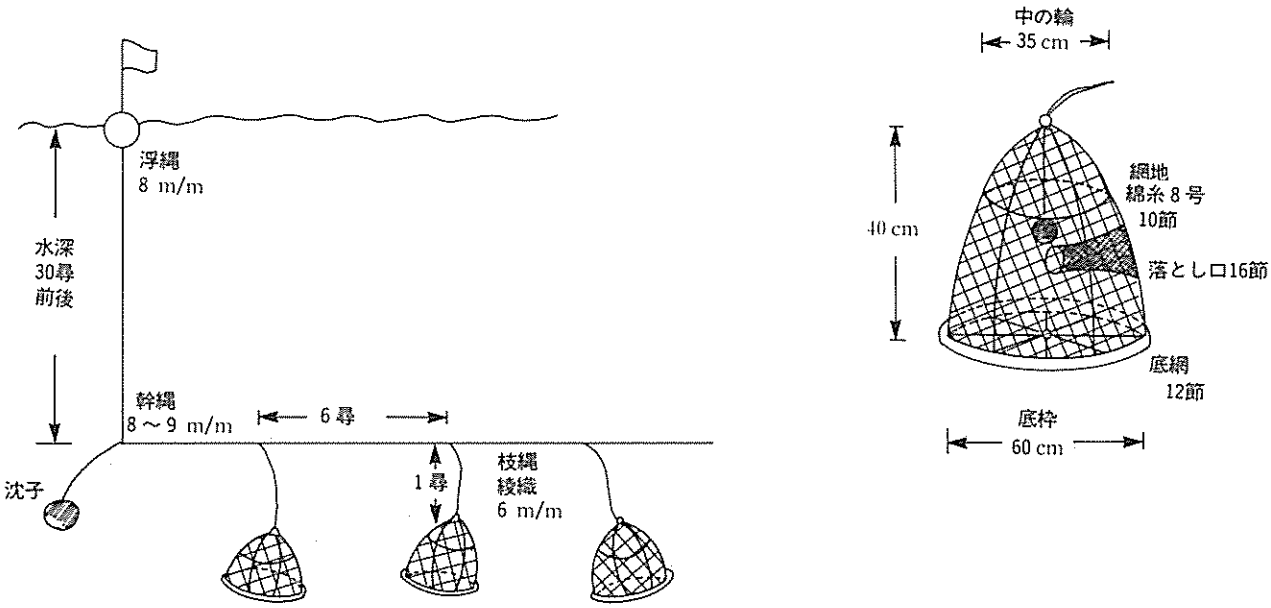
タコ籠は、昭和初期に北海道で使われていた、ミズダコ用の大型籠からマダコ用に改良され、現在のタコ漁の中心漁具となっている。

漁具の構造は、幹糸に８～9 mmのナイロンテグスを使用し、６尋間隔で長さ１尋の枝縄を結び籠を取付ける。籠枠は竹を使用し、底枠に直径60 cmの竹に自転車のタイヤを巻き、支柱は３本の割竹を頂点で交叉させ、中の輪は直径35 cmの所に入れ支柱を補強する。網地は、綿糸８号を10節とし、落とし口16節、底網12節とする。籠の中には、餌の入れ替えが簡単なように餌入れをつるす用にする。籠の製作は、１日に１人３個前後である。

漁期は、11～12月の２ケ月間で、漁場は30尋前後の砂地がよい。

手漕ぎ船に１～２人乗り込み、山立てにより位置を決めると籠の中に餌となるイワシ等を入れながら投入を開始する。日没までに投籠を終了し一晩おいて翌日揚籠を行う。この時の手順は、籠を揚げながら餌の入れ替えを行っていき作業が終了すると、再び漁場を選び投籠をおこない操業する。

落ちダコの場合、籠を投入しても均一に入るのではなく、多い所では１籠に５～６枚、また何籠かおいて入るというように、場所により１か所に集まって漁獲される。




タコ籠漁具見取図

## カ　　ギ（牡鹿町寄磯）

水深７尋位までの浅場にいるタコをカギを使用し、ひっかけて漁獲する。

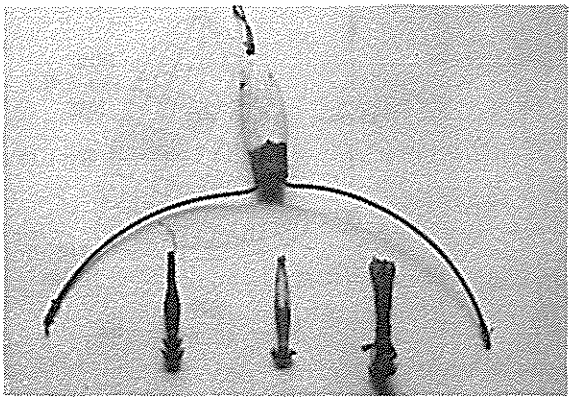
漁具は４ツ目か６ツ目のかぎを使用するが、かぎには戻りが無く、釣り揚げたタコをはずしやすいようになっている。柄には竹を用い、水深に応じて一本又は２本を継ぎ合せて使用する。箱メガネを使う場合と使わない場合がある。

出漁前にワタリガニ（ガザミ）か、アワビの殻を用意しておき漁場に向かう。漁場は岩場や砂地に続く岩場で、タコがいそうな場所で舟を止め、一人が漕ぎ手となり舟を操作し、もう一人は箱メガネを覗き込みタコを探す。タコが見つかり十分に見えている時はかぎでひっかけ、わずかしか見えずかぎを使用できない場合は、ハサミを取ったワタリガニ又はアワビの殻の内側を外に向けるように、かぎの上部に結び付け、タコを誘導しながらタコが掛けやすい状態になった所でひっかける。

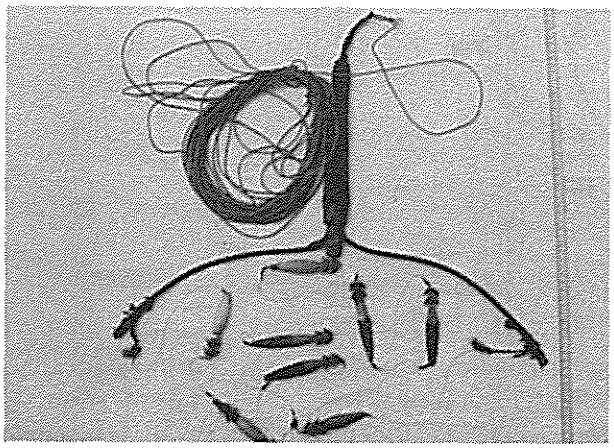
この漁では、タコのいる場所をどのように探すかが重要である。一般的には貝殻の多くある場所でわかるが、名人になるとタコが歩いた後の小石が裏返してあること等からもタコのいる場所が見つけられる。

## 22　イ　カ　釣　り（石巻市牧浜）

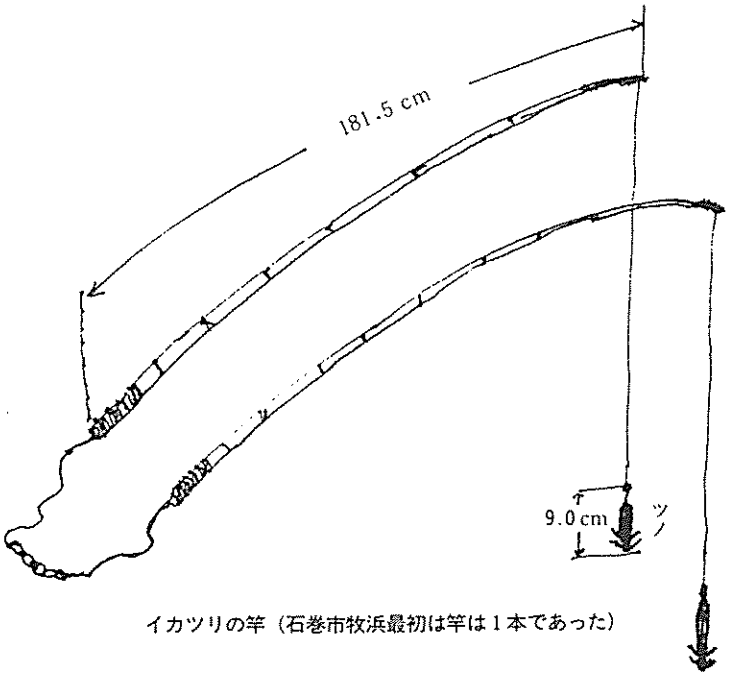
テンビンとツノ（いかの底釣り用）



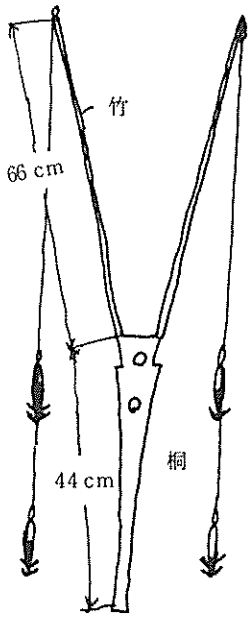
左…イトマキツノ
中…ツノ
右…エサマキツノ
（田代島仁斗田）



（石巻市福貴浦）




イカツリの竿（石巻市牧浜最初は竿は１本であった）




ハネゴ（製作地…北海道亀田郡古川尻、
漁場…津軽海峡・宮古沖・釜石沖、
使用者…牧浜）

**イカツリ漁具見取図**

テンビン（江の島ではガッカリと言う）の先にツノ（角製の擬餌釣具）をつるし海中におろし、あげさげしてあやつり、あたりを感じて釣りあげる。（イカの底釣り）

食いつきの悪い時は、餌マキツノを用いる。またテンビンのツノに多くかかる場合は、底からいかを海面上に誘導し、２本連結のイカツリ竿で釣る。石巻市牧浜では昭和20年頃、北海道よりもっと効率のよいハネゴをとり入れた。

ツノ（角）には鹿・カモシカ・牛・水牛・鯨の歯・カジキのハナを用いたが、昭和15年頃よりねり製品（ベークライト）に変った。

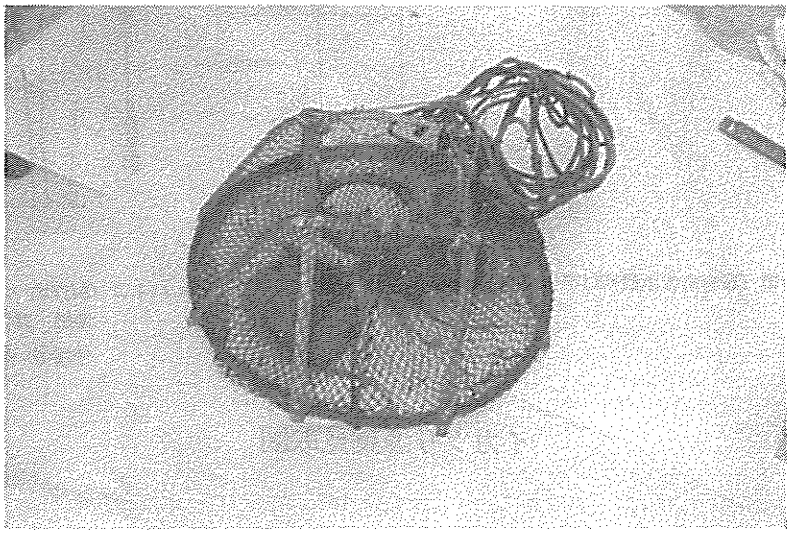
## 23 カ　ニ　籠

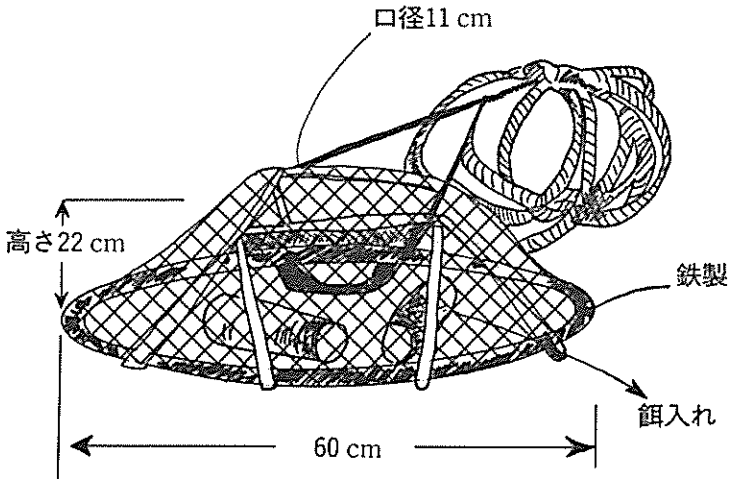
この漁は、スクモガニ（トゲクリガニ）を対象とした籠漁業である。

漁期は１～３月で、漁場は砂泥域の場所が良い。

籠は円型で、底枠は直径80 cm、側枠には竹を使用する。入口は両側にあり、餌は小魚やはらわた、貝等をつぶしたものを使用する。

カニカゴ






カニ籠漁具見取図

## 24　クルマエビ漁

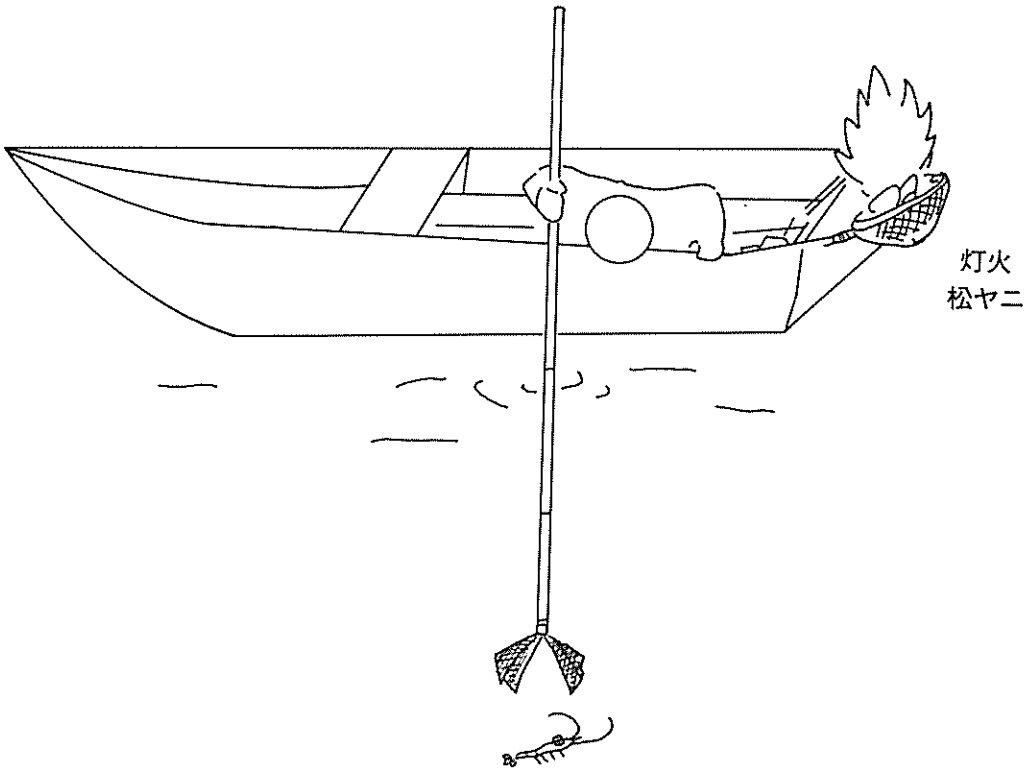
クルマエビの分布は、太平洋沿岸で宮城県が北限とされている。その中で古くからクルマエビ漁が行われていたのが河北町長面浦である。

操業は、梅雨明け（７月）頃から始まり、浦内で越冬した１～２才群を対象とて浦内全域の浅瀬を中心として行われた。お盆（８月）を過ぎると浦内の一部の群が外洋へと移動していくが、浦内での終漁期は水温が低下しクルマエビが越冬を始める11月上旬まで続けられた。

昭和初期は冷凍技術が進んでおらずクルマエビは活魚として出荷されていたため、外洋での刺し網漁法では商品価値が下がることから、浦内での漁が中心となっていた。

クルマエビは夜光性であり、夜、摂餌のため砂上に出てきたものを漁獲するので、漁法としては夜間行われる灯火を利用したトボシ漁、底巻網を行うかけ回し漁があった。

かつて長面浦は、クルマエビの漁獲も多く夏漁として扱われてきたが、昭和54、55年以降漁獲量も少なく現在では自家用として扱われている。




クルマエビトボシ漁操業図

## ト　ボ　シ（河北町長面）

この漁は、日没後から午前3時頃まで灯火を利用して行う。かつては松ヤニを燃料としていたが、その後カーバイトランプが普及するようになった。

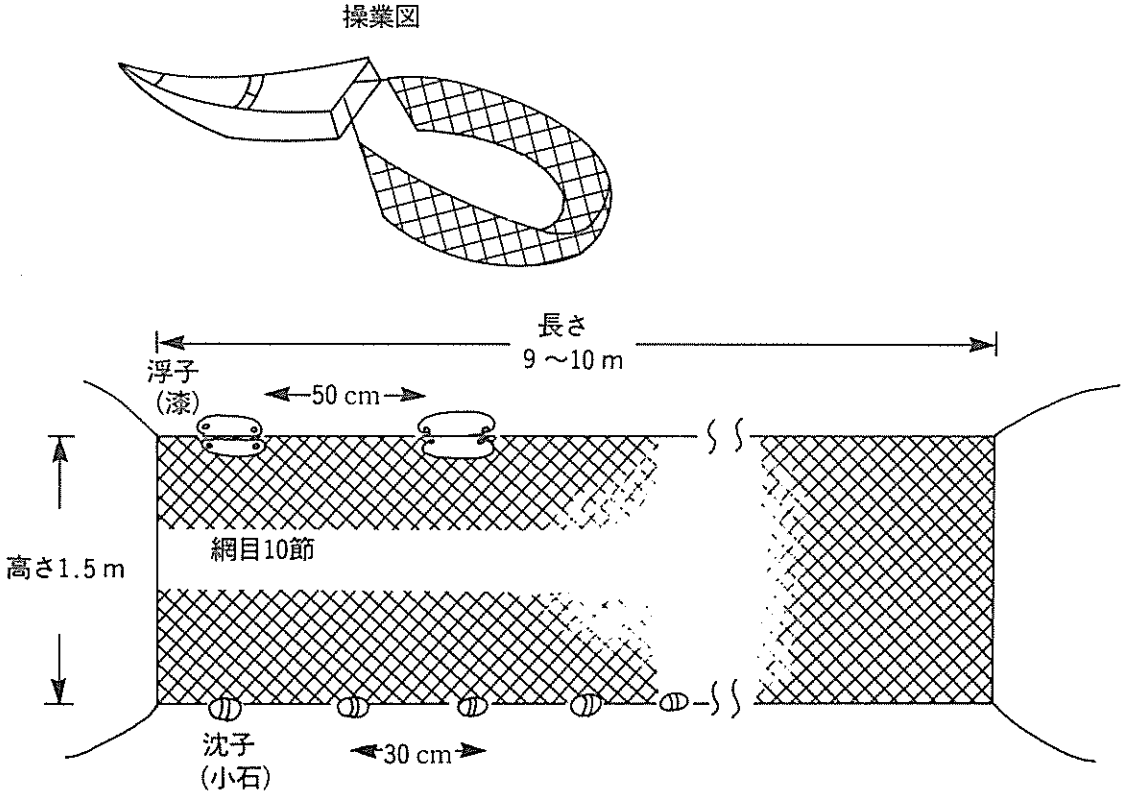
船の舷側からトボシ（光源）を柄に付けて水面にかざしながら海底を覗き込み、突き籠（竹の先にエビを挟み込む籠を付けたもの）と呼ばれる漁具を使用し、砂上にいるクルマエビを見つけると海中に突き籠を静かに下ろし、一尾ずつ挟み込みながら漁獲していた。

漁獲場所は一か所に留まらず山岸や浅瀬を移動しながらこの漁法を繰り返し、一晩で多いときには10 kg 前後も漁獲した。

同じ漁法で、竹の先に銛を取付けたものを使い、ワタリガニ（ガザミ）を刺して漁獲する方法もあった。

突き籠については、初め竹の先に銛を付けてクルマエビを突いていたが、傷がつき商品価値が低くなることから、挟み込みによりクルマエビを傷つけず漁獲できるよう改良されていった。

## か け 回 し（河北町長面）




クルマエビかけ廻し漁具見取図

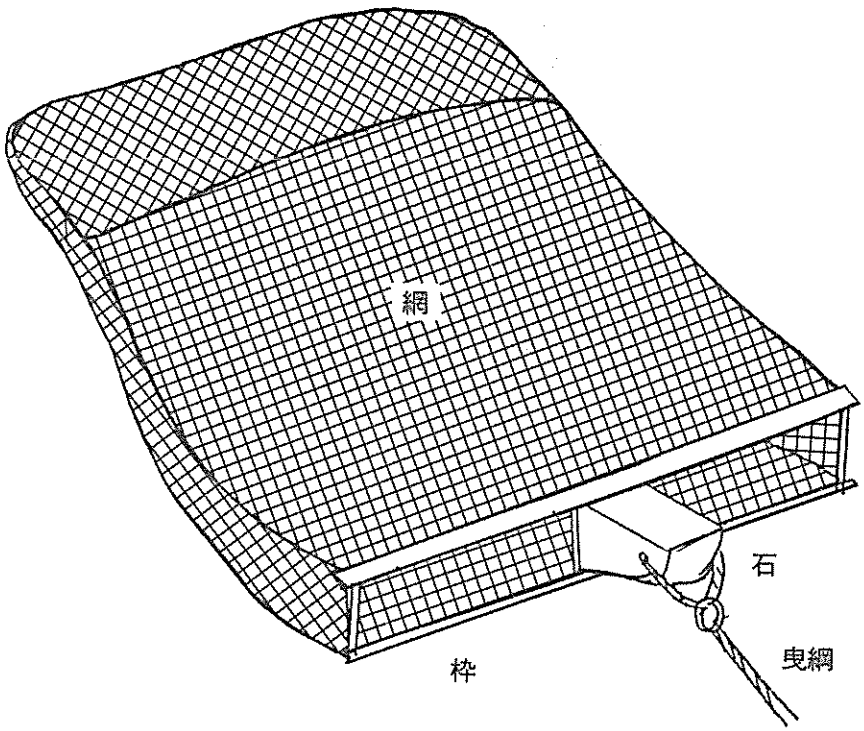
かけ回し漁は、越冬していたクルマエビが動きだす彼岸（5月）頃より始まる。夜間操業であるが、灯火は利用せず行う底巻網である。

網は、ふんどし網と呼ばれており海底を引くため網の下側には、小石を30 cm 間隔で縄を使い結び、浮きには水分を吸いにくい漆の木を使用していた。

先ず浅瀬を見つけ船から網の端に紐を付けて下ろしていき、円を描くように船を回し網を全部下ろしたところで網の両端をそろえて巻き上げていく。これを繰り返し、多いときには一晩で、一斗樽単位で漁獲された。クルマエビの他にハゼも多く取れるので、ハゼを対象としてかけ回し漁を行っていた人もいた。

この漁では、かけ回し用の網を自ら手すきにより作網していたため大変な労力と根気が必要とされ、そのうえ綿糸を使用していたことから網が腐触しやすく、夜間操業後、日中は網干し等の手入れを繰り返し行っていた。それでも1年程度でだめになっていた。その後化学繊維の普及、編網技術の進歩により漁具の入手が容易になっていった。

## 25　コ　シ　キ　網（牡鹿町給分）




コシキ網漁具見取図

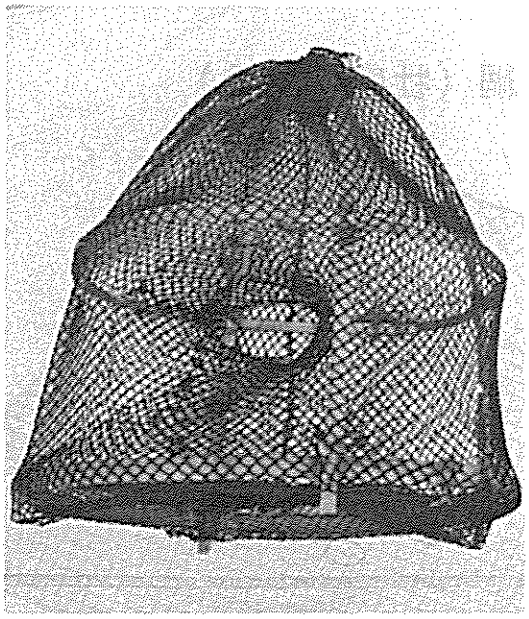
この漁法は古くから行われている。ナマコを対象とした底曳網漁業である。

網、枠、重り、曳綱からなる。網は5号綿糸、太麻糸、2寸目25掛。枠は、横幅3尺5寸、高さ9寸、上方及び両側は杉材、下方は樫材で作る。沈石は1貫位の長型の石を枠の中央に挟みその前方に曳綱を通す穴を開ける。曳綱は径2分位の麻綱、長さ15尋を用意する。

漁期は11～2月、漁場は水深7～12尋で砂泥の場所である。

漁船に3人乗り、網一張を使用する。曳網は舳の貫木に縛り、別に控網を艫に取り付け、櫓漕ぎしつつ海底を曳き廻す。暗礁にあたると控網によりこれを避け、30～40間曳いた後に引き揚げる。また、網2張を使用する場合もある。

## 26　シタナガ籠（石巻市福貴浦）



シタナガカゴ

シタナガ（ツブ）籠は、冬期（1～3月）に操業される。対象はアワビツブ（モスソガイ）、ヒメエゾボラである。

籠は竹と網で作られる、入口は1カ所である。

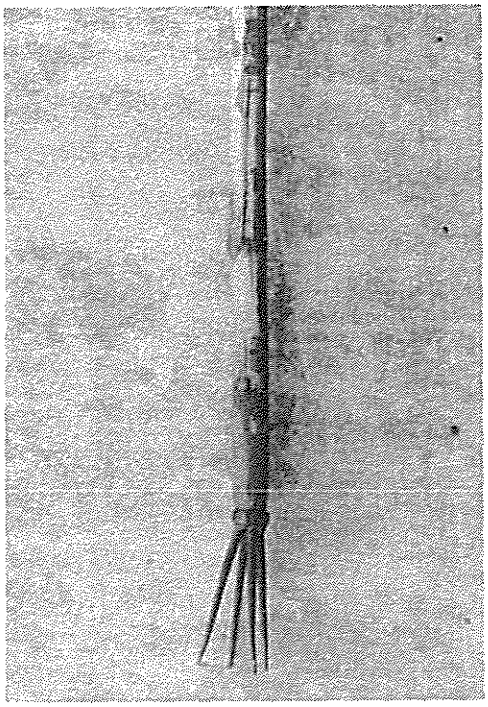
漁場は、底が砂泥の場所である。漁船に1～2人乗り込み漁場に致着すると、籠に餌（サバ、イワシ等）を入れながら船をゆっくり走らせ投籠を開始する。籠揚げは翌日行う。又、籠を揚げながら漁獲物を取り出し作業が終了すると、あらたに餌を入れ漁場を変えて投籠を行う。

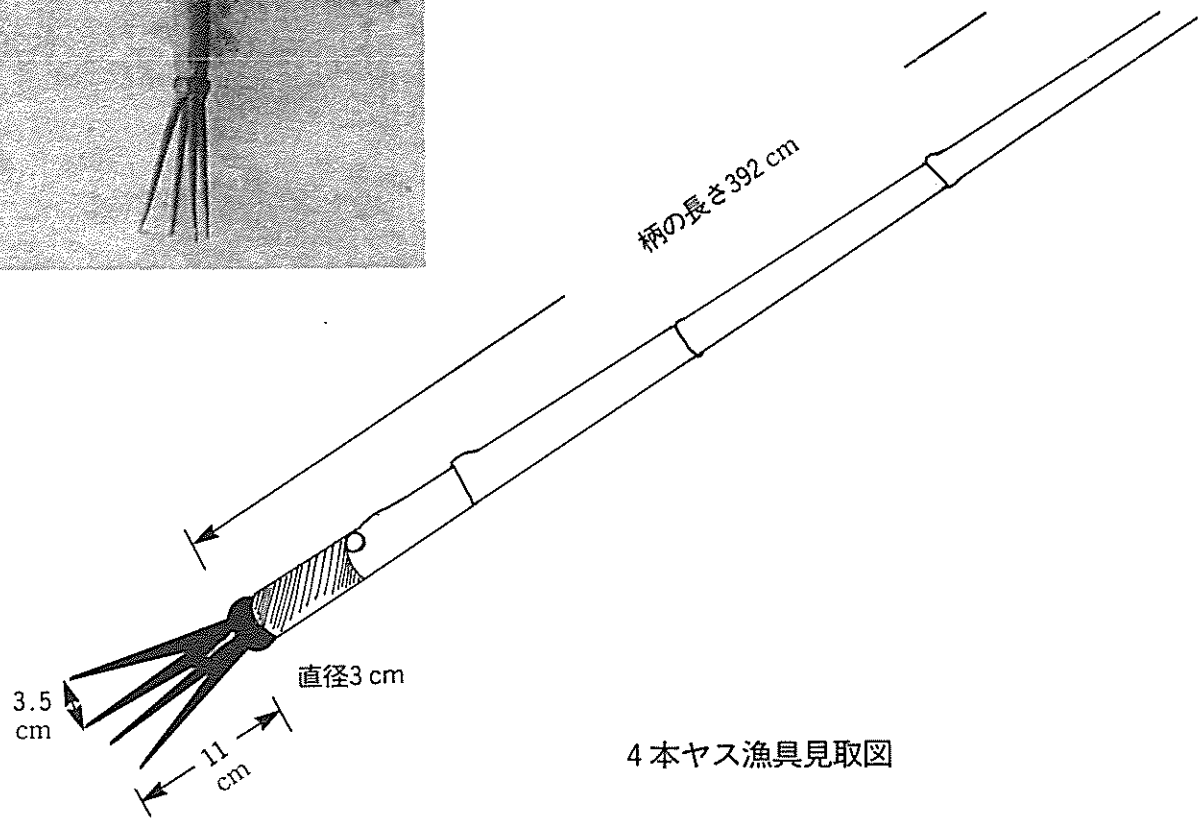
## 27　4　本　ヤ　ス（石巻市祝田）

石巻市祝田で使用し、ホタテ、ウニをはさみとる磯物採取用具である。

漁船に１～２人乗り込み漁場に着くと海底を箱メガネを使用しのぞき込む。ホタテの場合、砂地の所にいて、通常は口も少し開いた状態になっているが、敏感で１枚目を取り揚げると、まわりにいる物が口を閉じてしまうため、見きわめがむずかしく、コツがいる。

４本ヤス

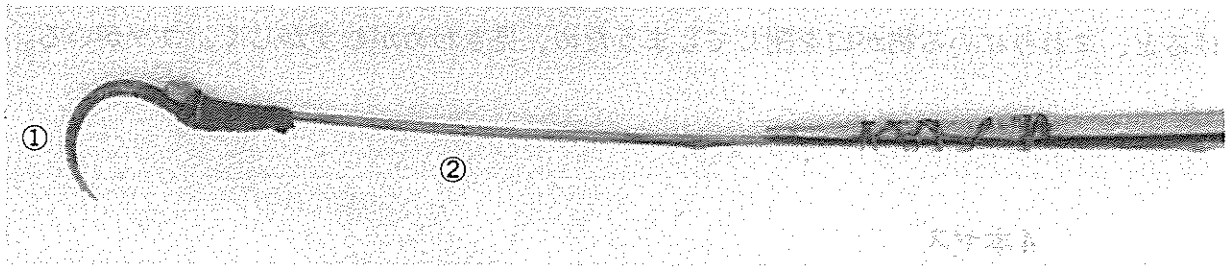




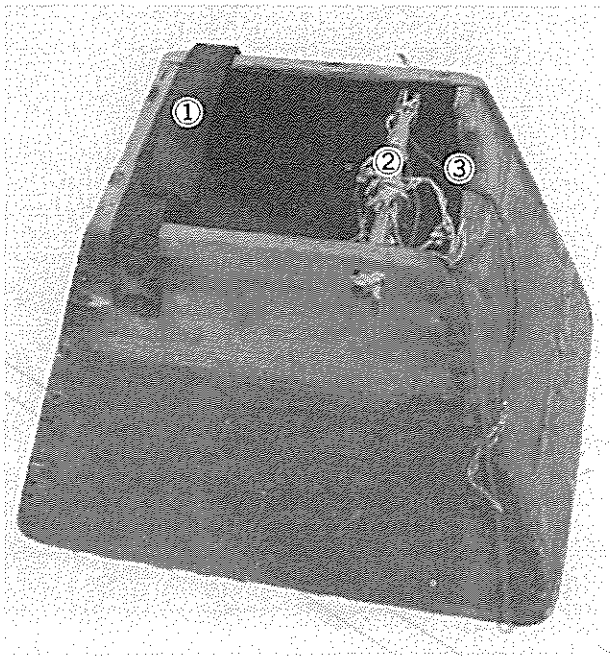

４本ヤス漁具見取図

## 28 ア ワ ビ 漁

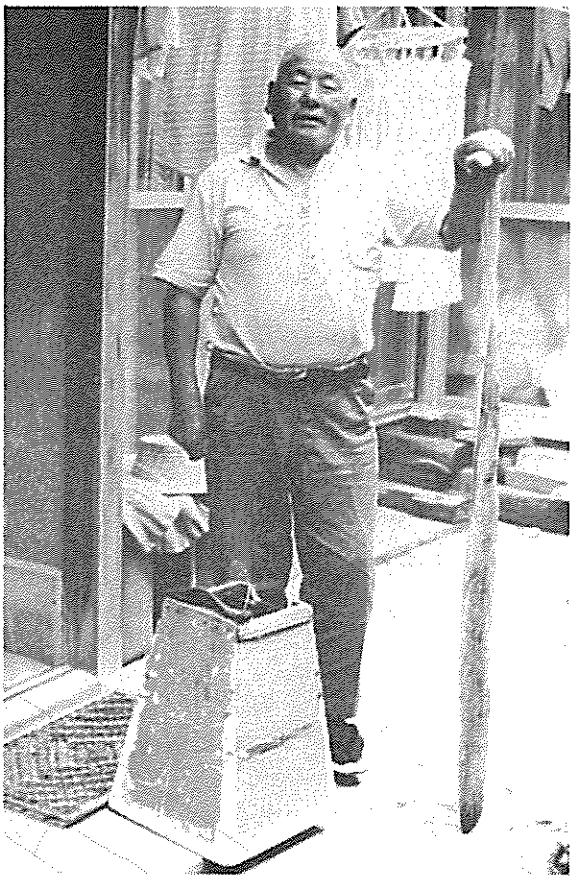
### カ　　ギ（女川町江の島）




アワビカギ（小竹浜）　①カギ　②コテ竹




箱ガラス（メガネ・佐須浜）
材料…ガラス．杉．ニカワ　使用法…海底のアワビ．ワカメなどを採取するとき除くのに用いる
①…ゴムに額を当てる　②…糸を口でくわえる
③…アゴあて
（箱ガラスのない時代はアワビやイカ、タコの油気のあるフを口にふくんで、水面にはき平にしてのぞく）



箱ガラス（メガネ）とネリガイ
（和船イッカイダナ用）　〈月浦浜〉

ナレ風（北西風）が吹く旧10月１日、女川町江の島では鮑の「口開け」（解禁日）である。

早朝、各浜に待機していた約60艘のサッパ（１枚棚の構造船）に分乗し、一斉に漁場に出航し、鮑を採取する。

採取した鮑は、浜で待っていた女の人々の生クサハチ（頭上運搬具）に載せ前の浜の波

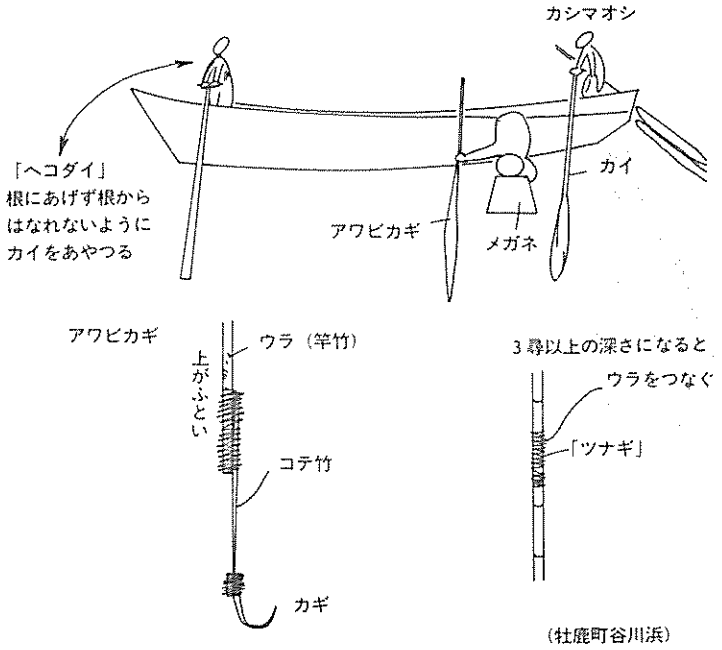
止場に運ぶ。

明治25、26年頃まではカツコと呼ぶ刳舟（丸木船から発達した準構造船）を用いた。この磯船は、重量があり安定が良く、岩礁にぶつかった時でもびくともせず鮑漁にも最適である。田代島仁斗田・牡鹿町小渕でも、カツコを用いた。

上記のサッパはシキ長(船底の長さで、船の大きめを決定)、18尺５寸で３人乗り、７尋(約10 m）の海底にいる大鮑を「メガネ」(底にガラスを貼った木箱）をのぞきアワビカギでひっかけ揚げる。牡鹿半島の裏浜の江の島、谷川浜はこの方法で漁をした。

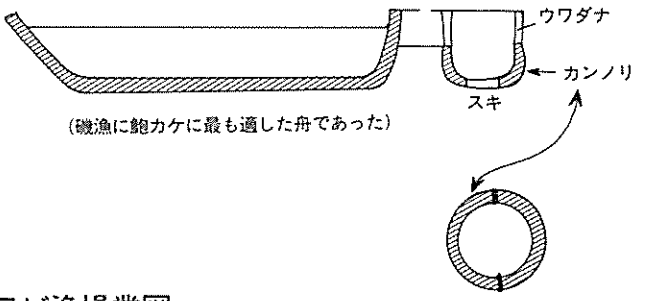
牡鹿半島の表浜の月浦・佐須浜ではシキ長10尺（丈もの）か14尺のイツカイダナ（月浦）・チョロコ（佐須浜）と呼ぶ小さいサッパ船に１人乗り、水深２～３尋（約4 m)、メガネを口にくわえ、左手で櫂をあやつり、右手にアワビカギを持って採取した。

田代島仁斗田ではワセンコと呼ぶタナヅキ型（２枚棚の構造船）に２人乗り、１人は櫓・櫂をあやつり、他の１人は鮑をとった。




（牡鹿町谷川浜）

和船（カッコ）



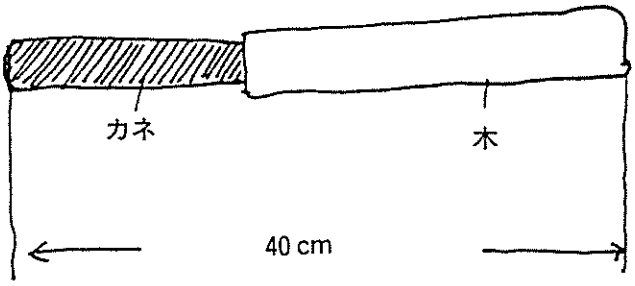

（磯漁に鮑カケに最も適した舟であった）

杉（モミ）の丸みの部分を使用

アワビ漁操業図

（田代島に斗田）

# ス モ グ リ（石巻市田代島）




（アワビをもぐってとる剝把具）

ナ サ シ

スカリ（ヤスカリ）

（男子（海士）が海底にいるアワビをはがし
とったのを入れるアミ袋、腰綱に結びつける）

田代島仁斗田浜では漁船動力化以前の旧漁業時代以来、海士による潜水により鮑のスモグリ漁が行われていた。

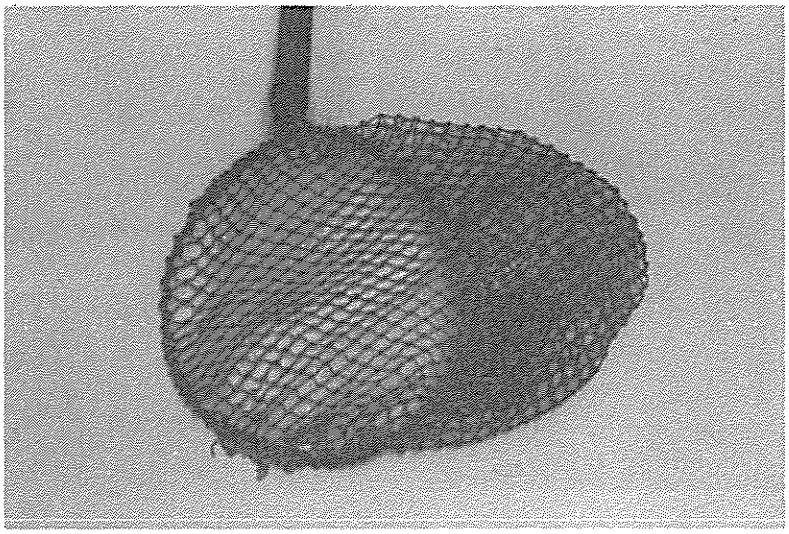
夏から秋にかけて、男子が深さ８尋位の海底についているアワビをナサシと呼ばれる長さ40 cmの剝把具をもってはぎとり、腰綱に結びつけているヤスカリ（スカリとも言う。――アワビを入れるアミ袋）に入れ、一ぱいになると水面に浮かび船に揚げる。船はカツコ（準構造船）で海士が船（カツコ）に乗ると火をたき、暖をとる。

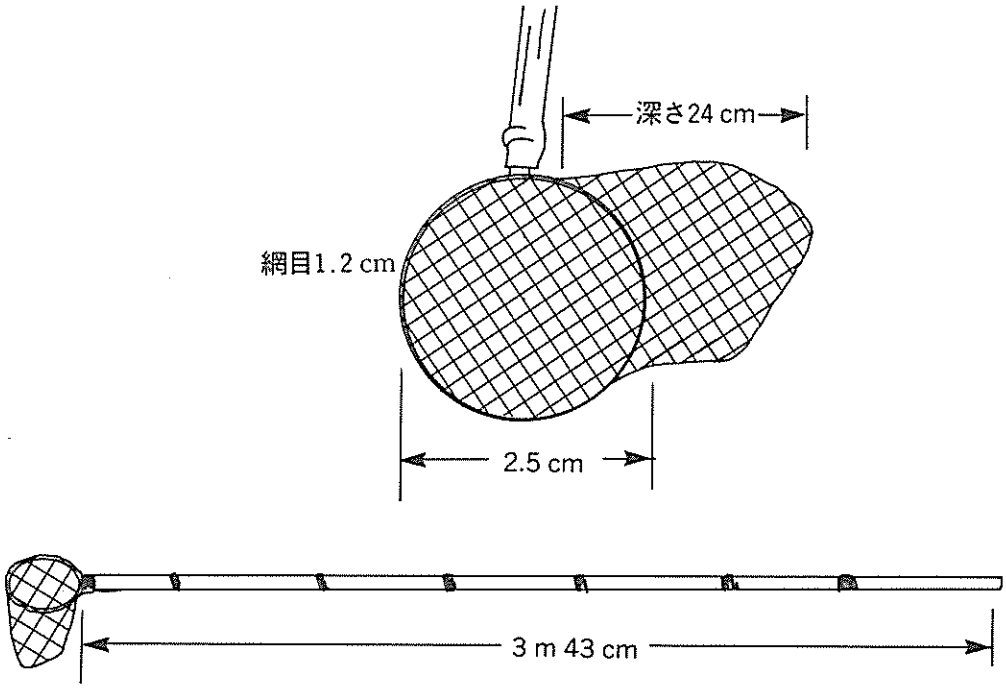
## 29　ウニ（ガゼ）すくい網（石巻市祝田）

ウニ（キタムラサキウニ）は、6～8月の2ケ月間漁獲される。

サデ（網）は、目合1.2 cm、口の直径は25 cm、深さ24 cm、口輪は太い針金を用いる。柄には竹を使用し、水深により長さを調整する。

和船に1～2人乗り込み、漁場に着くと箱メガネを使い海底をのぞきこみ水深の浅い所から網を使用し、ウニをすくい揚げる。





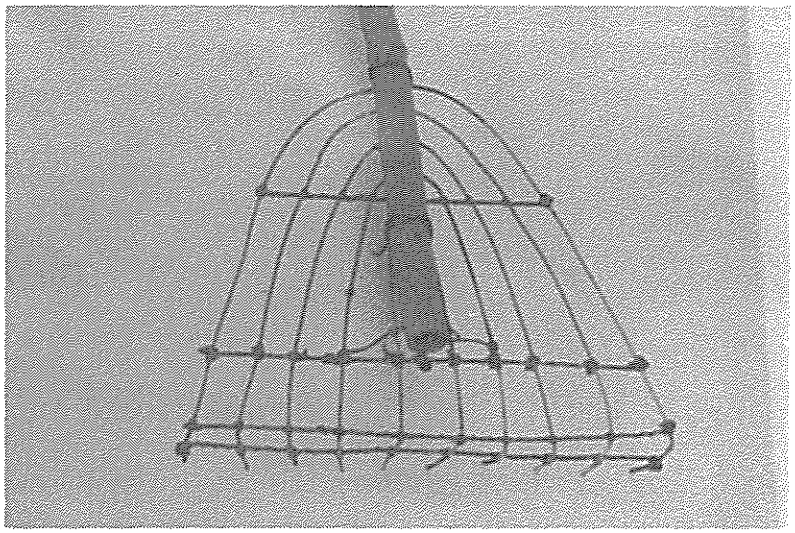

ウニ（カゼ）すくい網漁具見取図

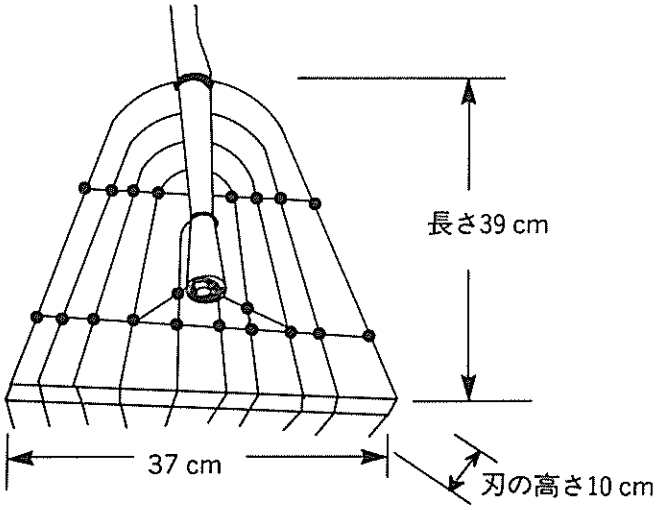
## 30　カ　ッ　ツ　ア（石巻市祝田）

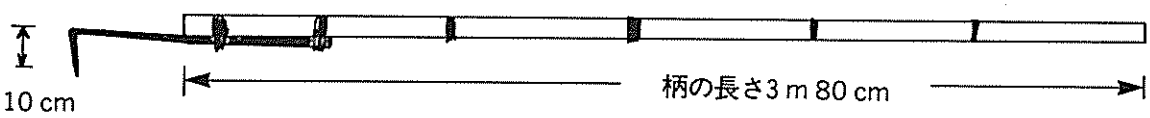
石巻市祝田で使用されたハギトリ具である。

くまでの部分は鉄でできており、柄には竹を用いるが水深によって長さを調整する。

出漁し漁場に致着すると、海中をのぞきこみ、イグサ（オゴモ）の繁茂している所を見つけると、カッツを降ろし引っかき取る。



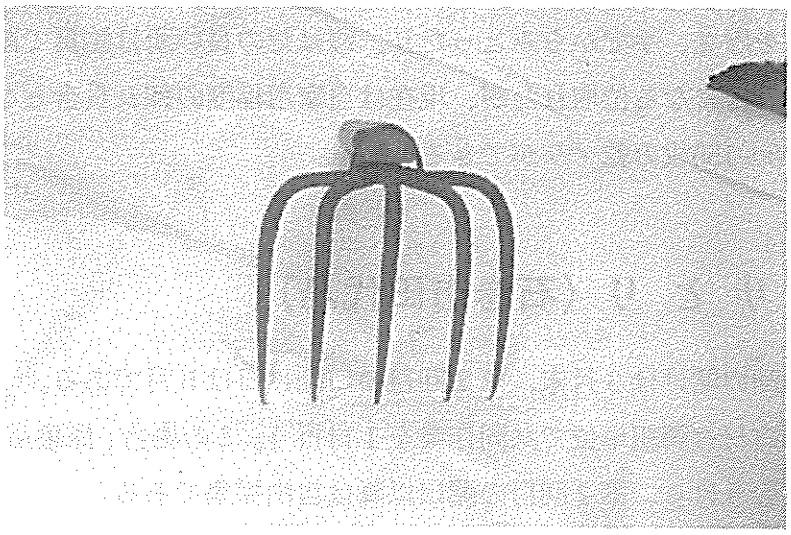


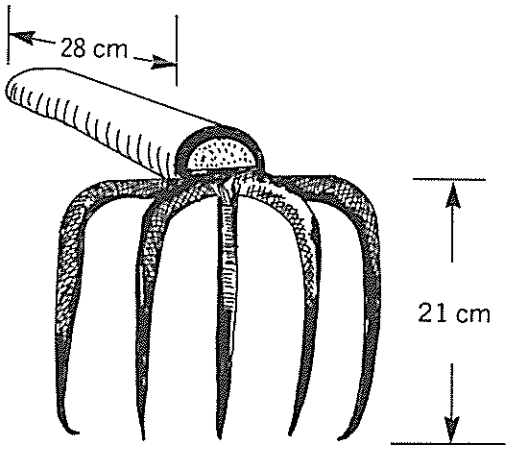




カッツア漁具見取図

## 31　ク　　マ　　デ（石巻市祝田）

石巻市祝田で使用。潮が下げた時、砂地の場所で大型の貝（オオノガイ）をさぐってとる漁具。






クマデ漁具見取図

# V　磯　　漁

## 1　磯ノリとり（石巻市田代島）

磯ノリ採集は１～４月の４ケ月間行われる。採集は、普通１ケ月に２回の口開け日（採集日）をもうけ、１回の口開け日数は１～２日間である。作業は女の仕事で、ツノコゾウリ（アシナガ）を履き、手でからみとったり、磯はだの良い所は鮑具で削り取る。昔は１回の採集で籠が一杯になる位取れたが、現在は自家用程度の採れ具合となっている。１貫目の磯ノリで100～150枚の乾ノリができる。

## 2　フノリとり（石巻市田代島）

フノリの第１回口開けは３月末、第２回目の口開け日は５月である。

第１回目の開口日は隣組単位で共同作業を１日行う。この場合、採集道具の取り決めや、採集漁の制限をもうける。第２回目の開口以降は自由採集である。

## 3　ヒジキとり（石巻市田代島）

ヒジキとりの開口日は４月中旬である。開口日後は自由採集に移る。

潮が下げると、全戸数から２～３人ずつ浜に出て大勢で鎌や包丁を使用し、刈りとりを行う。採集したヒジキは各人で乾燥し販売する。

## 4　ワカメとり（石巻市田代島）

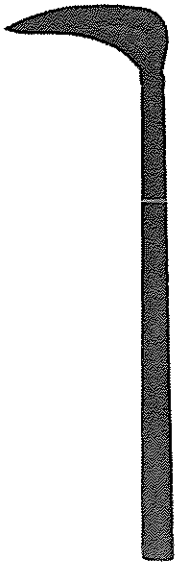
ワカメの開口日は６～７月である。５月は天候が悪いため、ワカメの採集に適さない日が多い。

開口日以降は自由採取である。和船をもっているものは箱メガネを使用し、長柄の鎌(草刈鎌に１丈位の竿を付けたもの）で刈り取り（男の仕事)、女は磯のワカメを刈り取る。

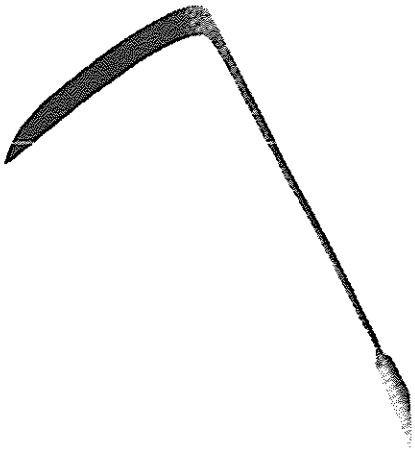
注……田代島大泊浜などでは、ワカメ切り鎌を鍛冶屋に注文して作らせた。

冬　期
磯物採取の女の仕事着（田代島仁斗田）

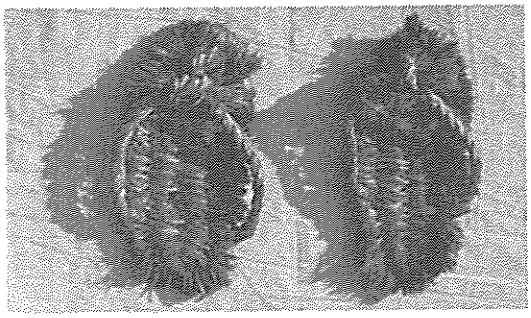
① 頭 …フランネルの風呂敷
②上体…長ソデ（ツネコ）
③下体…モモ引き
④ 足 …ソトカラクリの足袋・アシナガ



ワカメキリ鎌（海底の浅い所、草刈り鎌）



ワカメキリ鎌
（海底の深い所、竿をつなぎ舟から刈りとる。
鍛治屋に注文してつくらせた）



アシナガ（ツノコゾウリ）

# 編　集　後　記

漁村高齢者活力促進事業の一環として、前年度に引き続き今回は、地形的にも複雑であり、漁村数も多く、各種多様な漁業が見られる、中部地区の調査を行いました。

資料収集は、明治時代には行われていたものを中心とし、できるだけ当時の状況を記載するようにしました。詳細については当然個人差もあり、ある漁業者が、ある時点で使用していた漁具ということで、大方の目安となれば幸いです。又、現在行われていない漁法もあり、当時の記憶をたどったため、内容については幾分不明瞭の点もあるので、お許し願います。

次回は、北部地区の調査を行い、完結する予定です。

漁具、漁法の収集、その取りまとめについては各方面の御援助を得たが、特に河北町漁業協同組合所属の榊乙男氏、牡鹿町泊浜漁業協同組合所属の平塚薫氏、牡鹿町寄磯漁業協同組合所属の渡辺虎蔵氏、鮫浦漁業協同組合所属の伊藤茂氏、牡鹿町漁業協同組合所属の安住浩氏になみなみならぬ御尽力をいただきました。各氏は長年漁業に従事し、伝統的な漁具漁法に精通しておられました。心から感謝申し上げるとともに、敬意を表する次第です。また、日本民具学会所属の鈴木東行氏には、数々の貴重な資料の提供、ご指導、ご助言を賜りました。ここに深く敬意を表するものです。

平成元年３月

平成元年3月31日　印　刷
平成元年3月31日　発　行

発行所　宮城県水産試験場
〒986－21　宮城県石巻市長浜町11番6号
TEL　石巻0225(24)0138

印刷所　㈲遠山プリント
仙台市青葉区木町通り2丁目5番24号
TEL　仙台022(272)7371